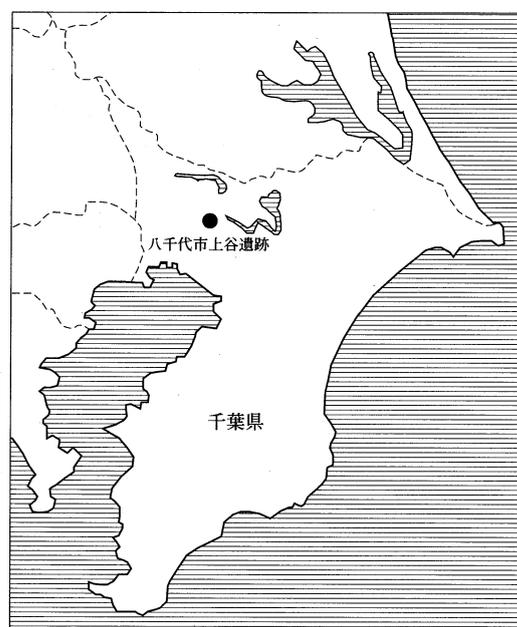


千葉県八千代市

上谷遺跡

(仮称) 八千代カルチャータウン開発事業関連埋蔵文化財調査報告書Ⅱ

— 第1分冊 本文編 —



2005

大成建設株式会社

八千代市遺跡調査会

例 言

1. 本書は、『千葉県八千代市上谷遺跡（仮称）八千代カルチャータウン開発事業関連関連埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』である。
2. 上谷遺跡を5つの地区に分割し、各地区ごとに報告し、報告書は上谷遺跡で5分冊となっている。
3. 本書は、上谷遺跡全5分冊のうちの第1分冊の本文編である。2001年度に刊行した『第1分冊』と遺構図等に若干の異同があるが、本書を参考とされたい。なお、本書で報告する地区は、上谷遺跡のI地区である。
4. 上谷遺跡は、千葉県八千代市保品字上谷1786外に所在する。
5. 上谷遺跡の発掘調査及び整理作業は、大成建設株式会社の委託により、千葉県教育委員会・八千代市教育委員会の指導のもと、八千代市遺跡調査会が実施した。
6. 整理作業及び報告書刊行作業は、朝比奈竹男・宮澤久史が担当し、平成16年6月1日～平成17年3月31日までの期間実施した。
7. 遺物実測については、八千代市遺跡調査会が行ったものと株式会社東京航業研究所に委託したものがある。委託実測については、佐々木藤雄・今井千恵・飯野正子・水野藍の各氏の手を煩わせた。
8. 本書の執筆・編集は朝比奈竹男が行った。また、遺物観察表については武藤健一が編集した表を使用した。
9. 本書の図版作成及び編集・レイアウト作業は、一部を除き、DTP(Desktop Publishing=コンピュータによる版下作成)システムによるデジタル化を図り、八島大介の指導のもと伊勢田めぐみ（株式会社東京航業研究所）が担当した。
10. 発掘調査における遺構図・全測図・地形図の作成は、要航業株式会社・株式会社東京航業研究所が行った。
11. 整理作業及び報告書刊行作業におけるDTPシステムによるデジタル化作業全般において、株式会社東京航業研究所の協力を得た。
12. 発掘調査に伴う出土品及び図面・写真等の記録類は、八千代市教育委員会が保管している。
13. 出土文字資料の判読・解説については、国立歴史民俗博物館平川南教授にご教授いただいた。
14. 発掘調査から本書の刊行に至るまで下記の機関及び諸氏をはじめとする多くの方々からご指導、ご協力を賜りました。記して感謝の意を表します。（五十音順・敬称略）

千葉県教育庁文化財課・（財）印旛郡文市化財センター・（財）千葉県文化財センター

（財）千葉市教育振興財団埋蔵文化財センター・東京成徳大学・八千代市教育委員会

八千代市郷土博物館

青沼道文・阿部寿彦・安藤広道・大沢孝・小川和博・小笠原永隆・小倉淳一・柿沼修平・加藤孝

川端弘士・菊池健一・黒沢浩・郷堀英司・佐藤順一・関口達彦・田形孝一・高花宏行・田川良

田中英世・中村俊夫・中本直士・平川南・深谷昇・藤岡孝司・増尾伸一郎・峰村篤・村松篤

山岸良二・渡辺俊一郎

目次

例言

表目次

挿図目次

第1章 遺構及び遺物	1
序節 本書の概要	1
第1節 遺構の時代別概要	1
第2節 縄文時代	2
第3節 弥生時代	13
第4節 古墳時代	26
第5節 奈良・平安時代	33
第6節 中近世以降	44
第2章 小 結	92

報告書抄録

挿 図 目 次

図1 上谷遺跡 I 地区縄文時代遺構配置図	3	図20 F003	9
図2 A038	4	図21 F004	9
図3 D004	4	図22 F005	10
図4 D005	5	図23 F006	10
図5 D010	5	図24 F007	11
図6 D013	5	図25 F008	12
図7 D015	5	図26 F009	12
図8 D016	6	図27 F010	12
図9 D017	6	図28 F011	12
図10 D022	6	図29 F012	13
図11 D023	6	図30 F013	13
図12 D026	7	図31 F014	13
図13 D028	7	図32 F015	13
図14 D029	7	図33 F016	14
図15 D030	8	図34 F017・F018	14
図16 D040	8	図35 F019	15
図17 D041	8	図36 F020	16
図18 F001	8	図37 F021	16
図19 F002	9	図38 F022	16

図39	F023	16	図79	A062	40
図40	F024	17	図80	A064	41
図41	F025	17	図81	A065	42
図42	F026	17	図82	A066	42
図43	F027	18	図83	A067	43
図44	F028	18	図84	C001	44
図45	F029	19	図85	C002	44
図46	F030	19	図86	D009	45
図47	F031	19	図87	上谷遺跡 I 地区古墳時代遺構配置図	46
図48	上谷遺跡 I 地区弥生時代遺構配置図	20	図88	A004	47
図49	A001	21	図89	A006	47
図50	A002	22	図90	A007	48
図51	A003	22	図91	A010	49
図52	A005	22	図92	A011	50
図53	A008	23	図93	A012	51
図54	A009	24	図94	A014	51
図55	A013	25	図95	A017	52
図56	A015	25	図96	A019	53
図57	A016	26	図97	A031	54
図58	A018	27	図98	A033	55
図59	A020	28	図99	A068	56
図60	A022	28	図100	A069	56
図61	A028	29	図101	D006	57
図62	A029	29	図102	D011	57
図63	A032	30	図103	上谷遺跡 I 地区 奈良・平安時代遺構配置図	58
図64	A042	31	図104	A021a.b	59
図65	A043	31	図105	A023	60
図66	A045	32	図106	A024	61
図67	A046	33	図107	A025	63
図68	A047	33	図108	A026	64
図69	A048	35	図109	A027	65
図70	A051	35	図110	A030	67
図71	A052	36	図111	A034	67
図72	A053	36	図112	A035	68
図73	A054	36	図113	A036	69
図74	A055	37	図114	A037	70
図75	A056	38	図115	A039	71
図76	A057	38	図116	A040	72
図77	A060	39	図117	A041	74
図78	A061	40			

図118 A044	75	図140 D033	86
図119 A049	76	図141 D034	87
図120 A050	77	図142 D035	87
図121 A058	78	図143 D036	87
図122 A059	78	図144 D037	87
図123 A063	79	図145 D039	87
図124 A070	80	図146 上谷遺跡 I 地区	
図125 A071	80	中世以降遺構配置図	88
図126 A072a.b	81	図147 D001	89
図127 B001	83	図148 D014	89
図128 B002	83	図149 D018	89
図129 B003	83	図150 D019	89
図130 B004	84	図151 D020	90
図131 B005	84	図152 D021	90
図132 D002	85	図153 D032	90
図133 D003	85	図154 D038	90
図134 D007	85	図155 E001・E002	91
図135 D008	85	図156 弥生時代竪穴住居跡の方位と規模	93
図136 D012	85	図157 弥生時代竪穴住居跡の平面規模	93
図137 D025	86	図158 古墳時代竪穴住居跡の方位と規模	95
図138 D027	86	図159 古墳時代竪穴住居跡の平面規模	95
図139 D031	86	図160 上谷地区墨着土器等出土遺構	97
		図161 「得」「万・廿万」の出土遺構	97

表 目 次

表 1 上谷遺跡新旧遺構番号対照表	2	表15 F017遺物観察表	15
表 2 A038遺物観察表	4	表16 F018遺物観察表	15
表 3 D013遺物観察表	5	表17 F019遺物観察表	15
表 4 D023遺物観察表	7	表18 F020遺物観察表	16
表 5 D024遺物観察表	7	表19 F025遺物観察表	17
表 6 D041遺物観察表	8	表20 F026遺物観察表	17
表 7 F002遺物観察表	9	表21 F027遺物観察表	18
表 8 F005遺物観察表	10	表22 F028遺物観察表	18
表 9 F006遺物観察表	10	表23 F029遺物観察表	19
表10 F007遺物観察表	11	表24 F030遺物観察表	19
表11 F010遺物観察表	12	表25 A001遺物観察表	21
表12 F011遺物観察表	12	表26 A002遺物観察表	22
表13 F012遺物観察表	13	表27 A005遺物観察表	23
表14 F015遺物観察表	14	表28 A008遺物観察表	23

表29	A013遺物觀察表	25	表69	A031遺物觀察表	54
表30	A015遺物觀察表	26	表70	A033遺物觀察表	55
表31	A026遺物觀察表	26	表71	A068遺物觀察表	56
表32	A018遺物觀察表	27	表72	A039遺物觀察表	57
表33	A020遺物觀察表	28	表73	D011遺物觀察表	57
表34	A022遺物觀察表	28	表74	A021a遺物觀察表	59
表35	A028遺物觀察表	29	表75	A021b遺物觀察表	60
表36	A029遺物觀察表	29	表76	A023遺物觀察表	61
表37	A032遺物觀察表	30	表77	A025遺物觀察表	61
表38	A042遺物觀察表	31	表78	A025遺物觀察表	63
表39	A043遺物觀察表	31	表79	A026遺物觀察表	64
表40	A045遺物觀察表	32	表80	A027遺物觀察表	65
表41	A046遺物觀察表	33	表81	A030遺物觀察表	67
表42	A047遺物觀察表	34	表82	A034遺物觀察表	68
表43	A048遺物觀察表	35	表83	A035遺物觀察表	68
表44	A051遺物觀察表	35	表84	A036遺物觀察表	69
表45	A052遺物觀察表	36	表85	A037遺物觀察表	70
表46	A053遺物觀察表	36	表86	A039遺物觀察表	71
表47	A054遺物觀察表	37	表87	A040遺物觀察表	73
表48	A055遺物觀察表	37	表88	A041遺物觀察表	74
表49	A056遺物觀察表	38	表89	A044遺物觀察表	75
表50	A057遺物觀察表	38	表90	A049遺物觀察表	76
表51	A060遺物觀察表	39	表91	A050遺物觀察表	77
表52	A061遺物觀察表	40	表92	A058遺物觀察表	78
表53	A062遺物觀察表	40	表93	A059遺物觀察表	79
表54	A064遺物觀察表	41	表94	A063遺物觀察表	79
表55	A065遺物觀察表	42	表95	A070遺物觀察表	80
表56	A066遺物觀察表	43	表96	A071遺物觀察表	81
表57	A067遺物觀察表	43	表97	A072a遺物觀察表	82
表58	C002遺物觀察表	44	表98	A072b遺物觀察表	82
表59	D009遺物觀察表	45	表99	B001遺物觀察表	83
表60	A004遺物觀察表	47	表100	B004遺物觀察表	84
表61	A006遺物觀察表	48	表101	B005遺物觀察表	84
表62	A007遺物觀察表	48	表102	D003遺物觀察表	85
表63	A010遺物觀察表	49	表103	D025遺物觀察表	86
表64	A011遺物觀察表	50	表104	D031遺物觀察表	86
表65	A012遺物觀察表	51	表105	D001遺物觀察表	89
表66	A014遺物觀察表	51			
表67	A017遺物觀察表	53			
表68	A019遺物觀察表	53			

第1章 遺構及び遺物

序節 本書の概要

上谷遺跡Ⅰ地区における調査の概要と各時代の遺構・遺物の実測図などについては、すでに第1分冊において報告したところではある。ここでは「本文編」とし、遺構を中心にその概要を報告するとともに、遺物観察表を掲載することとした。紙数に限りがあるため、詳細な報告はできないがご寛恕いただきたい。

第1節 遺構の時代別概要

縄文時代 Ⅰ地区の縄文時代の遺構は早期・条痕文期の竪穴住居跡1軒、土坑16基、炉穴31基であった。早期・条痕文期を主体として、遺構としては炉穴を主体としている。

炉穴の検出傾向は台地上平坦地から斜面部の始まりに認め、Ⅰ地区の調査区中央からⅡ地区にかけて検出した。出土遺物から野鳥期を主体とした遺構である。

土坑は出土遺物が少なく時代・時期を即断できなかったが、周辺の遺構状況や覆土の状態から判断する遺構が多かった。これらもまた、縄文早期・条痕文期を主体として捉えた。また、竪穴住居跡の掘込みが確認できず土坑として報告したが、中期・加曾利E期の炉跡と埋甕と捉えられる遺構が検出されている。

弥生時代 本地区の弥生時代の検出遺構は竪穴住居跡35軒、方形周溝墓2基、土坑1基であった。検出傾向は調査区の中央から東側の台地緩斜面にかけて検出しており、Ⅱ・Ⅲ地区への空白帯が生じている。

古墳時代 本時代の遺構も竪穴住居跡10軒の検出であった。概括的に見ると、検出地区はⅠ地区の中央から北側の中央に半円状の分布傾向を有していた。住居跡の規模は大きく大型と中型に捉えられるようであった。

奈良・平安時代 上谷遺跡Ⅰ地区の主体を占める時代である。竪穴住居跡25軒、掘立柱建物跡5棟、土坑14基が検出されている。

竪穴住居跡は2軒を除き、Ⅰ地区の中央から南側に検出されている。調査区南西は検出されず、大きく弧状を描き、半月状である。

掘立柱建物跡は竪穴住居跡群内の空白帯に検出され、1棟のみが竪穴住居跡との重複を認めた。

土坑は掘立柱建物跡の柱穴に近似するものがあるが、配列が整わず単独の土坑として扱ったものがある。検出状況はいくつかの纏まりをもって検出している。

中世以降 中世以降及び近世、近代に至る遺構をまとめたが、その所属時代を判別することは困難であった。検出された遺構は、土坑8基、溝2条であった。

土坑の検出状況は散在しており、台地平坦面から斜面部が始まる地点に点在して検出される傾向が窺えた。また、炭窯というより炭(焼)穴に近い遺構が6基とその主体を占めている。

溝は近代の所産と捉えられたが、林地と畑地との開墾の拡大などの土地利用の変遷が窺え、近代以降の耕作地の拡大などを示しているものと思われた。

以上、上谷遺跡Ⅰ地区の時代別概観を記したが、奈良・平安時代時代の集落廃絶後は、集落よりは生産場所としての土地利用が窺えるものであった。

表1 上谷新旧遺構番号对照表

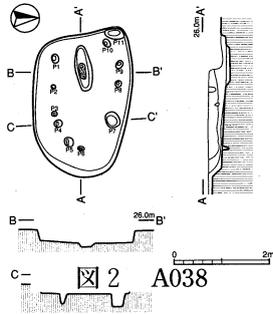
旧番号	新番号	旧番号	新番号	旧番号	新番号	旧番号	新番号
23-001a	A070	24-013	A062	25-008	A041	26-037	D017
23-001b	D031	24-014	A063	25-009	A042	27-001	A011
23-002	A071	24-015	A064	25-010	A043	27-002	A012
23-003a	A072a	24-016	A065	25-011a	A044	27-003	A013
23-003b	A072b	24-017	D018	25-011b	A045	27-004	A014
23-004	D032	24-018	D019	25-012	A046	27-005	A015
23-005	D033	24-019	D020	25-013	A047	27-006	A016
23-006	D034	24-020	D021	25-014	A048	27-007	A017
23-007	D035	24-021	A066	25-015	A049	27-008	A018
23-008	D036	24-022	B005	25-016	F005	27-009	A019
23-009	D037	24-023	A067	25-017	F006	27-010	A020
23-010	D038	24-024	C002	25-018	F007	27-011	E001
23-011	F019	24-025	A068	26-001	A024	27-012a	A021a
23-013	F020	24-026	A069	26-002	F002	27-012b	A021b
23-014	D039	24-027	F008	26-003	C001	27-013	A022
23-015	F021	24-028	F009	26-004	A025	27-014a	A023
23-016	F022	24-029	D022	26-005	A026	27-014b	D002
23-017	F023	24-030	F010	26-006	A027	27-015	E002
23-018	F024	24-031	F011	26-007	A028	27-016	D003
23-019	D040	24-032	F012	26-008	A029	27-017	D004
23-020	D041	24-033	F013	26-009	A030	27-018	F001
23-021	F025	24-035	F014	26-010	A031	27-019	D005
23-022	F026	24-037	D023	26-011	A032	27-020	D006
23-023	F027	24-038	D024	26-012	A033	27-021	D007
23-024	F028	24-039	D025	26-013	A034	28-001	A001
23-025	F029	24-040	D026	26-014	A035	28-002	A002
23-026	F030	24-041	D027	26-015	A036	28-003	A003
23-027	F031	24-042	D028	26-016	A037	28-004	A004
24-001	A050	24-043	D029	26-018	D008	28-005	A005
24-002	A051	24-044	F015	26-020	A038	28-006	A006
24-003	A052	24-045	F016	26-025	D009	28-007	A007
24-004	A053	24-046	F017	26-026	F003	28-008	A008
24-005	A054	24-047	F018	26-027	F004	28-009	A009
24-006	A055	24-048	D030	26-029	D010	28-010	A010
24-007	A056	25-001	A039	26-030	D011	28-011	D001
24-008	A057	25-002	B001	26-031	D012	26-004B	D365
24-009	A058	25-003	B002	26-032	D013		
24-010	A059	25-004	B003	26-033	D014		
24-011	A060	25-005	B004	26-035	D015		
24-012	A061	25-007	A040	26-036	D016		



図1 上谷遺跡縄文時代遺構配置図

第2節 縄文時代

第1項 竪穴住居跡



A038

遺構 西壁側は直線的に、東壁側は曲線的になる不整形の遺構である。壁は東壁はなだらかに、他の壁はやや垂直的に立上がっている。床はハードローム上部の地床で略平坦であるが、硬化面は認められなかった。柱穴は11基が検出されたが、柱穴配置は不明瞭である。柱穴覆土は何れも褐色土であり、ロームを包含する。炉は長楕円形で、凹み状のピットである。焼土粒を疎らに含むが、明確な火床は認められなかった。住居跡覆土は色調を基本に2層に分層し、暗褐色土・褐色土と捉えた。

遺物 早期・条痕文片が比較的多く出土している。

所見 確認調査時には検出されず、不明瞭な遺構である。炉の検出により竪穴住居跡と捉えた。

表2 A038遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	縄文 深鉢	口唇 外反し尖頭状 口縁は波状口縁か? 外面 横位の条痕 内面 擦痕状の横位の条痕	暗褐色 普	繊維	口縁片	
2	縄文 深鉢	口唇 角頭状 外面 擦痕状の条痕文 内面 茎状工具?による横位の擦痕状の条痕	明暗褐色 普	繊維	口縁片	
3	縄文 深鉢	口唇 内削ぎ状となり、やや外反 外面 粗の斜位の条痕 指頭押さえ 内面 ナデに近い擦痕	明暗褐色 普	砂粒	口縁片	
4	縄文 深鉢	外面 斜位の間隔の密な丁寧な条痕 内面 茎状工具による縦位の擦痕状の条痕 指頭オサエ	明黄褐色 硬	繊維	胴部片	
5	縄文 深鉢	外面 縦位の条痕 内面 斜位・横位の条痕	明暗褐色 硬	繊維	胴部片	
6	縄文 深鉢	外面 比較的丁寧な斜位の条痕 内面 横位の条痕	明暗褐色 普	繊維	胴部片	
7	縄文 深鉢	外面 微隆起による区画 区画内は沈線? 区画外はミガキ 内面 茎状工具による擦痕状の条痕	暗褐灰色 硬	繊維	口縁片	
8	縄文 深鉢	外面 ナデに近い擦痕状 指頭オサエ 内面 表面剥離著しく観察不能	明暗褐色 普	繊維 砂粒	胴部 下半	

第2項 土坑

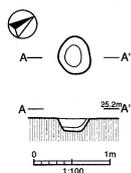


図3 D004

D004

遺構 坑底は平坦であり壁の立上がりは急な土坑である。覆土は自然堆積であり色調によって暗褐色土・褐色土の2層に捉え、何れもロームを僅少含んでいた。

遺物 土器片は出土しないが、確認面においてハイガイが数点出土する。

所見 ハイガイの出土から早期から前期の土坑と捉えられるが、周辺の遺構状況等から早期・条痕文期の遺構と捉えた。

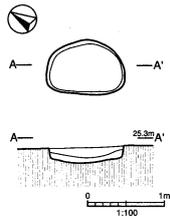


図4 D005

D005

遺構 坑底中央が壁際より凹む土坑である。壁は坑底から急激に立上がっている。覆土は自然堆積であり、色調により暗褐色土と褐色土の2層と捉え、何れもロームを僅少含むものであった。

遺物 出土遺物は無かった。

所見 時代・時期を決定する遺物の出土はないが、D004の覆土と近似すること等から、早期・条痕文期の所産と捉えた。

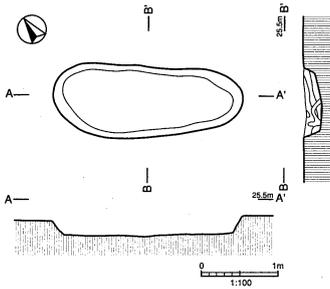


図5 D010

D010

遺構 緩やかな凹凸がある坑底であり、ソフトロームを坑底としている。壁は坑底からやや急に立上がっている。覆土は、黒褐色土・暗褐色土・褐色土を主体とした3層に捉えた。

遺物 出土した遺物は無かった。

所見 調査時には伸展葬の墓壙かとも想定された土坑であるが、墓壙とは捉えられなかった。覆土等から縄文時代の土坑と捉えたが、プランが明瞭であり、新しい時代の所産かとも考えられる遺構である。

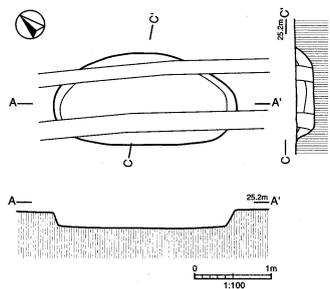


図6 D013

D013

遺構 坑底は略平坦であるが、若干凹凸を認める土坑である。壁は緩やかに彎曲して立上がっている。覆土は暗褐色土・褐色土と捉えた。

遺物 撚糸文土器片が若干出土しているが、遺構内に耕作痕が大きく残るため、本土坑に伴う遺物であるか判然としなかった。

所見 D010に類似する土坑であり、覆土から縄文時代と捉えたが、時代は動くかもしれない。

表3 D013遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	縄文 深鉢	口縁 肥厚 外面 口唇直下から間隔の密な撚糸文	暗褐色 普	砂	口縁片	
2	縄文 深鉢	口縁 肥厚 外面 口唇直下から間隔の密な撚糸文	明褐色 良	砂多	口縁片	補修孔を有す
3	縄文 深鉢	口縁 肥厚し、やや内向 外面 口唇直下からやや粗な撚糸文	暗褐色 良	砂	口縁片	

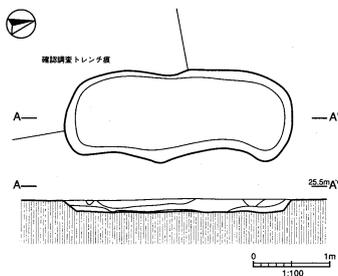


図7 D015

D015

遺構 ソフトロームを掘込み、緩やかな凹凸ある坑底ではあるが、略平坦である。東壁際中央に向かってやや凹んでおり、壁はなだらかな立上がりであった。覆土は自然堆積であり、色調・包含物によって1・2層・暗褐色土、3層・褐色土と捉えた。

遺物 提示できる遺物はなかった。

所見 覆土から縄文時代の土坑と捉えた。用途不明の土坑であるが、早期・条痕文期の所産かも知れない。

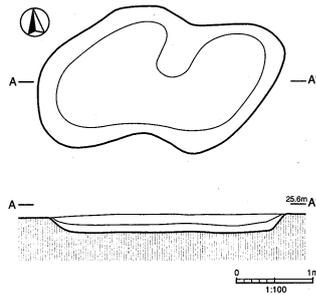


図8 D016

D016

遺構 ソフトローンを掘込み、北壁側から中央にかけて緩やかに下る坑底であり、また、西壁際に比し東壁側が低い坑底でもある。覆土は自然堆積であり、色調から1層・暗褐色土、2層・褐色土と捉えた。

遺物 提示できる遺物はなかった。

所見 覆土から縄文時代の土坑と捉えた。坑底の形状から2基の重複かとも考えられたが、覆土では捉えられず、単独の土坑とした。

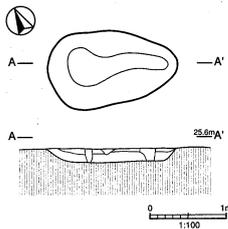


図9 D017

D017

遺構 ソフトローンを掘込み坑底として、壁はなだらかに立上がっている。覆土は自然堆積を基本として、焼土が滲んでいる1層・暗赤褐色土、2層・暗褐色土、2層・褐色土と捉えた。

遺物 提示できる遺物はなかった。

所見 遺構確認では焼土が滲んだように検出された。しかし火床は検出されず土坑とした。覆土より早期・条痕文期の所産とした。

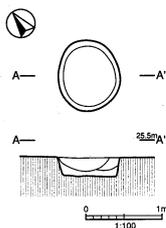


図10 D022

D022

遺構 坑底は略平坦であり、壁は垂直に立上がる。覆土は自然堆積であり、ローンを少含する褐色土であるが、若干の色調差で分層した。

遺物 早期・撚糸文片が2片出土が、流込みと判断した。

所見 覆土から縄文時代の土坑と捉えたが、出土遺物の時期の土坑とは遺構の遺存状態からは捉えられないものであった。

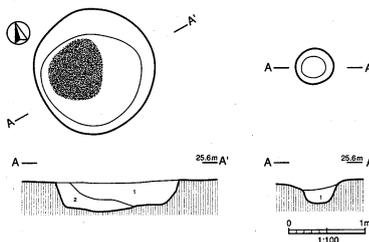


図11 D023

D023

遺構 ソフトローンを掘込んだ遺構であり、坑底に赤色硬化の強い火床を検出した。覆土は、焼土を微含する1層暗褐色土と2層褐色土が捉えられた。

遺物 中期・加曾利E3式の深鉢片が出土している。

所見 遺構確認面の下げ過ぎか、一見、炉穴の様に見える遺構である。周囲には床と捉えられる硬化面は検出できなかったが、D024との近接から竪穴住居跡の炉跡と捉えられる。中期・加曾利E3期の所産である。

D024

遺構 ソフトローンを小さく掘込み、深鉢を埋めた遺構である。覆土は深鉢の埋置のため捉えきれず、ローンを微含する暗褐色土1層のみ捉えた。

遺物 無節縄文を施文した深鉢である。土器はやや傾いて出土している。

所見 当初は単独の埋甕と捉えたが、D023との近接から同一の竪穴住居跡の埋甕と判断した。D023の炉跡に対する埋甕と捉えるが、竪穴住居跡としての床の硬化面等は、D024周辺にも確認できず、柱穴等も検出できなかった。このため別個の遺構として報告した。

表4 D023遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	縄文 深鉢	口縁に幅のある沈線を1条浅く巡らす 沈線以下の胴部は単節縄文	黄褐色 軟	砂粒多	口縁～ 胴部	2、3と同一固体
2	縄文 深鉢	口縁に幅のある沈線を1条浅く巡らす 沈線以下の胴部は単節縄文	黄褐色 軟	砂粒多	口縁～ 胴部	
3	縄文 深鉢	単節縄文	黄褐色 軟	砂粒多	胴部片	
4	縄文 深鉢	縄文を施した後、沈線を垂下させ、沈線間を磨消す 単節縄文	明褐色 普	砂粒	胴部片	
5	縄文 深鉢	単節縄文を施す	明暗褐色 普	砂粒	胴部片	
6	縄文 深鉢	単節縄文を施す	暗褐色 ～黒褐色 普	砂粒多	胴部 下半	

表5 D024遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	縄文 深鉢	260×-×(205) 口縁に隆帯を貼付し巡らす。以下、無節縄文を施す	暗褐色 普	砂粒多	2/3 底部欠	埋甕

D026

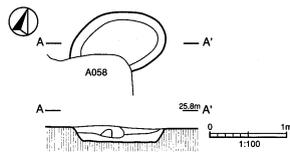


図12 D026

遺構 坑底は緩やかな凹凸を有し、壁はなだらかに立上がる土坑である。A058と重複し遺存状態はやや悪い。覆土は、ロームを微含する暗褐色土であるが、若干の色調の異なりによって2層に捉えた。

遺物 揭示すべき遺物の出土は無かった。

所見 覆土等から縄文時代と捉えたが、時期は判然としなかった。

D028

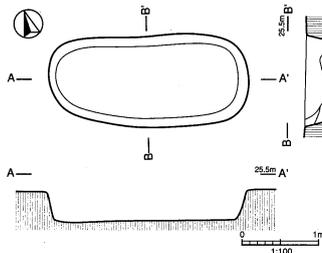


図13 D028

遺構 坑底は平坦であり壁の立上がりは急で垂直に近いものであった。覆土はロームを少含する褐色土であり若干の色調の異なりから3層に捉えた。攪乱が大きく堆積状態は判然としないが、自然堆積と考えられる。

遺物 中期末葉から後期初頭の土器片が数片出土している。

所見 調査では条痕文期の所産と捉えていたが、出土遺物から中期・加曾利E期の所産と捉えた。

D029

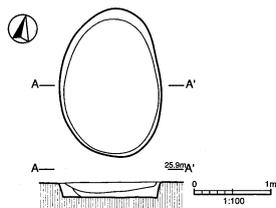


図14 D029

遺構 ソフトロームを掘込んだ坑底は緩やかな凹凸を有し、壁の立上がりは垂直に近いものである。覆土はロームを微含する暗褐色土で、自然堆積であるが、若干の色調の異なりから3層に捉えた。

遺物 中期末葉から初頭の土器片が数片出土している。

所見 調査ではD028と同じく条痕文期の所産と捉えていたが、出土遺物から中期・加曾利E期の所産と捉えた。

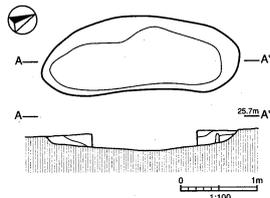


図15 D030

D030

遺構 遺構検出時に北壁側に滲んだ様に焼土を認めたが、覆土上層に堆積しているのみであった。坑底は緩やかに凹凸を有し、壁は西壁側はなだらかに東壁側は垂直に近い立上がりである。覆土は色調などで6層に分層した。焼土堆積層以外はローム包含等の量的差はあるが、褐色土を主体としている。

遺物 早期・条痕文片が若干出土している。

所見 当初は略円形と捉えたが、調査の進行に伴い長楕円形となった。平面形が捉えにくい土坑である。覆土及び出土遺物から早期・条痕文期の所産と捉えた。焼土堆積を認めたが、明確な火床を検出せず、炉穴とは断定できなかったため土坑とした遺構である。

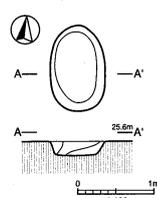


図16 D040

D040

遺構 坑底から壁にかけて、丸みをもって立上がっている。覆土はそれぞれロームを含んだ1層暗褐色土、2層黒褐色土、3層暗黄色土の人為堆積であった。

覆土は西壁際から暗褐色土・黒褐色土・暗黄褐色土の3層に捉えた。

遺物 小礫が1点出土したのみあった。

所見 覆土等から早期・条痕文期の所産と捉えた。覆土は東側から投入した様な状態であった。

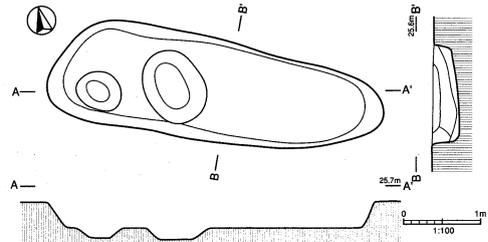


図17 D041

D041

遺構 壁の立上がりは急な土坑であり、坑底は北壁側がやや高く東壁側に次第に下っていく。覆土は色調・包含物をもとに4層に分層し、3層は黒褐色土であるが、1・2・4層は色調が若干異なる、ロームを含む暗褐色土であった。

遺物 早期・条痕文片が若干出土している。1は擦痕状の土器片錘である。

所見 覆土及び遺物より早期・条痕文期の土坑と捉えた。

表6 D041遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土製品 土器片錘	長径78×短径(68)×厚さ14 短径中央に対応して2ヶ所の切込み 本来は方形に近いか? 外面 茎状工具による擦痕状 内面 ナデに近い擦痕	明褐色 硬	繊維少	略完形	深鉢胴部片を 再利用
2	縄文 深鉢	外面 横位の丁寧な条痕 内面 横位の条痕	明黄褐色 硬	繊維 砂粒多	胴部片	

第3項 炉 穴

F001

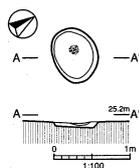


図18 F001

遺構 ソフトロームを坑底とし、壁はやや急に立上がっている。火熱痕は認められるが赤化には至らない火床が、坑底中央に1カ所認められた。覆土は色調を基本として、1層暗褐色土と2層褐色土と捉え、それぞれ焼土粒子を含んでいた。

遺物 出土しなかった。

所見 遺構状況等から小規模で、単独の炉穴と捉えた。

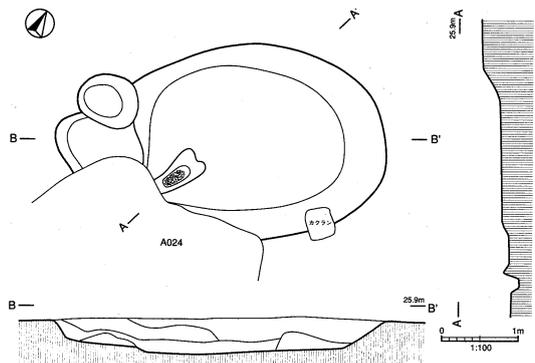


図19 F002

F002

遺構 a坑の南側に浅く掘込んだピット内に、ハードロームが赤化した小規模な火床を認めた。b・cには火床は認められなかった。覆土は色調を基本として暗褐色土・黒褐色土・暗褐色土を6層に捉えた。

遺物 a坑を主体に早期・条痕文変が出土する。

遺構 3坑の重複した遺構である。また、A024と重複する。確認面でのプランは明瞭であり、規模も弥生時代の堅穴住居跡と想定されるものであったが、壁・坑底とも捉えづらい遺構であった。火床を検出したことや出土遺物から、早期・条痕文期の炉穴と捉えなおした。

表7 F002遺物観察表

(単位mm)

No	種別器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調焼成	胎土	遺存	備考
1	縄文深鉢	口唇 キザミ やや角頭状となる 外面 微隆起による区画内に沈線を充填 内面 横位の密な条痕	明褐灰 普	繊維多	口縁片	
2	縄文深鉢	口縁 肥厚し口唇丸みを帯びる 外面 口唇直下から縦に近い縦位の条痕 内面 口唇直下から横位の条痕	暗褐 普	繊維多	口縁片	
3	縄文深鉢	外面 横位の条痕 更に下位は擦痕 内面 縦位の条痕	明褐黒 硬	繊維少	胴部 下半片	
4	縄文深鉢	外面 横位に近い丁寧な条痕 内面 斜位の条痕の痕を認めるが、ナデに近い擦痕で消される	黒褐色 硬	繊維少	胴部片	
5	縄文深鉢	尖底部はやや丸みを有し、大きく外に開いて胴部に移行する 外面 縦位の条痕 内面 ナデに近い擦痕	黒褐色 普	繊維	尖底部	

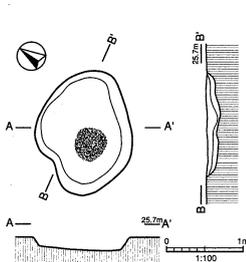


図20 F003

F003

遺構 北東側に最深部を有し、底に向けて次第に傾斜していく坑底であった。壁はやや斜めに立上っている、火床は坑底の略中央に1カ所認めたが、僅かに赤味を帯びる程度であった。覆土は自然堆積であり、暗褐色土・褐色土の2層に捉えた。

遺物 早期・条痕文片が若干出土している。

所見 遺構の状態及び周囲の遺構から、単独の、凹み状の炉穴と判断した。また、火床よりやや北東寄りに、坑底の最深部を有する遺構であった。

F004

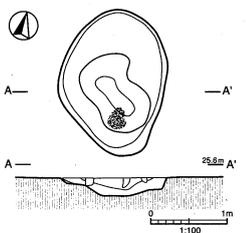


図21 F004

遺構 ソフトロームを掘込み略平坦な坑底となる凹み状の炉穴であるが、若干、坑底中央を凹めたピットである。火床は、極めて淡く赤変し赤化は弱いものを1カ所認めた。覆土は、焼土を含むに鈍い色調の暗赤褐色土と暗褐色土と捉えた。

遺物 早期・条痕文片が若干出土している。

所見 坑底の火床の形成後に埋没するが、自然堆積か人為堆積か捉えられなかった。時間差を有して再度使用された炉穴でもある。

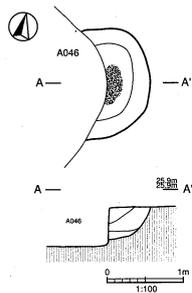


図22 F005

F005

遺構 若干凹凸のある坑底で、壁は急に立上がっている。A046との重複のため半壊しているが、重複部の坑底に赤化した火床を認めた。覆土は、色調・包含物を基本に3層に分層し、暗褐色土・明褐色土と捉え、明褐色土層には焼土を含んでいた。

遺物 条痕文片が若干出土している。条痕文は丁寧なものが多い。
所見 火床が坑底中央に営まれた、単独の炉穴である。

表8 F005遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	縄文 深鉢	口唇は尖頭状 外面 縦位と横位が交差する条痕 内面 縦位の条痕	暗褐色 普	繊維	胴部片	
2	縄文 深鉢	外面 斜位の条痕 内面 斜位の条痕	暗褐色 普	繊維	胴部片	
3	縄文 深鉢	外面 縦位を主として、一部斜位の条痕 内面 斜位の条痕	暗褐色 普	繊維	胴部片	
4	縄文 深鉢	外面 2方向の斜位の条痕 内面 斜位の条痕を施すが、後にナデに近い擦痕により不明瞭	暗褐色 普	繊維	胴部片	
5	縄文 深鉢	外面 胴上半は縦位、以下は斜位の条痕 内面 縦位の条痕	暗褐色 普	繊維	胴部片	
6	縄文 深鉢	外面 斜位の条痕 内面 斜位の条痕を施すが、不明瞭	暗褐色 普	繊維	胴部片	

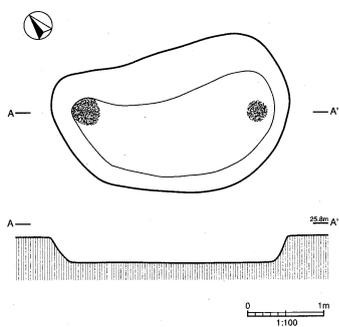


図23 F006

F006

遺構 壁の立上がりは全体的にやや急である。火床は図示できないものを含めて3カ所認めた。a・bは坑底の東西に偏在して認められ、cは覆土中に捉えた。覆土はいずれも焼土を含むが、包含の多寡等により6層に分層し、大きく褐色土・明褐色土と捉えた。

遺物 覆土一括で取り上げたため、どの火床に伴う遺物かは判然としないが、やや多く出土している。

所見 火床cがa・bより新しいが、a・bの新旧関係は捉えられなかった。また、火床c以降に新たに掘込まれており、火床は残せなかったものの炉穴として設けられた可能性もある。

表9 F006遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	縄文 深鉢	口唇は角頭状 小破片の口縁部のため条痕文は認められないが、擦痕状のナデに近い	暗褐色 普	繊維	口縁片	
2	縄文 深鉢	口縁やや内湾し口唇は丸みを有する 外面 口唇直下から横位の条痕 内面 ナデに近い擦痕	明褐色 普	繊維	口縁片	

3	縄文 深鉢	口縁やや外に開き、尖頭状 外面 口縁横ナデ 以下は斜位の条痕 内面 茎状工具によるナデに近い擦痕	暗褐色 普	繊維	口縁片	
4	縄文 深鉢	外面 斜位の丁寧な条痕 内面 縦いの丁寧な条痕 内外面とも肋の間隔の狭い条痕である	暗褐色 良	繊維	胴部片	5、6、8と 同一個体?
5	縄文 深鉢	外面 斜位の丁寧な条痕 内面 縦いの丁寧な条痕 内外面とも肋の間隔の狭い条痕である	暗褐色 良	繊維	胴部片	4、6、8と 同一個体?
6	縄文 深鉢	外面 斜位の丁寧な条痕 内面 縦いの丁寧な条痕 内外面とも肋の間隔の狭い条痕である	暗褐色 良	繊維	胴部片	4、5、8と 同一個体?
7	縄文 深鉢	外面 縦位の幅のある条痕 内面 縦に近い斜位の条痕でやや粗となる、2方向の	明褐	繊維	胴部片	
8	縄文 深鉢	外面 斜位の丁寧な条痕 内面 縦いの丁寧な条痕 内外面とも肋の間隔の狭い条痕である	暗褐色 良	繊維	胴部片	4、5、6と 同一個体?
9	縄文 深鉢	内外面とも擦痕 指頭オサエ痕	黒褐色 普	繊維	尖底部	

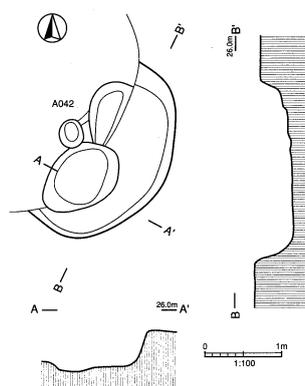


図24 F007

F007

遺 構 2坑乃至3坑の重複した炉穴であり、火床は2坑にそれぞれ1カ所を認めた。覆土は色調・包含物等により6層に分層し、褐色土・暗褐色土・褐色土・明褐色土褐色土（火床）と捉えた。1・2層はA042の覆土であり、火床aに伴う覆土は3～6層である。

遺 物 土器片錘が1点出土している。

所 見 火床bに伴う覆土は捉えられなかったため、火床aとの重複関係は不明である。

表10 F007遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	縄文 深鉢	口縁内面は若干内剥 口唇は丸頭状 外面 ナデに近い擦痕 指頭オサエ痕 内面 ナデに近い擦痕	暗褐色 硬	繊維	口縁片	
2	縄文 深鉢	口唇は角頭状 口唇部にキザミ 外面 斜位の丁寧な条痕 内面 斜位の条痕	明暗褐色 普	繊維	口縁片	
3	縄文 深鉢	外面 幅のある縦位の条痕 内面 ナデに近い擦痕	黒褐色 普	繊維 砂粒	口縁片	5と同一個体
4	縄文 深鉢	外面 縦位を主とした条痕 斜位も施す 条痕文の間隔が粗である 内面 茎状工具によるナデに近い横位の擦痕?	暗褐色 普	繊維	胴部片	補修孔あり
5	縄文 深鉢	外面 幅のある縦位の条痕 内面 ナデに近い擦痕	黒褐色 普	繊維 砂粒	口縁片	3と同一個体
6	土製品 土器片錘	長径 69×短径 (41)×厚さ 7 長径方向の略中央に片側のみ切込みの溝 外面 縦位・斜位の条痕が交差 内面 茎状工具による擦痕状の条痕	暗褐色 普	繊維	1/2	深鉢片再利用

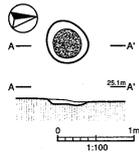


図25 F008

F008

遺構 ソフトローンを掘込んだだけの凹み状の遺構である。坑底は緩やかな凹凸があるが略平坦であり、壁は斜めに立上がっている。また、坑底に微かな火熱の被りが認められたが、赤化はしていなかった。覆土は、ローンを微含した褐色土の1層である。

遺物 早期・条痕文片が出土している。

所見 小規模な炉穴であり、被熱痕から使用期間は短いと捉えられた。被熱痕を火床と捉えたが、坑底全域にわたっており、ピットとしては大きなものではなかったかとも考えられる。

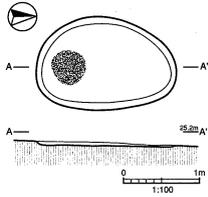


図26 F009

F009

遺構 ソフトローンを掘込む、凹み状の遺構である。坑底は略平坦であり、壁は斜めに立上がる。火床は坑底の南壁際に認められ、赤化していた。覆土は、焼土を少含する明褐色土のみと捉えた。

遺物 早期・条痕文片が出土している。

所見 極めて浅い掘込みの炉穴であり、小規模な炉穴である。

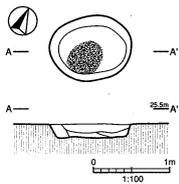


図27 F010

F010

遺構 坑底はやや波打つが略平坦であり、壁の立上がり急である。赤化した火床は、坑底中央から南側に広がっていた。覆土は1～4層のいずれも褐色土であるが、包含物等で分層した。

遺物 早期・条痕文片が若干出土している。

所見 4層は、ピットを掘込んだ後に充填した様な層であった。

表11 F010遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	縄文 深鉢	口唇 角頭状 内・外面 横に近い斜位の条痕 小破片のため口縁部付近しか捉えられない	暗褐色 普	繊維	口縁片	

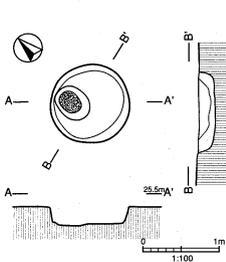


図28 F011

F011

遺構 北西壁際の坑底の凹み状の小ピット内に、淡く赤化した火床を認めた。覆土は1・2層とも褐色土であるが、若干の色調差により分層した。

遺物 遺物は覆土一括で取上げたが、炉穴としては、早期・条痕文片がやや多く出土している。

所見 比較的小規模な炉穴であるが、条痕文小片がやや多く出土している。

表12 F011遺物観察表

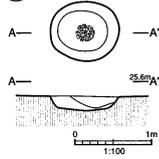
(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径 底径 器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	縄文 深鉢	口唇 尖頭状 口縁は心持ち外に反るか? 外面 横位の条痕 内面 茎状工具によるナデに近い擦痕	明褐色 軟	繊維	口縁片	
2	縄文 深鉢	外面 斜位の条痕 内面 横位・斜位の条痕 内外面ともに比較的丁寧な条痕 指頭オサエ 器厚の厚薄著しい	暗黄褐色 軟	繊維	胴部片	

3	縄文 深鉢	外面 斜位の条痕 内面 縦位の条痕 外面に比し条痕の間隔やや密か? 指頭オサエ 器厚の厚薄著しい	暗赤褐色 軟	繊維	胴部片	
4	縄文 深鉢	外面 縦位の条痕 内面 縦位・斜位の条痕 一部(胴中位か?)擦痕により条痕が消える	暗赤褐色 軟	繊維 粗	胴部片	5と同一個体
5	縄文 深鉢	外面 縦位の条痕 内面 縦位・斜位の条痕	暗赤褐色 軟	繊維 粗	胴部片	4と同一個体



F012



遺 構 坑底と壁の差が不明瞭な、断面形が丸みを帯びる炉穴である。坑底中央に淡く赤化した火床を認める。覆土は色調・包含物により捉え、1・2層とも褐色土であるが、1層は焼土を多く含んでいた。

遺 物 早期・条痕文片が若干出土している。

図29 F012

所 見 坑底中央に火床を検出する、本地区でも少ない例の炉穴である。

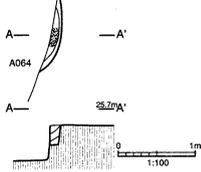
表13 F012遺物観察表

(単位mm)

No.	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	縄文 深鉢	波状口縁 口唇部はキザミ 外面 貼付けの微隆帯区画 区画内は集合沈線 内面 縦位の条痕	暗褐色 硬	繊維	口縁片	



F013



遺 構 A064と重複するため遺構の殆どを失っており、全容を窺うことはできなかった。火床は、淡く赤化した一部を南壁際に認めたと過ぎない。遺存する壁の立上がりは急で、坑底は略平坦である。覆土は褐色土であったが、若干の色調の異なりで捉え、いずれもロームを微含する。3層は焼土を少含していた。

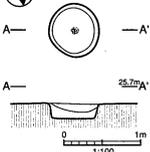
遺 物 提示できる遺物はなかった。

図30 F013

所 見 A064と重複し、大きく損壊しているため、全容は不明瞭である。



F014

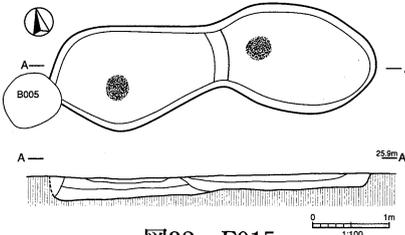


遺 構 坑底は略平坦、壁は垂直に近い状態で立上がっている。淡く赤化した火床が坑底中央で認められたが、その範囲は極めて狭いものであった。覆土は1・2層とも明褐色土であるが、焼土粒の包含の多寡で分層した。

遺 物 提示できる遺物はなかった。

図31 F014

所 見 本地区で例の少ない、坑底中央に火床を有する炉穴である。火床も狭い範囲であり、赤色硬化の状況から、使用期間は短いものと捉えた。



F015

遺 構 2基の炉穴の重複した遺構である。aは全体的に壁の立上がりは急で、坑底は重複部から西壁に向かって緩やかに傾斜している。覆土は1~3層で、いずれも暗褐色土であり、2層は焼土を微含している。bは東壁側は内弯し、重複部は緩やかに立上がる。坑底は緩やかな凹凸をもっている。覆土は4・5層であり、色調は

暗褐色土である。5層は焼土を微含していた。淡く赤化した火床が、それぞれ1カ所認められた。

遺 物 土器片錘が1点出土している。

所 見 覆土から新旧はa→bと捉えられた。aがほぼ埋まった後にbを浅く掘込んだ炉穴である。

表14 F015遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	縄文 深鉢	外面 粗い条痕 内面 ナデ 口縁一つまみナデ	暗褐色 良	繊維	口縁片	6と同一個体
2	縄文 深鉢	口唇は尖頭状 外面 縦条痕 内面 茎状工具による擦痕状の条痕	明褐色 良	繊維	口縁片	
3	縄文 深鉢	外面 斜位の条痕 内面 不定方向の斜位の条痕	暗褐色 良	繊維	胴部片	
4	縄文 深鉢	外面 縦位の条痕 内面 縦位の条痕 外面に比しやや粗い	明褐色 普	繊維	胴部片	
5	縄文 深鉢	外面 縦位の条痕 内面 横位の条痕	暗褐色 普	繊維	胴部片	
7	土製品 土器片錘	長径39×短径39×厚さ9 略方形で、条痕文対して縦軸に 対面して刻み 内外面とも横位を主とした条痕を 施す	暗褐色 普	繊維	略完形	深鉢胴部片を 再利用

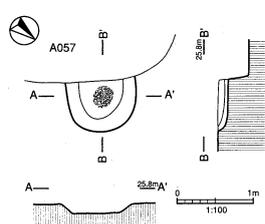


図33 F016

F016

遺構 坑底は平坦であり、壁はやや斜めに立上がっている。坑底中央に赤化には至らないが、焼土粒と坑底に焼けた痕跡を認め、火床と捉えた。覆土は色調は褐色土で一致しているが、焼土の包含量によって2層に分そうした。

遺物 出土遺物は無かった。

所見 A057によって遺構の半分を失っている。このため全体を窺いえないが、火床は坑底中央よりやや北西寄りと捉えた。

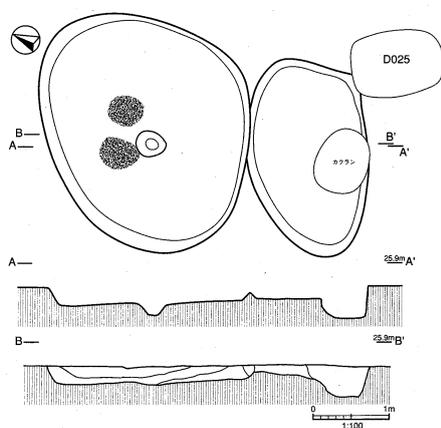


図34 F017・F018

F017

遺構 坑底は緩やかな凹凸をもち、壁の立上がりは垂直に近いものとなっている。坑底略中央に近接して、赤化が強い火床を2カ所認めた。覆土は1～3層とも褐色土であるが、色調には殆ど差が無く、焼土粒・ロームの包含物やその多寡によって分層した。

遺物 器形が捉えられる大型接合片も出土し、炉穴としては遺物は多いが出土傾向を捉えるまでには至らなかった。

所見 長軸は3.4m、短軸が2.7mを越える規模の大きな炉穴である。平面形から単独の炉穴の様に見られるが、火床が2カ所存在すること規模の長大さから複数の炉穴の重複と考えられる。セクション部分では火床の新旧は捉えられなかった。

F018

遺構 坑底は北西から南西側へ緩やかに下っている。壁は急激に立上がっている。火床は検出されなかった。覆土は攪乱が大きく、焼土粒を微含した褐色土のみと捉えた。

遺物 早期・条痕文片が若干出土している。

所見 攪乱のため火床は消失したものと捉えた。覆土に焼土粒が包含されることから、火床の存在が想定可能と判断している。F017とも重複するが、新旧は重複部の攪乱により捉えられなかった。

表15 F017遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	縄文 深鉢	口縁 口唇は尖頭となり、外に抓んだように反る 外面 弧を描くような斜位の条痕と直線的な斜位の条痕が交差する 内面 斜位の条痕を施した後にナデに近い擦痕 指頭オサエ	明暗褐色 普	繊維	口縁片	
2	縄文 深鉢	口縁 波状 外面 波状頂部から微隆起による三角区画内に条痕による集合沈線 内面 横位から斜位の比較的丁寧に施す条痕	明黄褐色 軟	繊維	口縁片	
3	縄文 深鉢	外面 縦位を主とする条痕 内面 斜位を主とする条痕	明暗褐色 普	繊維	胴部片	
4	縄文 深鉢	(268)×-×(68) 口縁 波状 外面 一本の横行する微隆帯で口縁部文様帯と胴部を区画 口縁部は2本一組の微隆帯を左右交互に斜行垂下し区画、条痕にて集合沈線化 4単位か? 内面 茎状工具によるナデに近い擦痕状の条痕	暗褐色 良	繊維多	胴部片	

表16 F018遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	縄文 深鉢	口唇は角頭状 外面 微隆起による区画 内面 茎状工具によるナデに近い擦痕状の条痕	暗黄褐色 硬	繊維	口縁片	

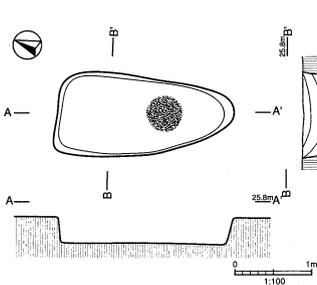


図35 F019

F019

遺構 坑底は略平坦であり、壁の立上がりは垂直に近い炉穴である。赤化した火床が、坑底中央よりやや南側に認められた。覆土は自然堆積であり、1・2層はローム・焼土を含む暗褐色土、3層は焼土を少含する暗黄褐色土であった。

遺物 早期・条痕文片が、炉穴としては多量に出土している。

所見 形状は比較的整然としており覆土の状態より単独の炉穴と捉えた。

表17 F019遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	縄文 深鉢	口縁は外面で器厚薄くなり、折れるように外反する 口唇は角頭状 外面 斜位の条痕 内面 口縁は横位、以下は縦位の上に斜行の条痕	暗褐色 普	繊維	口縁片	
2	縄文 深鉢	口縁はやや外反 口唇は丸みを有す尖頭状 外面 口唇-ナデ 以下は縦位・斜位の条痕 内面 口唇-横位 以下は縦位の条痕	暗褐色 普	繊維多	口縁片 ~ 胴部片	3、4は同一個体
3	縄文 深鉢	外面 縦位の条痕 内面 縦位を主とするが斜位の条痕も施し、ややランダムである	暗褐色 普	繊維多	胴部片	2、4は同一個体
4	縄文 深鉢	外面 縦位の条痕 内面 斜位の不明瞭な条痕	暗褐色 普	繊維多	胴部片	2、4は同一個体

F020

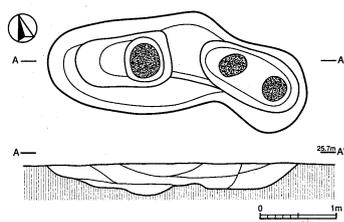


図36 F020

遺構 壁はやや急に立上がっている。坑底の平坦面を、凹み状に更に掘込んだ底面に火床を検出した炉穴である。何れも赤化の強い火床が3基検出された。覆土は色調・包含物によって7層と捉えた。暗褐色土と黒褐色土が主体であった。

遺物 早期・条痕文片が出土しているが、覆土一括で取上げた遺構であり、遺物がどの火床に伴うものかは判然としていない。

所見 覆土から火床の新旧は火床 a・c→火床 b と捉えられた。火床 a・c については判然としなかった。

表18 F020遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	縄文 深鉢	口縁は波状 口唇は丸頭状 外面 波状頂部から微隆帯で区画 区画内を密な条痕による沈線充填 内面 茎状工具による擦痕状の条痕文	明褐色 良	繊維少	口縁片	
2	縄文 深鉢	口縁は小波状 口唇まで条痕を施す 外面 交差するように斜位の条痕を施す 内面 斜位の条痕	暗褐色 普	繊維多	口縁片	3は同一個体
3	縄文 深鉢	口縁は小波状、内剥ぎにより外に反る 口唇まで条痕を施す 外面 口縁部は横位、以下は斜位の条痕条痕 内面 口縁部は擦痕状のナデ、以下は横に近い斜位の条痕	暗褐色 普	繊維多	口縁片	2は同一個体
4	縄文 深鉢	外面 右下りの斜位の条痕を主として、その上に左下り条痕を施す 内面 弧を描くような条痕を認めるが、表面剥離著しく不明瞭	暗褐色 普	繊維多	胴部片	

F021

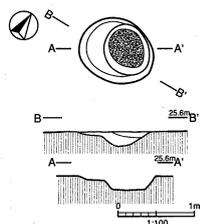


図37 F021

遺構 坑底と壁の境のない断面形が丸みを帯びる炉穴である。坑底の中央より東側に浅くピットを掘込み、この底面に若干赤化した火床を認めた。覆土は自然堆積であり、いずれも焼土を僅かに包含する1層暗褐色土、2層黄褐色土と捉えた。

遺物 早期・条痕文片が若干出土している。

所見 火床が検出されたピットは、北西から南東にむけて傾斜している。

F022

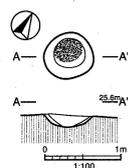


図38 F022

遺構 坑底と壁の境のない、掘込面から緩やかに傾斜する坑底である。火床は淡く赤化したものであった。覆土は自然堆積であり、1層は焼土と暗褐色土が混合した暗褐色土であり、2層はソフトロームが主体であった。

遺物 提示できる遺物はなかった。

所見 2層は壁の崩壊に伴うものか、炉穴使用に係る人為的な充填土なのかは捉えられなかった。遺構廃絶後は放置され自然堆積によって埋没した炉穴である。

F023

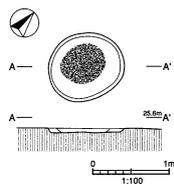


図39 F023

遺構 浅い掘込みあり、凹み状の炉穴である。坑底は略平坦で、壁は緩く斜めに立上がっている。火床は淡く赤化したものであった。覆土は1層は焼土を少含した暗褐色土であり、2層は焼土を微含するソフトローム主体の層であった。

遺物 提示できる遺物はなかった。

所見 焼土の包含の多寡から2層が充填されたかのような堆積の炉穴である。

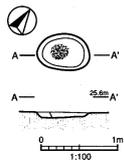


図40 F024

F024

遺構 浅い掘込みあり、凹み状の炉穴である。坑底は略平坦で、壁は緩く斜めに立上がっている。火床は淡く赤化したものであった。覆土は焼土を少含する黄褐色土の1層のみ捉えた。

遺物 提示できる遺物は無かった。

所見 攪乱のため遺構の一部が失われ、意識的に平面形を捉えた。

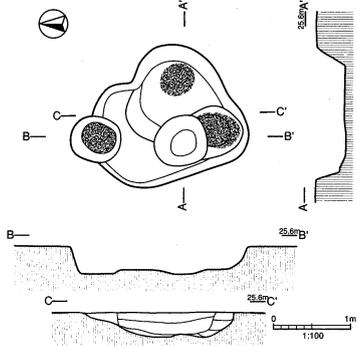


図41 F025

F025

遺構 大きく5坑の重複と捉えられるが、火床は3カ所検出したのみである。何れの火床も赤化は淡かった。覆土は色調・包含物により分層し、暗褐色土・黒褐色土・黄褐色土の7層と捉えた。

遺物 早期・条痕文片が若干出土している。

所見 覆土より新旧関係はc・e→dのみ捉えられた。d・eは覆土より同一の炉穴とも捉えられる。また、eの南側がaによって失われていることから、e→aとも考えられるものである。

表19 F025遺物観察表

(単位mm)

No	種別器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	縄文深鉢	口縁は小波状 口唇は丸頭状 外面 茎状工具による擦痕状の条痕 内面 茎状工具による擦痕状の条痕 ナデに近いか?	暗褐色 普	繊維少	口縁片	
2	縄文深鉢	外面 斜位の条痕 内面 斜位の条痕 表面剥離著しく不明瞭	明褐色 硬	繊維少	胴部片	

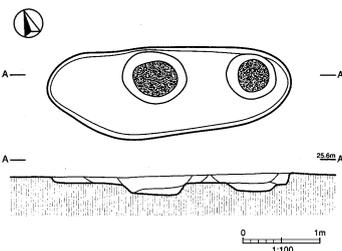


図42 F026

F026

遺構 最低3基の炉穴の重複である。坑底はそれぞれ平坦であり、壁は緩やかに立上がっている。火床はa・bの2カ所認めしたが、cは検出できなかった。a・bとも坑底に浅いピットを更に掘込み火床とし、いずれも淡く赤化していた。覆土はaは黒褐色土・赤褐色の2層であり、bは暗褐色土・黄褐色土・暗赤褐色土、cは暗褐色土・黒褐色土である。

遺物 覆土一括の取上げた。早期・条痕文片の出土量は多い。

所見 覆土より新旧関係はb・c→aであり、b・cは不明である。cの火床はaにより失われたものと判断した。

表20 F026遺物観察表

(単位mm)

No	種別器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	縄文深鉢	外面 縦に近い斜位の条痕 内面 斜位の条痕	暗褐色 普	繊維	胴部片	2、3は同一個体
2	縄文深鉢	外面 縦位の条痕 内面 横位の条痕	暗褐色 普	繊維	胴部片	1、3は同一個体
3	縄文深鉢	外面 縦位の条痕 内面 角度の異なる斜位の条痕	暗褐色 普	繊維	胴部片	1、2は同一個体

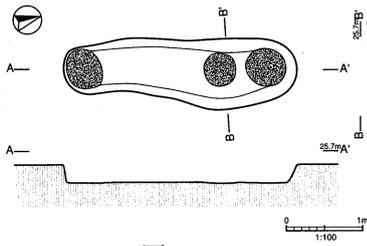


図43 F027

F027

遺構 坑底は略平坦であり、壁はやや急に立上がっている。火床は3カ所認め、a・bは赤化し、cは淡く赤化していた。覆土は1・2層が暗褐色土であり、3層は焼土層である。

遺物 早期・条痕文片が多量に出土している。

所見 重複関係は覆土からは捉えられなかった。

表21 F027遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	縄文 深鉢	内外面とも茎状工具よる横位及び斜位の擦痕状の条痕	暗黄褐色 普	繊維	口縁片	
2	縄文 深鉢	内外面とも茎状工具よる横位及び斜位の擦痕状の条痕	明褐色 普	繊維	口縁片	
3	縄文 深鉢	外面 口縁部近い斜位条痕及び縦位の擦痕 内面 擦痕状の条痕	暗黄褐色 普	繊維	口縁片	
4	縄文 深鉢	外面 斜位の条痕 内面 ナデに近い擦痕	暗褐色 普	繊維	胴部片	
5	縄文 深鉢	外面 横位及び縦位の比較的丁寧な条痕 内面 横位及び斜位の条痕をランダムに施す条痕	明暗褐色 普	繊維	胴部片	

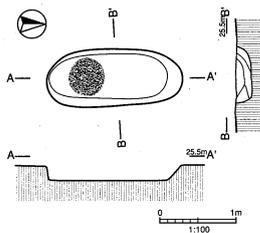


図44 F028

F028

遺構 壁の立上がりは急であり、坑底は北西から南東にかけて傾斜している。坑底中央よりやや南寄りに、淡く赤化した火床が検出された。覆土はいずれも暗褐色土であり、包含物によって分層した。1～3層は焼土を包含していた。

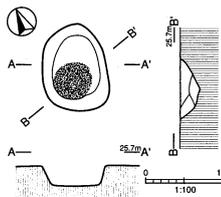
遺物 早期・条痕文片がやや多く出土している。

所見 提示できる遺物はなかった。

表22 F028遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	縄文 深鉢	口縁は内剥ぎにより、やや内側に入る 口唇は細くなるが角頭状 外面 斜位の条痕 内面 斜位の条痕	暗黄褐色 普	繊維少	口縁片	
2	縄文 深鉢	口唇は角頭状 外面 口縁は横位、以下は斜位の条痕 内面 口唇直下は茎状工具によるナデ? 以下は斜位の条痕	明褐色 普	繊維少	口縁片	
3	縄文 深鉢	口唇は丸みを有す尖頭状 口唇にキザミ 外面 口縁部は横位、以下は斜位の条痕 内面 やや斜めとなる横位の条痕	暗黄褐色 軟	繊維少	口縁片	
4	縄文 深鉢	口唇は角頭状 外面 口唇直下から微隆帯 更にキザミを持つ微隆帯で区画、区画内を沈線充填	暗褐色 普	繊維少	口縁片	
5	縄文 深鉢	—×—×(132) 最胴部大径(186) 外面 縦位の条痕を主とし、斜位も施す 内面 縦位・斜位の条痕をランダムに施す	明暗褐色 普	繊維	胴部片	胴部中位の大型接合片



F029

遺構 坑底は壁際より中央がやや高くなり、壁は坑底から丸みをもって立上
 がつる。坑底の中央から南西壁にかけて、赤化した火床を検出した。覆土は色調・
 包含物を基本として分層し、暗褐色土が基本である。坑底直上層は火床である。

遺物 提示できる遺物はなかった。

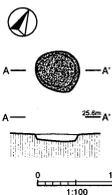
図45 F029

所見 覆土から2度にわたる使用が想定される炉穴である。

表23 F029遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	縄文 深鉢	口縁は折れるように外反 口唇は尖頭状 外面 縦位の比較的丁寧な条痕 内面 横位の条痕	暗褐色 普	繊維多	口縁片	
2	縄文 深鉢	口縁は小波状 口唇部にキザミ 外面 茎状工具によるナデか？ 内面 擦痕状の条痕	暗褐色 良	繊維多	口縁片	



F030

遺構 壁の立上がりは急であり、坑底は凹凸をもっている。壁から坑底全体
 にかけて火熱痕を認める。覆土は、ソフトローム主体の黄褐色土層のみ捉えた。

遺物 遺物の出土はなかった。

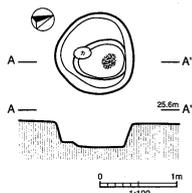
図46 F030

所見 1層は焼土を少含するが粘性が少し強く、火床下の火熱痕をピットと
 捉えたかも知れない遺構である。そして掘込面のソフトロームが、直接、火を被っ
 た火床の可能性のある遺構である。時期を知る遺物の出土はないが、周辺遺構状況
 から早期・条痕文期の炉穴と捉えた。

表24 F030遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	縄文 深鉢	口縁は外反 口縁部は指頭オサエか？ 外面 縦に近い斜位の条痕 内面 斜位の条痕	暗褐色 良	繊維少	口縁 部片	2と同一個体
2	縄文 深鉢	口縁は外反 口縁部は指頭オサエか？ 外面 縦に近い斜位の条痕 内面 斜位の条痕	暗褐色 良	繊維少	口縁 部片	1と同一個体
3	縄文 深鉢	口縁は角頭状 小波状か？ 外面 微隆起による区画内に肋骨状に集合沈線を配する 内面 茎状工具による擦痕状の条痕	暗赤褐 普	繊維少	口縁部	4と同一個体
4	縄文 深鉢	外面 微隆起による三角形の区画内に集合沈線を配する 内面 茎状工具による擦痕状の条痕	暗赤褐 普	繊維少	胴部片	3と同一個体



F031

遺構 坑底は凹凸を有し、壁の立上がりは急である。坑底東側に凹み状のピ
 ットが掘込まれ、その坑底に淡く赤化した火床を検出した。覆土は色調によって、1
 ～3・5層褐色土、4層明褐色土と捉えた。5層は焼土を含まず、他層は多寡はある
 が焼土を包含していた。

図47 F031

遺物 覆土一括で取上げたが炉穴としては早期・条痕文片が多い出土である。

所見 本地区の炉穴としては数少ない、時期判別が可能な土器片が出土する。

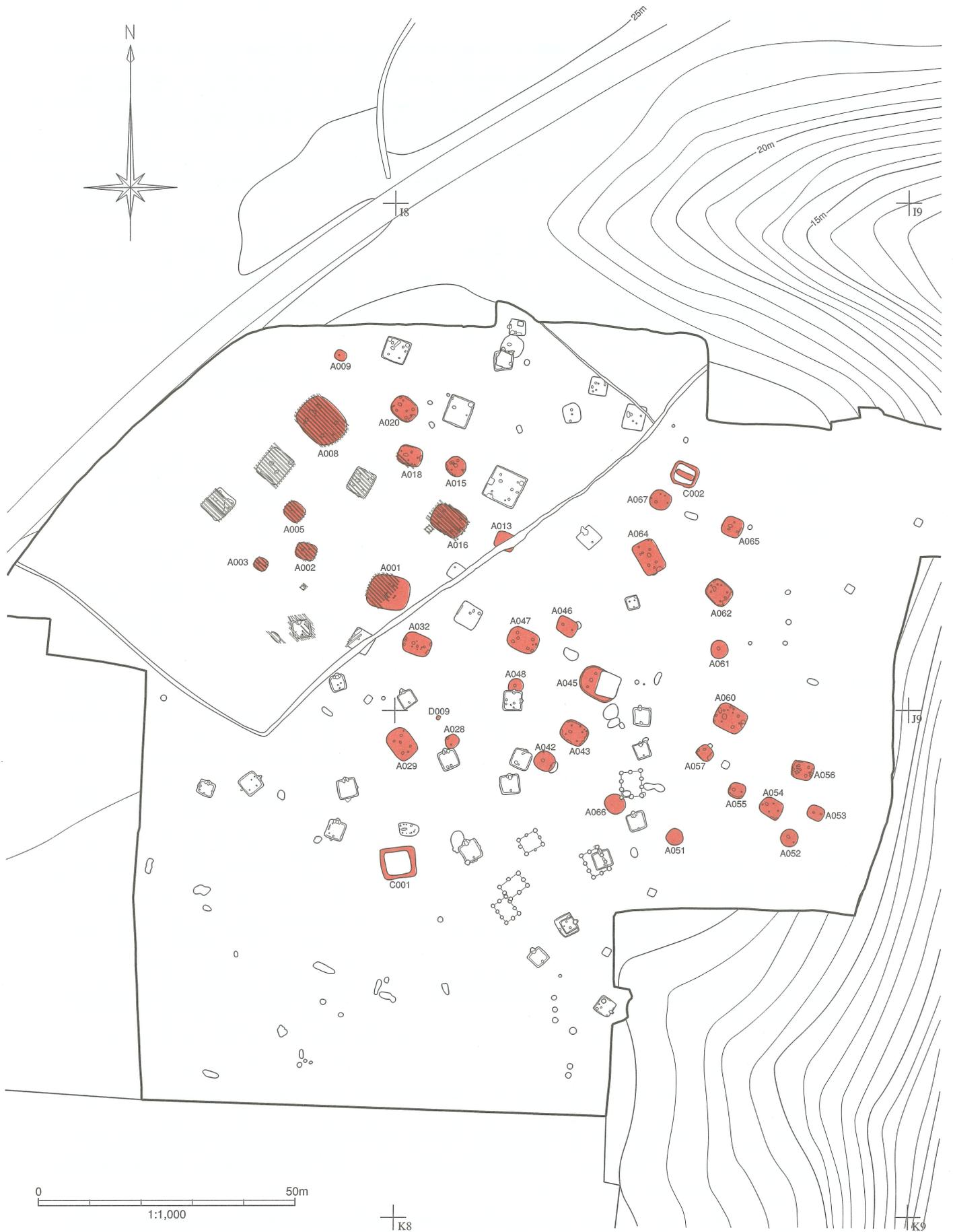


图48 上谷遺跡弥生時代遺構配置图

第2節 弥生時代

第1項 竪穴住居跡

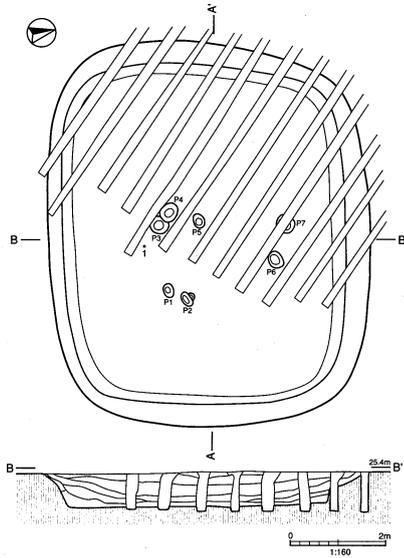


図49 A001

A001

遺構 立川ローム層のクラック帯を床とする地床で、攪乱の間に硬化面が一部認められている。しかし南東コーナー付近はソフトロームを床としておりやや軟弱なものとなっていた。炉・周溝は検出されず、柱穴も判然としなかった。壁は上半の崩れが認められた。

覆土は自然堆積で、色調・包含物によって8層に捉えた。覆土中には、焼土の包含は全く見られなかった。

遺物 出土遺物は全体として少なく、出土傾向を示すことはできない。北西側を耕作の畝痕による攪乱を被るが、それだけでは説明がつかないほどの少なさである。

所見 炉跡や主柱穴が検出されないことから竪穴住居跡とするには判断に迷うが、遺構規模等から住居跡と捉えた。また、調査時の所見では生活痕のない竪穴住居跡であった。

表25 A001遺物観察表

(単位mm)

種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1 土師器 手捏土器	62×49×38 手捏後、指頭による整形 指頭によるナデ認める	明褐色 普	赤色粒子 少	完形	
2 弥生 甕	—×(49)×(35) 外面 ヘラケズリ 内面 ヘラナデ 外底 ヘラケズリ後ヘラナデ	明黄褐色 良	砂粒少	底部	
3 土師器 罎	—×—×(45) 最大径 (99) 外面 粗いヘラミガキ 内面 粗いヘラナデ 口縁部・胴部の接合部は指頭オサエ	明褐色 良	砂粒少	胴部片	
4 土師器 罎	(144)×—×(55) 外面 ヘラミガキ 内面 ヘラミガキ	明褐色 良	砂粒少	口縁片	
5 石器 砥石	長(54)×幅(36)×厚さ(27) 重量(61.6g) 上端面とあわせ5面使用 下端欠損 深さ状耗あり 擦痕をかすかに認める			断片	
6 弥生 甕	外面 S字状結節文2単位 以下単節縄文 内面 ヘラミガキ	黄褐色 普	砂粒	胴部片	
7 弥生 甕	外面 単節縄文 内面 ナデ	明褐色 良	長石類少	胴部片	

A002

遺構 ハードローム上部を床面とした地床である。炉跡の南半を囲むように、また、跡西コーナー付近まで硬化面を認めた。柱穴は2基検出したが、いずれも主柱穴とするには貧弱な規模であるが、床面から0.42~0.50m程掘込んでいる。周溝は検出されなかった。炉跡は住居跡中央から北西壁寄りに検出され、坑底の赤色硬化は強かった。

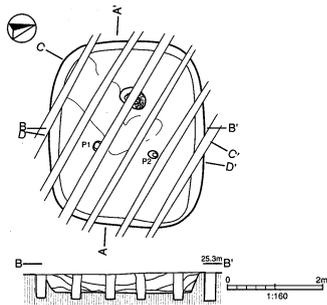


図50 A002

覆土は色調・包含物から5層に捉えたが、1層の黒褐色土中に焼土を包含した暗赤褐色土が点在していた。また、2層以下は炭化材を包含し、床直上層の5層中には焼土は少ないが、やや大きめの炭化材が残されていた。
 遺物 出土遺物は少なく、点在する程度であった。
 所見 住居廃絶後、不用材の焼却行為を行った遺構である。また、覆土から人為的な埋戻しが行われたことが窺われる。

表26 A002遺物観察表

(単位:mm)

種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1 土師器 高杯	(14.8)×-×(4.00) 外面 ヘラケズリ後ヘラミガキ 内面 ヘラミガキ	明赤黄褐 硬良	砂粒少 密	杯部 1/2	
2 土師器 高杯	-×-×(6.80) 外面 ヘラミガキ 内面 ヘラケズリ	明赤褐 硬良	赤褐色 粒子少 密	脚部 1/2	
3 土師器 高杯	-×(9.60)×(6.30) 外面 ヘラミガキ 内面 ヘラケズリ後ナデ	明赤黄 硬良	粒子少	脚部 1/2	
4 弥生甕	外面 ヘラミガキ 口縁-肥厚する 端部に単節縄文による深いキザミ 内面 ヘラミガキ	明赤黒 硬良	長石少 密	口縁片	
5 弥生甕	外面 ハケ目の残る無文頸部と胴部2本単位の無節S字状結で区画 胴部-単節縄文地文 内面 ヘラナデ			胴部片	

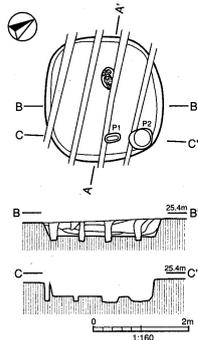


図51 A003

A003

遺構 立川ローム層のクラック帯を地床としており、一部、暗褐色土が混入する。壁は床から急に立上がり、調査では垂直の様に見えた。炉跡は住居跡の北西壁寄りに設けられ、対面して出入口に伴うP2が検出された。P1は柱穴とは捉えられなかった。周溝は検出されなかった。覆土は色調・包含物を基に12層に分層した。壁際はロームを含む褐色土が、基本的な覆土は黒褐色土が主体である。

遺物 殆ど出土しなかった。
 所見 小型の竪穴住居跡である。

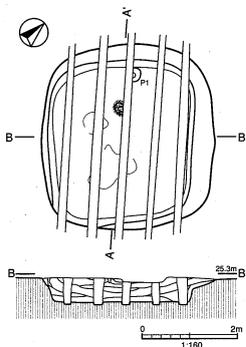


図52 A005

A005

遺構 立川ローム層のクラック帯を地床として、一部に硬化面を認めた。炉跡は皿状であり、北東壁寄りに設けられていた。柱穴・周溝は検出されなかった。P1は床面から4~5mの深さで、壁際にあるが、出入口に伴うかは捉えられなかった。覆土は1~4層が黒褐色土、5~8層が暗褐色土である。

遺物 出土遺物は少ないが、A001~A003に比しては多かった。
 所見 時代・時期を判断できる遺物は少なかった。

表27 A005遺物観察表

(単位mm)

種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1 土師器 埴?	(82)×-×(23) 外面 ヘラナデ 内面 ヘラナデ	明褐色 良	砂粒少	口縁片	口縁に歪みがあり、埴以外の可能性もある
2 土師器 高坏	-×-×(28) 坏部 外面 ヘラミガキ 内面 ヘラミガキ 脚部 ヘラナデ	明赤褐色 良	砂粒少	高坏 接合部	赤彩
3 土師器 甕	-×(65)×(43) 外面 ヘラナデ 内面 粗いヘラナデ	明黄褐色 良	砂粒少	底部 1/4	

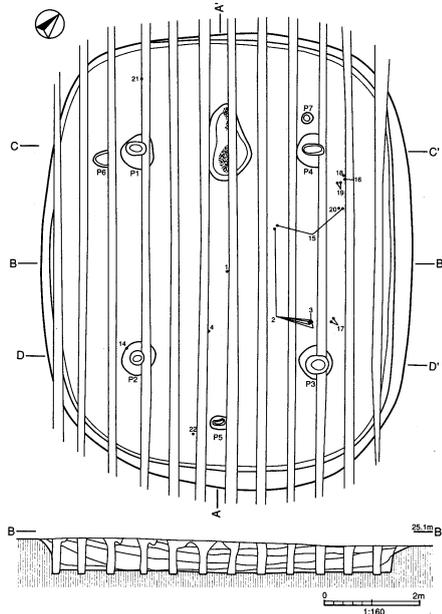


図53 A008

A008

遺構 ハードローンを掘込んで地床とし、P2～P5にかけて硬化面を認める。炉跡の凹みは判然とせず、火床は2カ所確認されそれぞれ赤色硬化はするが、赤化はやや弱い。主柱穴はP1～P4で、いずれも覆土は褐色土を主体とし、柱は引抜かれていた。P5は坑底は尖底であり、出入口に伴う。覆土は自然堆積であり、1～4層が黒褐色土であり、5層暗褐色土、6・7層は褐色土である。北西壁は壁上部の崩壊が見られ、覆土は住居跡外から流れ込んでいた。

遺物 覆土下層を中心として、古墳時代前期の土師器が主体を占めている。

所見 出土遺物からは古墳時代前期としたいが、竪穴住居跡の形状及び遺物13から弥生時代後期の所産と捉えた。

表28 A008遺物観察表

(単位mm)

種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1 土師器 高杯	(160)×-×(43) 外面 ハケ後ヘラミガキ 内面 ハケ後ヘラミガキ	暗褐色 普	砂粒少	坏部	赤彩
2 土師器 高杯	(174)×-×(59) 外面 ハケ後ヘラミガキ 内面 ヘラミガキ 輪積み痕	明黄褐色 普	砂粒	坏部	
3 土師器 器台	-×-×(110) 外面 ヘラミガキ 内面 ナデ	暗褐色 良	砂粒多 赤色粒少	脚部	赤彩
4 土師器 高杯	-×-×(80) 外面 ヘラミガキ 内面 ナデ(輪積痕オサエ)	明赤褐色 良	砂粒多	脚部	赤彩
5 土師器 高杯	-×-×(50) 脚部一焼成前穿孔 外面 ヘラミガキ 内面 ハケ後ナデ	明黄褐色 軟	砂粒	脚部	
6 土師器 埴	-×-×(127) 最大径150 外面 ヘラミガキ 内面 ナデ 頸部接合部に指頭オサエ痕	外赤褐色 内淡褐色 良	砂粒	頸部～ 胴部	

種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
7 土師器 壺	(198)×-×(37) 二重口縁 外面 口縁-粗いハケ後ナデ 頸部-ハケ後ヘラミガキ 内面 粗いハケ後ナデ	明赤褐色 普	赤色粒多	口縁	
8 土師器 壺	157×-×70 口縁折返し 外面 横ナデ 指頭オサエ 頸部・胴部-ハケ後ヘラミガキ 内面 口縁ハケ後ナデ・ヘラミガキ 頸部-ハケ後ヘラミガキ 胴部-ハケ	黄褐色 普	赤色粒少	口縁~ 頸部	
9 土師器 甕	(211)×-×(111) 外面 口縁部は横位、頸部~胴部は斜位ハケ 頸部に指頭オサエ痕 内面 口縁~胴上部-ハケ、以下ナデ	明褐色 良	砂粒少	口縁~ 胴部	
10 土師器 甕	(159)×-×(71) 外面 口唇ナデ以下ハケ後ナデ 内面 ナデ	明黄褐色 良	砂粒多 赤色粒子	脚部	
11 弥生 壺	-×-×(71) 外面 2~3重の沈線より区画し、その中の沈線による山形文を充填 下は一重連続刺突、竹管より区画線 内面 ナデ	明褐色 普	赤色粒少	脚部	
12 弥生 小型甕	-× 44×(51) 外面 ヘラミガキ 内面 ヘラミガキ	暗褐色 普	砂粒少	脚部~ 底部	
13 弥生 壺	89×-×(21) 最大径143 口縁折返し 口唇に縄文 外面 口縁は縄文 頸部下位にS字状結節文 胴部は単節縄文 内面 口縁~頸部-ヘラミガキ、以下ナデ 胴下半は粗いヘラミガキ	明黄褐色 軟	砂粒	口縁~ 胴下半	
14 弥生 甕?	-× 54×(38) 底部から胴部へ大きくひらいて立上がる 外面 粗いヘラミガキ	暗赤褐色 普	砂粒	底部	
15 弥生 甕?	-× 64×(30) 外面 ヘラミガキ 内面 ヘラミガキ 外底-ヘラミガキ	暗赤褐色 硬	砂粒	底部	赤彩
16 土師器 台付甕	外面 胴部-ハケ 脚部-ケズリ後ナデ 接合部に指頭痕 内面 ナデ 接合部 甕底部が出せそ状の突出	明黄褐色 良	砂粒	台部	
17 土師器 台付甕	-× 96×(79) 外面 粗いヘラミガキ後ナデ 内面 ヘラナデ	暗褐色 硬	砂粒少	脚部	
18 土師器 甕	-× 96×(70) 外面 粗いヘラミガキ後ナデ 内面 ヘラケズリ後ナデ	明橙褐色 普	砂粒少	脚部	
19 弥生 甕	外面 単節縄文 内面 ナデ	暗褐色 良	砂粒	胴部片	
20 石器 勾玉	長さ30×幅19×厚さ10 重量115.5g 孔径2 丁寧なミガキ仕上げ			完形	

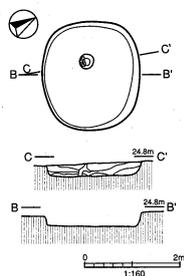


図54 A009

A009

遺構 ソフトロームを掘込んだ地床である。床は全体として踏固められた印象を受けるが、硬化面としては認められなかった。壁は床からやや丸みをもって立上がる。炉跡は床からの掘込みは極めて浅く、凹み状である。火床は明瞭ではないが、坑底が若干焼けて焼土も散布するため捉えた。柱穴・周溝は検出しなかった。

覆土は自然堆積であり、色調を主体として1・2層黒褐色土、3・5層暗褐色土、4層褐色土と捉えた。

遺物 殆ど認められなかった。

所見 時代・時期を判断する遺物の出土が無いと判然としないが、平面形から弥生時代後期の竪穴住居跡と捉えた。炉跡の検出がなければ、小竪穴状遺構と言える遺構であった。

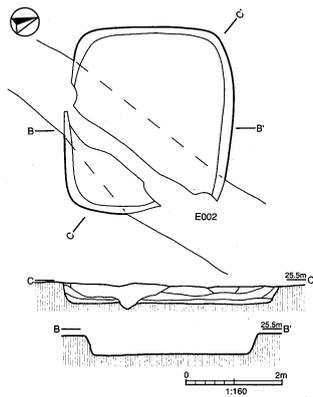


図55 A013

A013

遺構 ハードロームの地床である。硬化面は認められないが、全体的に踏固められた床である。炉跡・柱穴・周溝は検出できなかった。壁は床からやや丸みをもって急に立上がりを見せている。覆土は自然堆積であり、1層黒褐色土、2・3層暗褐色土、4・5層褐色土であった。

遺物 弥生時代後期の土器小片が少量出土している。

所見 E002によって遺構中央から南コーナーにかけて帯状に損壊を被るが、竪穴住居跡の付帯施設が一切検出できなかった。住居跡と言うより竪穴状遺構とも言えるが、遺物の出土等から住居跡と捉えた。

表29 A013遺物観察表

(単位mm)

種別器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1 弥生甕	—× 52× (15) 外面 ナデ 内面 ナデ 外底面—ナデ	明黄褐色 普	砂粒少	底部	
2 弥生甕	—× (70)× (29) 外面 ヘラケズリ後ナデ 内面 ヘラケズリ後ナデ 外底面—ナデ	黒褐色 良	砂粒少	底部	
3 弥生甕	—× (69)× (135) 外面 胴部のハケ後ヘラミガキ 以下ヘラケズリ後ヘラミガキ 内面 胴部—ヘラミガキ以下ヘラケズリ 外底面—ヘラケズリ後ナデ	暗褐色 良	砂粒	底部 1/4	
4 弥生甕	—× —× — 外面 3条の櫛状工具により2単位の櫛描文を口縁部に波状に横走 また、3条以上の櫛描を垂下させ区画する。 内面 ナデ	明赤褐色 普	砂粒少	口縁片	
5 弥生甕	—× —× — 沈線のより文様帯を区画、沈線区画された中を斜めの格子沈線で描く 無文部はナデ 内面 ナデ	黄褐色 普	砂粒少	頸部片	
6 弥生甕	—× —× — 頸部無文部から胴部文様への区画に2段2単位のS字状結節区画 中間 はハケ目を残す 胴部は附加条縄文 内面 ナデ	暗褐色 良	長石類	頸部片	
7 弥生甕	—× —× — 外面 無節結節文で頸部と胴部を区画 胴部は単節縄文 内面 ナデ	明黄褐色 良	砂粒	頸部～ 胴部片	
8 弥生甕	—× —× — 外面 附加条縄文 内面 ナデ	明橙褐色 普	長石類	胴部片	

A015

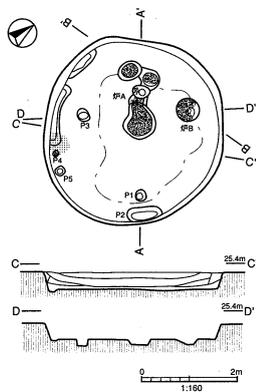


図56 A015

遺構 ハードロームの地床であり、住居跡中央に硬化面を認めた。炉跡は5カ所認められた。床面にピットを5基検出したが、柱穴とは判断できなかった。P1は出入口に伴うと捉えた。覆土は自然堆積であり、全体的に層のしまりと粘性をもつ色味が強いもので1・2層黒色土、3層黒褐色土、4～6層暗褐色土であった。P4及び壁際にわたって床面に層厚5mの白色粘土が床面に貼りついた様な状態で検出された。

遺物 弥生時代後期の土器小片が少量出土した。

所見 弥生時代後期の所産と捉えた。炉跡が5基検出され火床もそれぞれ検出されたが、新旧関係は捉えられなかった。また、炉の改替についてはその目的を捉えられなかった。

表30 A015遺物観察表

(単位mm)

種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1 土師器 罎	(118)× -×(39) 外面 ヘラケズリ後ヘラミガキ 内面 ヘラケズリ後ヘラミガキ	黄褐色 硬	赤色粒少	口縁片 1/6以下	
2 土師器 壺?	-× -× - 折返し口縁 外面 口唇-単節縄文 折返し部にも単節縄文 内面 ヘラミガキ	暗赤褐色 普	雲母	口縁片	
3 弥生 甕	-× -× - 外面 口唇部-キザミ 口縁-6条単位の櫛描波状を3段施文 内面 ナデ	暗褐色 普	砂粒	口縁片	
4 弥生 甕	-× -× - 外面 無節縄文 内面 ハケナデ	暗褐色 普	雲母	胴部片	
5 弥生 甕	-× -× - 外面 頸部-ハケ目 胴部とはS字状結節で区画 胴部-附加条縄文 内面 ハケナデ	黒褐色 良	砂粒	口縁~ 胴部片	
6 弥生 甕	-× -× (75) 外面 底部付近まで単節縄文 内面 ナデ	暗褐色 普	砂粒	底部片 1/4以下	
7 弥生 甕	-× -× (75) 外面 附加条縄文 胴部下端はヘラケズリ後ナデ 内面 ナデ	暗黒色 普	砂粒	底部 1/2 遺存	

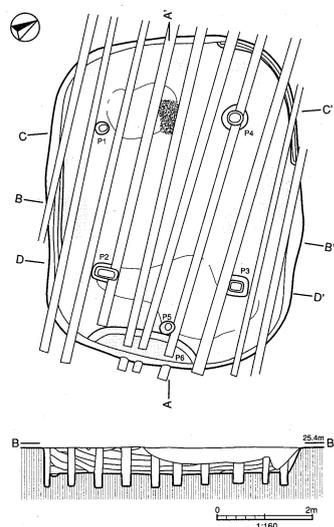


図57 A016

A016

遺構 ハードロームの地床で炉跡周辺及び出入り口付近に硬化面を認める。主柱穴はP1~P4の4基で、いずれも柱材の腐れと捉えた。柱穴床から0.6m~0.8mの深さである。炉跡はP1~P4中間に検出され床へ踏込みはなく、床面に強く赤化した火床のみが認められる。覆土は自然堆積であり色調、包含物から11層に分層した。住居跡壁際点在して焼土の散布を認めた。

遺物 全体的に出土は少なく散在している。覆土上層には、弥生土師器片が床面直上層から土器片が多い傾向を示している。

所見 やや平面形や柱穴配置が歪んだ堅穴住居跡である。焼土は不用材の焼却とは捉えられず、また火災によるものとは捉えられなかった。

表31 A026遺物観察表

(単位mm)

種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1 土師器 小型鉢	(95)× -×(42) 外面 口縁-ナデ 以下ヘラケズリ 内面 ナデ	明褐色 普	砂粒少	口縁片 1/4	
2 土師器 高坏	-× -×(28) 坏部下位にに稜を有す 外面 ヘラミガキ 内面 ヘラミガキ	暗赤褐色 普	砂粒少	坏部 1/4 口縁欠	赤彩
3 弥生 甕	-×46×(28) 外底面に刺突痕・木葉痕 外面 ナデ 内面 ナデ	暗褐色 良	砂粒	底部 2/3	

4	弥生鉢	-× -× - 口縁-キザミ(ハケ端か?) 外面 ヘラケズリ後ヘラミガキ 内面 ナデ	暗褐色 普	砂粒	口縁片	
5	弥生甕	-× -× - 折返し口縁 頸部に輪積み痕 口唇-附加条縄文 外面 口縁~頸部ナデ 内面 ナデ	暗褐色 普	砂粒	口縁片	6と同一個体
6	弥生甕	-× -× - 折返し口縁 頸部に輪積み痕 口唇-附加条縄文 外面 口縁~頸部ナデ 内面 ナデ	暗褐色 普	砂粒	口縁片	5と同一個体
7	弥生鉢	-× -× - 口縁大きく内湾する 口唇-キザミ 外面 ヘラミガキ	明暗褐色 良	砂粒	口縁片	
8	弥生甕	-× -× - 外面 頸部-ナデ 胴部-単節縄文地文 内面 ナデ	暗黄褐色 良	砂粒	頸部~ 胴部片	
9	弥生甕	-× -× - 外面 単節縄文 内面 ナデ	黒褐色 普	雲母少	胴部片	8と同一個体か?
10	弥生甕	-× -× - 外面 附加条縄文 内面 ナデ	暗褐色 普	雲母	胴部片	
11	弥生甕	-× -× - 外面 単節縄文 内面 ナデ	黒褐色 良	雲母少	胴部片	

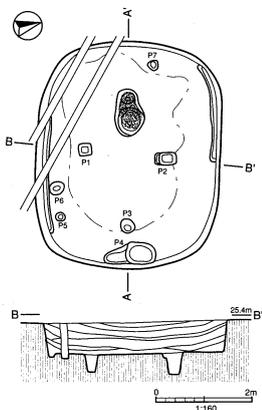


図58 A018

A018

遺 構 ハードロームの地床で、住居跡中央~西コーナーにかけて硬化面を認めた。炉跡は坑底に2基のピットを認め、その間はテラス状となる。火床は赤化が強く、形状から2基の炉跡の重複を窺わせたが、覆土からは捉えられなかった。支柱穴は、床からの深さ0.7~0.8mをもつP1・P2と捉えた。P3は出入口に伴うと捉えた。P4~P7は深さ0.03~0.10mであり、用途は捉えられなかった。周溝は北壁と南壁の一部に巡る。覆土は自然堆積であり、色調により1~4層黒褐色土、5~7・9・10層暗褐色土、8層褐色土と分層した。

遺 物 全体的に出土は少ない。その中で覆土上層は多いと言えるが、土師器小片が主体である。覆土中層~床面にかけては少ない。

所 見 弥生時代後期の所産と捉えた。

表32 A018遺物観察表

(単位mm)

種別器形	法 量 口径×底径×器高 成 形・調 整 等 の 特 徴	色 調 焼 成	胎 土	遺 存	備 考
1 土師器高杯	(160)×-×(43) 外面 ハケ後ヘラミガキ 内面 ハケ後ヘラミガキ	暗褐色 普	砂粒少	坏部	赤彩
2 土師器高杯	(174)×-×(59) 外面 ハケ後ヘラミガキ 内面 ヘラミガキ 輪積み痕	明黄褐色 普	砂粒	坏部	
3 土師器器台	-×-×(110) 外面 ヘラミガキ 内面 ナデ	暗褐色 良	砂粒多 赤色粒少	脚部	赤彩
4 土師器高杯	-×-×(80) 外面 ヘラミガキ 内面 ナデ(輪積み痕オサエ)	明赤褐色 良	砂粒多	脚部	赤彩
5 土師器高杯	-×-×(50) 脚部一焼成前穿孔 外面 ヘラミガキ 内面 ハケ後ナデ	明黄褐色 軟	砂粒	脚部	
6 土師器埴	-×-×(127) 最大径150 外面 ヘラミガキ 内面 ナデ 頸部接合部に指頭オサエ痕	外赤褐色 内淡褐色 良	砂粒	頸部~ 胴部	

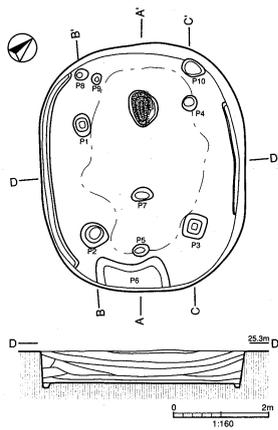


図59 A020

表33 A020遺物観察表

(単位mm)

種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1 弥生壺	—×—×102 最大径(105) 頸部を沈線区画し、非常硬く撚った無節の縄文原体を使用か？ 外面 ヘラミガキ 内面 ナデ	明赤褐色 軟	砂粒粗	口縁～頸部片	頸部上半赤彩
2 弥生甕	—×(61)×(26) 外面 単節縄文 内面 ナデ	明黄黒色 軟	赤色粒少 粗	底部片	
3 土製品 土玉	長径(25)×厚さ(28) 孔径(6) 重さ(7.6)g 全体をナデによる整形 焼成前 穿孔	明褐色 良	砂粒良	1/2	

A020

遺構 ハードロームの地床で、主柱穴間を中心に硬化面を認めた。炉跡はP1・P4の中間に設けられ、若干凹凸ある坑底に赤化した火床を認めた。主柱穴はP1～P4の4基であり、床から0.70～0.80mの深さを有する。P5は出入口に伴う。他のピットは0.05～0.15mの深さである。周溝は北東壁と南西壁の一部に巡る。覆土は自然堆積で、1・3層黒褐色土、2・4層黒色土、5・6・8・9層褐色土、7・10～12層暗褐色土である。

遺物 覆土上～中層は土師器小片が少量出土。中層～床面にかけては弥生土器片も出土している。

所見 出土遺物や形状から弥生時代後期の所産と捉えた。

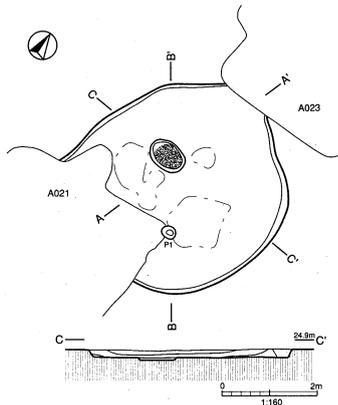


図60 A022

表34 A022遺物観察表

(単位mm)

種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1 弥生甕	—×—×— 折返し口縁 外面 口縁～頸部 ハケ目 内面 ハケ	黒褐色 良	砂粒	口縁片	
2 弥生甕	—×—×— 外面 撚糸文 内面 ナデ	暗褐色 普	長石類	胴部片	
3 弥生壺	—×—×— 外面 単節縄文 胴下半 ヘラミガキ 内面 ヘラケズリ後ヘラミガキ	暗赤褐色 良	長石類	胴部片	
4 弥生甕	—×—×— 外面 単節縄文 内面 ヘラナデ	明赤褐色 良	砂粒少 密	胴部片	

A022

遺構 掘込みの浅い堅穴住居跡で、ソフトロームを地床とし、炉跡の西側にわずかに硬化面を認めた。炉跡も浅く凹み状であり、坑底に赤化した火床を認めた。炉跡脇及び東側の床面には焼土が散布していた。覆土は自然堆積であり、1層黒色土、2層黒褐色土、3層暗褐色土と捉えた。

遺物 弥生土器片と土師器片が少量出土している。形状は不明であるが、鉄器も出土している。

所見 奈良・平安時代のA021とA023と重複し損壊を被り、本住居跡も平面形が不整形となっている。鉄器は重複による流込みと捉えた。弥生時代後期と捉えているが、古墳時代初頭の住居跡となるかも知れない。

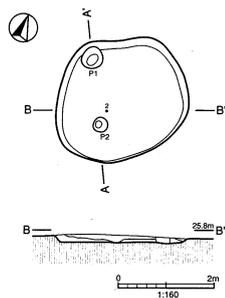


図61 A028

A028

遺構 不整円形の浅い凹み状の遺構である。ローム漸移層からソフトロームを掘込み、緩やかな凹凸ある床面である。硬化面は認められなかった。ピットは2基検出し、ローム混入した褐色土である。柱穴・炉跡・周溝は検出されなかった。遺構覆土は1層黒褐色土、2層暗褐色土、3層褐色土と捉えた。

遺物 出土は少ない。1・2は蓋のつまみである。

所見 小規模な堅穴状であ。若干の遺物の出土から住居跡と捉えるが、堅穴状の土坑と捉えた方がよいかも知れない。遺物から弥生時代後期と捉えた。

表35 A028遺物観察表

(単位mm)

種別器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1 弥生蓋	—×—×(24) 把手径 34 外面 ケズリ後粗いミガキ 指頭オサエ痕 内面 ナデ 把手上面—ナデ	明褐色 良	砂粒多	把手	
2 弥生蓋	—×—×(19) 把手径 45 外面 粗いミガキ 指頭オサエ痕 内面 ナデ	明褐色 良	砂粒	把手	
3 弥生壺	(133)×—×(18) 頸部から大きく屈曲して立上がる口縁 外面 ナデ 内面 ナデ	明褐色 良	砂粒多	口縁片	
4 弥生甕	(164)×—×(41) 外面 口縁ナデ 接合部に縄文圧痕 頸部 ナデ 内面 ナデ	明黄褐色 良	砂粒	口縁片	
5 弥生甕	—×—×— 口唇に単節縄文 口縁部 単節状文 内面 ナデ	明褐色 普	雲母	口縁片	
6 弥生甕	—×—×— 外面 附加条縄文 内面 ナデ	暗褐色 普	雲母	胴部片	

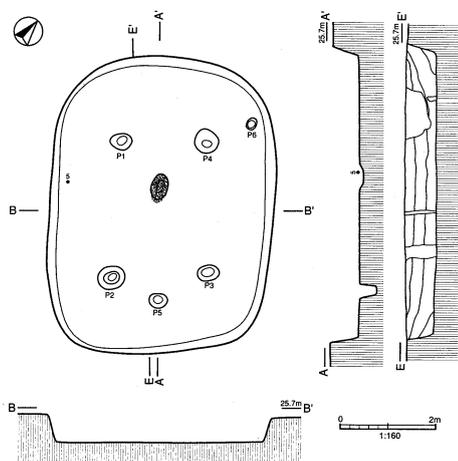


図62 A029

A029

遺構 床はローム面であり、貼床や硬化面は認められなかった。炉跡は住居跡中央よりやや北東壁寄りに設けられ、火床は全体に赤化するのではなく、焼土ブロックが密に詰まる状態であった。支柱穴はP1~P4であり、床面から0.75~0.86mの深さであるが、0.75~0.77mが3基占める。P5は出入口に伴うもの。周溝は検出されなかった。覆土は1・2層黒褐色土、3~5層暗褐色土、6層褐色土の自然堆積であった。

遺物 出土遺物は少ない。5は唯一の大型破片であった。

所見 遺物5の出土から弥生時代後期の住居跡と捉えた。

表36 A029遺物観察表

(単位mm)

種別器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1 弥生甕	(190)×—×(65) 口縁 連続のオサエにより波状、爪痕 内外面ともナデ	明黄褐色 良	砂粒	口縁 1/4	

2	弥生甕	(198)×-×(28) 口縁 連続のオサエにより波状 内外面ともナデ	暗褐色	砂粒	口縁 1/4	
3	土師器甕	178×(71)×247 最大径 235 外面 口縁端ナデ 口縁 ミガキ 胴部 ヘラミガキ 内面 口縁ケズリ後ミガキ 胴部 ヘラナデ	明黄褐色 良	砂粒	口縁~ 底部 2/3	
4	弥生甕	-×(56)×(19) 内外面ともナデ	暗赤褐色 良	砂粒	底部 2/3	
5	弥生甕	-×-×- 外面 附加条縄文 内面 ナデ	黄灰色 良	雲母	胴部片	
6	弥生甕	-×-×- 頸部はナデの後、頸部と胴部をS字状結節で区画 胴部 単節縄文 内面 ナデ	暗褐色	砂粒	頸部~ 胴下半	

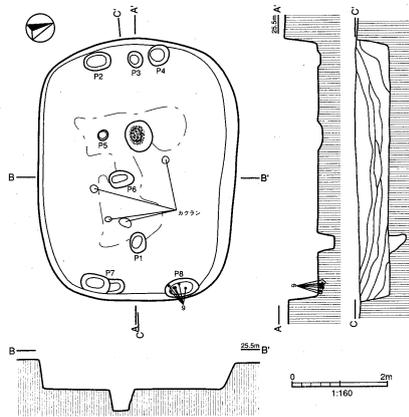


図63 A032

表37 A032遺物観察表

種別 器形	法量 成形・調整等 の 特徴	口径×底径×器高	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1 土師器甕	-×(33)×(31) 外面 ケズリ 内面 ナデ		暗褐色 良	赤色粒	胴部~ 底部 1/2	ミニチュア土器
2 土師器甕	-×-×(24) 把手径33 外面 ケズリ 内面 ケズリ後ナデ		明黄褐色 良	赤色粒	底部	
3 土師器蓋	-×(31)×(26) 外面 粗のミガキ 内面 ナデ		暗黄褐色 良	砂粒	底部	
4 土師器埴	(122)×-×(46) 外面 口縁ミガキ胴ケズリ後ミガキ 内面 ミガキ胴ケズリ後ミガキ		暗赤褐色 良	砂粒	口縁~ 胴部	赤彩
5 土師器埴	-×-×(61) 最大径101 外面 ミガキ 内面 ナデ 頸部接合部に指頭オサエ痕		赤色 良	砂粒	胴部片	赤彩
6 土師器甕	(142)×-×(41) 外面 口縁部-ナデ以下ハケ 内面 口縁部-ナデ胴ナデ器面が荒れている。		暗褐色 良	砂粒	口縁~ 胴上部 1/3	
7 弥生壺	-×80×(137) 最大径274 外面 肩部-羽状縄文、下端をS字状結節縄文にて区画 胴部-ミガキ後棒状工具により沈線による蓋形区画内に単節縄文 内面 胴上部-ヘラナデ 下部-ミガキ 胴部中位に最大径		暗赤褐色 良	砂粒	胴部片 1/4	胴部赤彩
8 弥生甕	-×97×(137) 外面 ケズリ後ミガキ 内面 ナデ 指頭 外底面-ケズリ後ナデ		暗褐色 硬	砂粒	胴下半 1/2	

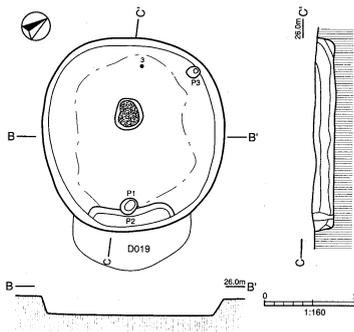
(単位mm)

A032

遺 構 ハードルーム上部を床面とするが、床には褐色土・暗褐色土がかなり混入している。炉跡から住居跡中央にかけ、アメーバ状に硬化面を認めた。炉跡は焼土ブロックを多く含んでいた。覆土は1・4層黒褐色土、2・5~7層暗褐色土、8層褐色土であり、3層は焼土層である。覆土は自然堆積の状況を示しているが、3層に見られるとおり埋没過程で火の使用が行われている。

遺 物 土師器片を主体とするが、流込みを捉えた。

所 見 古式土師器片の出土をみるが形状より弥生時代後期と捉えた。



A042

遺構 ハードロームの地床で、住居跡中央に広く硬化面を認める。床面での火の使用痕があり、床に全体的に焼土や炭化粒の散布がある。炉痕は凹凸ある坑底に赤化の強い火床を認めた。柱穴は検出されず、出入口に伴うP1を検出した。覆土は1・2層黒色土、3層暗褐色土、5層明褐色土、6層黒褐色土であり、4層は炭化粒を少含した焼土層であった。1・2層は自然堆積であった。

遺物 出土遺物は少ない。

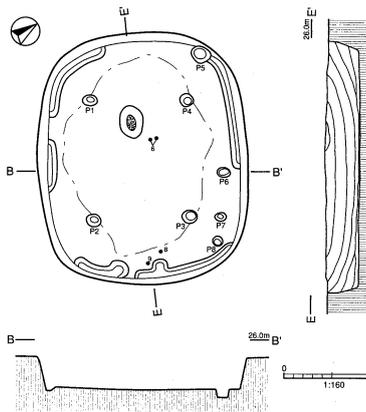
所見 住居廃絶後に不用材の焼却行為を行った住居跡である。弥生時代後期と捉えた。

図64 A042

表38 A042遺物観察表

(単位mm)

種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1 弥生甕	—×—×— 折返し口縁・外反 口唇—単節縄文 口縁—単節縄文、折返し端部キザミ 頸部 頸部ナデ後櫛描のスリット、スリット内は波状の櫛描 内ミガキ	褐色 良	砂粒	口縁片	
2 弥生甕	—×—×— 折返し口縁・やや内湾 口唇—単節縄文 口縁—単節縄文 頸部—ナデ 内面 ナデ	黄褐色 普	砂粒	口縁片	
3 弥生甕	—×(172)×(162) 頸部ヘラナデ後櫛描器によるスリット スリット内は3本～4本1組2 単位の櫛描波状文 胴部—単節縄文	黄褐色 普	砂粒	胴部片 1/2	
4 弥生甕	—×(77)×(20) 外面 底部付近まで縄文 下端はナデ 内面 ヘラナデ 底部—木葉痕	褐色 普	砂粒	底部片 1/2	



A043

遺構 ハードロームの地床で、住居跡中央に硬化面を認めた。炉跡はP1・P4の略中間に設けられ、火床はやや不明瞭である。支柱穴はP1～P4である。0.55～0.70mの深さである。出入口ピットは南西壁周溝とと連なっていた。覆土は1～3層黒色土、4層黒褐色土、5・6層暗褐色土の自然堆積であった。

遺物 3は蓋である。

所見 弥生時代後期の所産と捉えた。

図65 A043

表39 A043遺物観察表

(単位mm)

種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1 土製品 紡錘車	長径 56×短径 55×厚さ 16 孔径 9 幅5～12mm程、周縁が中央に対して3mm高くなる 全面単節縄文	明黄褐色 良	砂粒多	完形	一部器面剥落
2 土師器 高坏	—×(124)×(24) 外面 ヘラミガキ 内面 ハケナデ	明赤褐色 普	砂粒	脚端	赤彩

3	弥生 蓋	—×45×(36) 外面 粗のヘラミガキ 内面 粗のヘラミガキ	暗褐色 良	砂粒	把手～ 天蓋	
4	弥生 甕	54×41×66 外面 口唇一縄文丁寧なヘラミガキ 内面 丁寧なミガキ	暗褐色 良	砂粒	2/3	
5	弥生 甕	—×—×(48) 外面 ヘラミガキ 文様帯	明灰色 良	砂粒	頸部 1/3	器面が荒れる
6	土製品 紡錘車	—×(89)×(36) 外面 斜縄文ヘラケズリ 外底部—ナデ 内面 ナデ 頸部—区画のない文様	明褐色 普	砂粒	底部 1/4	
7	弥生 甕	136×39×15 最大径146 外面 胴部ヘラケズリ後ナデ 内面 指頭オサエ後胴部のヘラケズリ後ナデ 内底面—指頭オサエ	暗橙黄褐 良	砂粒	2/3	
8	石器 砥石	(107)×84×18 重量326.1g 下端欠韻 使用面は5面 左側面と上端の接点部から剥離面あり				凝灰珪岩
9	弥生 甕	—×—×— 外面 口唇端—単節縄文、以下同様 頸部は無文？ 内面 ナデ	明橙褐色 普	長石類	口縁片	

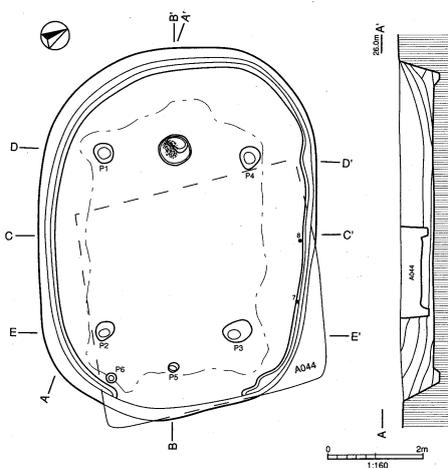


図66 A045

A045

遺構 覆土中において1軒の奈良・平安時代の竪穴住居跡と重複する遺構である。このため遺構検出面ではやや不明瞭な形状となっていた。床はハードロームの地床で、支柱穴間より外まで、広く硬化面を認めた。炉跡はP1・P4の中間に設けられ、小規模な火床を認めた。支柱穴はP1～P4であり、住居跡に比してやや壁寄りに掘込まれていた。P1・P3は0.90m、P4は0.80mと深いが、P2は0.50mと他の支柱穴に比して浅くなっていた。P5は出入口に伴うピットと捉えた。周溝は北東壁を除いて巡る。覆土は自然堆積であり、色調、包含物により8層に捉えた。

遺物 住居跡の規模に比して少なかった。また、本住居跡の覆土中層以上はA044との重複によって大きく失われており、遺物出土状態に不明瞭な所もあった。

所見 出土遺物から弥生時代後期の主催と捉えた。

表40 A045遺物観察表

(単位mm)

種別 器形	法量 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1 弥生 甕	—×—×— 折返し口縁 外面 口縁—単節縄文 口縁部折返し端は棒状工具による連続刺突(キザミ)	明黄褐色 良	砂粒	口縁片	
2 弥生 甕	—×—×— 折返し口縁 口縁 単節縄文 口縁折返し端—キザミを施す 頸部 ナデ 内面 ナデ	暗赤褐色 不良	長石類	口縁片	
3 弥生 甕	—×—×— 口縁 口唇—外面 口唇—櫛端のキザミ 頸部—櫛描波状文 内面 ナデ	暗褐色 普	砂粒	口縁片	

4	弥生甕	-×-×- 外面 ナデ後結節文 内面 ナデ	暗赤褐色 硬	砂粒	頭部片	
5	弥生甕	-×-×- 外面 ナデ後2段のS字状結節文 内面 ナデ	明褐色 良	砂粒	頭部片	
6	弥生甕	-×-×- 外面 頸部-ナデ後結節文にて胴部と区画 胴部-単節縄文 内面 ナデ	暗赤褐色 良	砂粒	頭部片	輪積痕残す
7	弥生甕	-×-×- 外面 単節縄文 2段無節のS字状結節文が入る 内面 ナデ	暗赤黒色 普	砂粒	胴部片	
8	弥生甕	-×-×- 外面 単節縄文地文 内面 ナデ	暗赤褐色 普	砂粒	胴部片	
9	石器 砥石	(46)×(59)×(31) 重量(67.7)g 2面の部分を残す(欠損品)			断片	凝灰岩

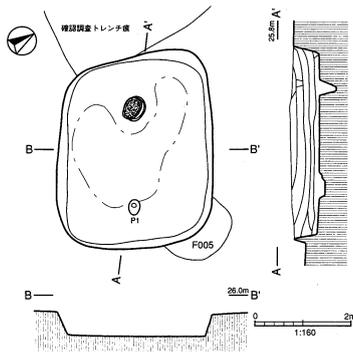


図67 A046

表41 A046遺物観察表

(単位mm)

種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1 土師器 甕	-×74×(21) 外面 ケズリ 底部外面-中央部ナデ他は無調整 内面 ナデ	明褐色 良	石粒	底部片	
2 弥生甕	-×-×- 外面 単節縄文 内面 ナデ	明暗褐色 良	長石類	胴部片	
3 弥生甕	-×-×- 外面 単節縄文 内面 ナデ	明褐色 普	砂粒	胴部片	

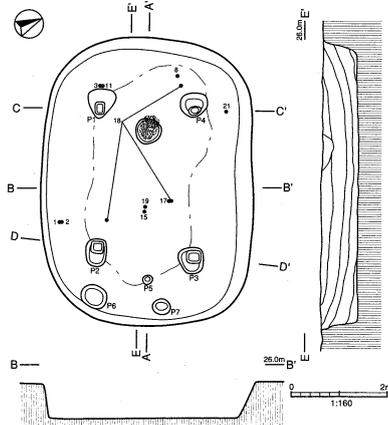


図68 A047

A046

遺構 ハードロームの地床であり、住居跡中央に硬化面を認める。炉跡は住居跡中央から北西壁寄りに検出された。火床は坑底から壁にかけて赤化していた。主柱穴は検出されず出入口に伴うP1のみであった。覆土は色調等によって分層し、1・2層黒褐色土、3層暗褐色土、4・5・7層褐色土、6層明褐色土であった。自然堆積である。

遺物 出土遺物は少ない。その中で縄文時代早期・条痕文片の出土がやや多くなっている。F005との重複もあるが、流込みと捉えた。

所見 弥生時代後期の所産と捉えた。

A047

遺構 ハードロームの地床であり主柱穴間内に硬化面を認めた。P1~P4は主柱穴であり、いずれも床面上から大きく広がり柱材の引抜きを窺わせている。床面から深さは0.65~0.8mである。炉跡はP1、P4の中間のやや内側の設けられ赤化した火床が一部床面迄広がっていた。覆土は自然堆積であり、色調、包含層により分層した。

遺物 他の住居跡に比し弥生土器片がやや多く出土している。

所見 出土遺物より弥生時代後期の所産を捉えた。

表42 A047遺物観察表

(単位mm)

種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1 弥生甕	—×—×— 外面 口縁 単節縄文 頸部 ナデ 内面 ナデ	暗褐色 良	長石類	口縁片	
2 弥生甕	—×—×— 頸部 輪積痕 口唇 単節縄文を深く施文 外面 文以下3段輪積痕をのこし ナデ整形 内面 ナデ	暗褐色 良	砂粒	口縁片	
3 弥生甕	—×—×— 外面 頸部—ナデ 胴部 単節縄文 内面 ナデ	黄褐色 普	砂粒	頸部～ 胴上部	スス付着
4 弥生甕	—×—×— 外面 頸部はナデ 胴部との区画として結節文 胴部 撚糸文 内面 ナデ	暗褐色 良	密	頸部～ 胴部	
5 土師器 高杯	—×—×(56) 外面 脚部 羽状縄文 接合部と脚部上位を結節文にて区画 内面 ナデ	暗赤褐色 普	砂粒 赤粒子	脚部 2/3	接合部まで赤彩
6 土師器 高杯	—×—×(56) 脚部は小さく坏部は大きくなる器形 孔数不明だが脚部に孔を有す 外面 ミガキ 内面 ミガキ	暗褐色 普	砂粒	坏～ 脚上部	
7 弥生壺	104×33×107 外面 ミガキ 内面 口縁ミガキ 胴部—ナデ指頭オサエ痕	暗赤褐色 普	砂粒	完形	赤彩
8 弥生壺	128×—×(46) 折返し口縁 外面 ナデ 頸部—ヘラケズリ 内面 ヘラナデ	暗褐色 普	砂粒	口縁片 2/3	
9 弥生甕	(159)×—×(46) 外面 ハケ 内面 ハケ	明黒灰色 普	砂粒	口縁片	
10 弥生甕	164×—×(94) 外面 口縁—ナデ 頸部～胴部 ヘラミガキ 内面 口縁—ナデ 頸部～胴部 ヘラミガキ	明黄褐色 良	砂粒	口縁～ 胴上部 1/4 以下	
11 弥生蓋	—×(32)×(18) 外面 ナデ 指頭オサエ 内面 ナデ	暗褐色 普	砂粒	把手	
12 弥生蓋	—×44×(21) 外面 ナデ 内面 ナデ	暗褐色 普	砂粒	把手	
13 弥生甕	—×(54)×(21) 外面 ナデ 内面 ナデ	明褐色 普	砂粒	底部片	
14 弥生甕	—×53×23 外面 ケズリ 外部底面—ケズリ後ナデ 内面 ナデ	暗黄褐色 府	砂粒	底部片	
15 弥生甕	—×44×(15) 外面 ケズリ後ミガキ 外部底面—木葉痕残るがナデ 内面 ナデ	暗褐色 普	砂粒	底部片	
16 弥生甕	—×73×(29) 外面 ナデ 複節縄文 内面 ナデ	暗褐色 普	砂粒	底部片	
17 土師器 壺	—×75×140×(132) 外面 肩部に斜格子文 頸部と胴部を6本単位の横位櫛描で区画 胴部 撚糸文 内面 ナデ	暗黄褐色 普	砂粒	2/3	口縁外面など器 面が荒れる

種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1 弥生甕	-× -× - 外面 口縁 単節縄文 頸部 ナデ 内面 ナデ	暗褐色 良	長石類	口縁片	
2 弥生甕	-× -× - 頸部 輪積痕 口唇 単節縄文を深く施文 外面 文以下3段輪積痕をのこし ナデ整形 内面 ナデ	暗褐色 良	砂粒	口縁片	
3 弥生甕	-× -× - 外面 頸部-ナデ [*] 胴部 単節縄文 内面 ナデ	黄褐色 普	砂粒	頸部~ 胴上部	スス付着

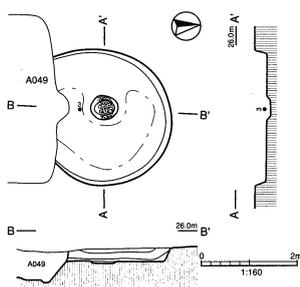


図69 A048

A048

遺構 略円形の堅穴住居跡であり、床面はハードロームの上部となっている。炉跡を囲むように住居跡東側に硬化面を認めた。炉跡は住居跡の略中央に検出し、火床は帯状に認めた。支柱穴・周溝は検出しなかった。

覆土は自然堆積であり、1・2層黒褐色土、3層暗褐色土と捉えた。

遺物 極めて少なかった。

所見 奈良・平安時代のA049と重複している。出土遺物や覆土から弥生時代後期と捉えた。

表43 A048遺物観察表

(単位mm)

種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1 弥生甕	-×52×(21) 外面 ケズリ 外部底面-ナデ 内面 ナデ	明橙褐色 良	砂粒	底部片	
2 弥生甕	-× -× - 外面 単節縄文 内面 ナデ	明黄褐色 良	雲母	胴部片	
3 弥生甕	-× -× - 外面 単節縄文 内面 ナデ	暗黄褐色 黒	雲母	胴部片	

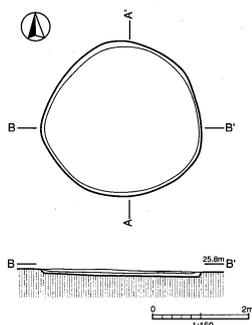


図70 A051

A051

遺構 壁高0.10mの浅い掘込みの遺構である。ソフトロームを床面とするが、硬化面は認められず、全体的に軟弱であった。炉跡・柱穴・周溝は、床面を精査したが検出されなかった。覆土は自然堆積であり、色調によって分層し、1層黒褐色土、2層褐色土と捉えた。

遺物 弥生土器小片が数点出土したのみである。

所見 焼成施設も柱穴も検出されず、床の硬化面も認められなかった凹み状の遺構である。堅穴住居跡としたが、本来は堅穴状遺構と言うべきかもしれない。出土遺物から弥生時代後期の所産とした。

表44 A051遺物観察表

(単位mm)

種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1 弥生壺	-×(78)×(28) 外面 ナデ 単節縄文 内面 ナデ 外部底面-木葉痕	明褐色 良	砂粒	底部片 1/4	

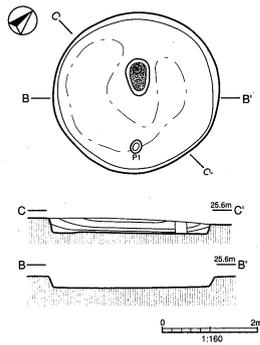


図71 A052

A052

遺構 ソフトロームの地床で、炉跡を囲む様に踏固められた面を認めしたが、硬化面とは捉えられなかった。炉跡は住居跡中央よりやや北西壁寄りに設けられ、坑底に僅かに火熱痕を認め火床と捉えた。柱穴・周溝は検出されず、P1は出入口に伴う。覆土は自然堆積であり、色調によって1層黒色土、2層黒褐色土、3層暗褐色土、4層褐色土と捉えた。

遺物 弥生土器及び縄文早期・条痕文の各小片が少量出土するが、覆土一括で捉えている。

所見 出土遺物から弥生時代後期と捉えた。

表45 A052遺物観察表

(単位:mm)

種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1 弥生甕	-×-×- 口唇はつまみによる凹凸 外面 口唇をヘラによるミガキ 内面 ナデ	明黄褐色 良	砂粒	口縁 部片	
2 弥生甕	-×-×- 外面 ミガキ 内面 ナデ	暗黄褐色 普	砂粒	胴部片	

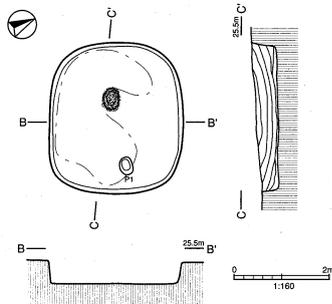


図72 A053

A053

遺構 ハードロームの地床。炉跡と出入口を囲むように、住居跡西半に硬化面を認めた。炉跡は住居跡中央から僅かに西壁に寄って設けられ、赤化した火床は坑底から周囲の床面に及んでいた。柱穴・周溝は検出できず、P1は出入口に伴うもの。覆土は自然堆積であり、色調・包含物により1・2層黒色土、3・5・6層暗褐色土、4層黒褐色土と捉えた。

遺物 弥生土器片と縄文早期・条痕文の小片が少量出土している。

所見 遺物から弥生時代後期と捉えた。

表46 A053遺物観察表

(単位:mm)

種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1 弥生壺	-×-×- 外面 ミガキ 内面 ナデ	暗褐色 普	砂粒 赤褐粒	胴部 破片 1/4	

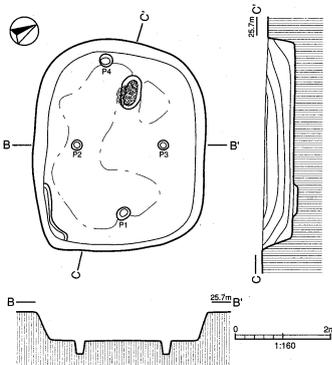


図73 A054

A054

遺構 ハードロームの地床であり、住居跡西側に硬化面を認める。炉跡は北西壁に寄って設けられ、赤化した火床は坑底から炉跡西側の床面に及んでいた。ピットは4基検出し、P1~P3は0.30m、P4は0.05mを床から掘込んでいるが、柱穴かは捉えられなかった。覆土は自然堆積であり、1・3層黒褐色土、2層黒色土、4・5層暗褐色土と捉えた。

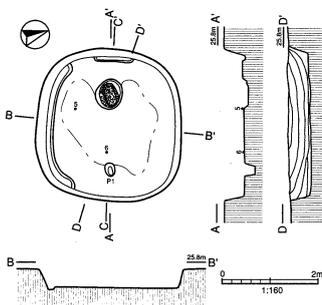
遺物 弥生土器小片が若干出土するが、縄文早期・条痕文片の方が多。1は伏せた状態で床面から出土した。2は蓋のつまみである。

所見 弥生時代後期の所産である。

表47 A054遺物観察表

(単位mm)

種別器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1 弥生甕	170×-×(117) 外面 口縁から頸部-ナデ 頸部と胴部 2重S字状結節文にて区画 胴部-捺糸文 内面 ナデ	明赤褐色 普	砂粒 2/3	口縁~ 胴部	
2 土師器蓋	-×46×(26) 外面 ナデ 指頭オサエ 内面 ナデ	暗褐色 普	砂粒	把手	
3 弥生甕	-×76×(31) 外面 ケズリ 内面 ナデ 外底面-ナデ 内面荒れている	褐色 普	砂粒	底部片 1/4	
4 弥生甕	-× -× - 外面 口縁-羽状縄文 下端を一重沈線で区画 頸部-ミガキ 内面 ミガキ	暗褐色 普	砂粒	口縁片	
5 弥生甕	-× -× - 外面 S字状結節にて頸部と胴部を区画 胴部-附加条縄文 内面 ナデ 接合痕残る	暗褐色 良	砂粒	胴部片	
6 弥生甕	-× -× - 外面 太い原体の単節縄文 内面 ハケ後ナデ	暗褐色 硬	砂粒	胴部 半部	



A055

遺構 ハードロームの地床で、住居跡中央に硬化面を認める。炉跡は西壁寄りに設けられ、坑底内のピットに赤化した火床を認めた。柱穴は検出されず、P1は出入口に伴う。覆土は自然堆積であり、1層黒色土、2~4層黒褐色土、5・6層褐色土であった。

遺物 縄文早期・条痕文片と弥生土器片が少量出土するのみである。1は横倒しの状態で床より3m高く、2は潰れた状態でそれぞれ床面から出土した。

所見 弥生時代後期の所産である。

図74 A055

表48 A055遺物観察表

(単位mm)

種別器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1 弥生甕	131×58×128 最大径112 外面 口縁部に4乃至6本単位の櫛状工具による波状文を3段施す。頸部に同一工具による横線、胴部に単節縄文LRを施す。	褐色 良	砂粒	完形	底面に木葉痕
2 土師器壺	215×-×(84) 外面 折返し口縁部を指頭オサエ他ミガキ 内面 器面が荒れている。表彩範囲推定。	明橙褐色 良	砂粒多 赤褐色粒	口縁部 2/3	赤彩
3 弥生甕	-× -× - 外面 単節縄文 内面 ナデ	暗褐色 普	砂粒多 雲母多	胴部片	
4 弥生甕	-× -× - 外面 ナデ 単節・無節の附加条縄文	暗褐色 普	雲母	胴部片	5と同一個体
5 弥生甕	-× -× - 外面 附加条縄文	暗褐色 普	砂粒	胴部片	
6 弥生甕	-× -× - 外面 単節縄文 内面 ナデ	暗橙褐色 良	雲母	胴部片	

7	土師器 紡錘車	厚さ21 重量(14.0)g 断面形は台形 整形 ケズ後ミガキ 焼成前穿孔	黒褐色 良	砂粒	1/4	
---	------------	---	----------	----	-----	--

A056

遺 構 ハードロームの地床で、主柱穴間内は極めて堅致な硬化面であった。炉跡はP1・P4間に3基検出した。炉aは本住居跡内では大きな炉跡であり、火床の赤化が強いが、炉b・cの火床は淡く赤化するだけであった。炉a・cの火床は床面にまで及んでいた。主柱穴はP1～P4であり、脇を掘込まれてから柱材を引抜いていた。P5は出入口に伴うピットである。

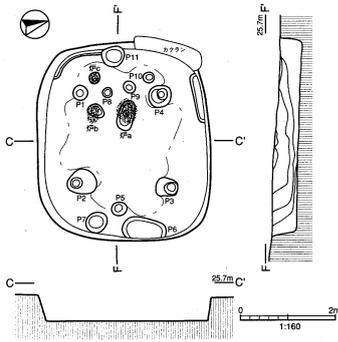


図75 A056

覆土は色調・包含物から1・2・5層黒褐色土、3層黒色土、4層暗褐色土、6層褐色土と捉え、それぞれロームを包含した人為的な埋戻しと捉えられた。

遺 物 弥生土器片と縄文早期片が少量出土している。出土遺物は縄文片が主体を占めていた。

所 見 弥生時代後期の所産。調査時には覆土を自然堆積と捉えたが、堆積状態等を検討した結果、人為堆積と捉えなおした。又、炉跡と捉えた3基の新旧関係は捉えられなかった。

表49 A056遺物観察表

(単位mm)

種別器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1 弥生甕	-× -× - 外面 附加条縄文 内面 ナデ	暗褐色 良	雲母	胴部片	同一個体 可能性有り
2 弥生甕	-× -× - 外面 附加条縄文 内面 ナデ	黄褐色 良	雲母	胴部片	

A057

遺 構 ハードロームの地床で、住居跡中央に硬化面を認めた。炉痕は凹み状で浅く、凹凸ある坑底から壁の一部にかけて赤化した火床を認めた。床面からの深さが0.20～0.30mのP1と、0.50mのP2の2基の用途不明のピットを検出したが、柱穴は検出しなかった。周溝は西コーナーにのみ検出した。覆土は自然堆積であり、色調により1層黒色土、2～4層黒褐色土、5層暗褐色土、6・7層褐色土と捉えた。

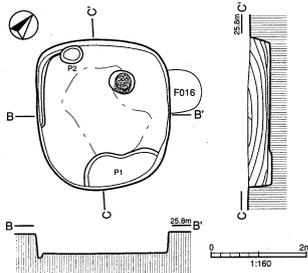


図76 A057

遺 物 弥生土器片と縄文早期・条痕文の小片が少量出土している。

所 見 方形がやや歪んだ平面形である。P1は壁際の軟弱部分の掘過ぎであったかも知れない。弥生時代後期の所産である。

表50 A057遺物観察表

(単位mm)

種別器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1 弥生甕	-× -× - 外面 単節縄文 内面 ナデ	暗褐色 良	砂粒	胴部片	

A060

遺 構 ハードローンを床面とする。主柱穴間を中心とした住居跡中央は床面が損壊し凹んでおり、硬化面は認められなかった。この損壊のためか、やや軟弱感を与えている。炉跡は3基検出したが、炉aはP1とP4の中間に設けられ、本住居跡の本来の炉痕と捉えられた。炉b・cは小規模なものである。火床は何れも赤化しているが、炉aの赤色硬化は強いものであった。主柱穴はP1～P4であり、北西壁側

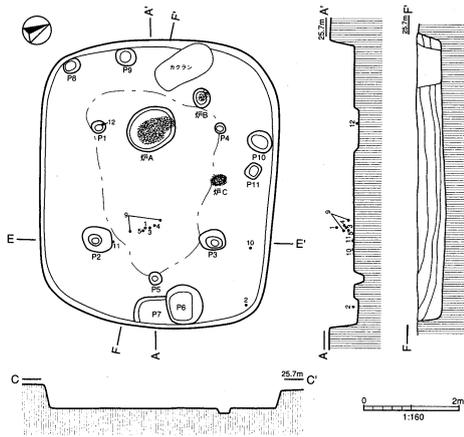


図77 A060

は0.60m、南東壁側は0.75mの深さであった。P5は出入口に伴う。周溝は検出されなかった。覆土は自然堆積で、色調・包含物から1層暗褐色土、2層黒色土、3・4層黒色土と捉えた。

遺 物 住居跡の規模にしては少ない出土である。P2とP3の間に、ややまとまって出土していた。2は蓋のツマミである。3・4・12は床面直上の出土であった。鉄器片や石鏃片が出土するが、流込みと判断した。

所 見 火床を有する炉跡が3基検出されたが、検出位置や遺存状況から炉Aが本住居跡の炉跡と捉えられた。しかし炉Bも小規模でありながらP3・P4の中間に位置し、形態化した住居跡としては良好な位置と言えよう。

表51 A060遺物観察表

(単位mm)

種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1 弥生 ミニチュ ア土器 甕	380× - × (23) 外面 指頭オサエミガキ 内面 ナデ 折返し口縁	暗褐色 良	砂粒	口縁片	蓋の把手か?
2 弥生 甕	- × (70) × (53) 外面 ナデ 地文右下がりに縄文 内面 ヘラナデ	暗黄褐色 良	砂粒	底部片 1/3	
3 弥生 甕	195 × 233 × 61 口縁は小波状 頸部に9段の輪積痕 外面 口縁-ミガキ 胴部-単節斜縄文RL 内面 口縁-斜のヘラナデ	暗黄褐色 普	砂粒	9/10	口縁部9/10欠く
4 弥生 甕	144 × 57 × 157 外面 ナデ 胴下半部 指頭オサエ 内面 ヘラナデ 口縁-胴部中位にスス(?)附着	暗褐色 普	砂粒多	2/3	
5 弥生 大形甕	287 × - × (555) 胴径480 外面 口縁部-横位ナデ 胴部-ナデ後縦位ヘラミガキ 内面 口縁部-横位ナデ 胴部-崩れている為不明	暗褐色 ~ 橙褐色 普	砂粒	口縁~ 胴部	赤彩(不明瞭ため 図化せず) 口縁と胴部未接 合
6 弥生 甕	- × - × - 折返し口縁 外面 口縁 網目状燃糸文 内面 ミガキ	暗褐色 軟	長石類多	口縁片	
7 弥生 甕	- × - × - 口縁直下に折返し状の肥厚を認める 外面 単節縄文 原体端の連続的なキザミ状圧痕 内面 ミガキ	暗赤褐色 普	砂粒	口縁片	
8 弥生 甕	- × - × - 外面 無節縄文 内面 ナデ	暗褐色 普	砂粒少	胴部片	9と同一個体か
9 弥生 甕	- × - × - 外面 無節縄文 内面 ミガキ	暗褐色 普	雲母	胴部片	8と同一個体か

10	弥生 甕	—× —× — 外面 附加条縄文	暗褐色 普	砂粒	胴部片	
11	石器 砥石	長さ75×幅102×厚さ338 重量378.4g 意識的な加工は明らでないが周縁に数回の剥離痕あり 自然面を残す。右側面は敲石としても使用か？				凝灰岩
12	土製品 紡錘車	上面径39×下面径38×厚さ15 重量28.6g 芯孔径6 直径42~43 ナデ 指頭 焼成前の穿孔	明褐色 良	砂粒	略完形	

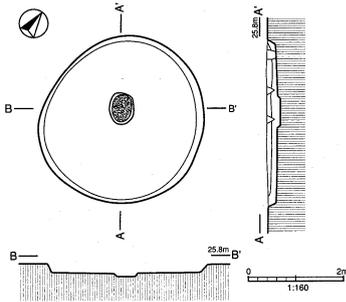


図78 A061

A061

遺構 ソフトロームの地床で、全体的に軟弱な床面である。炉は住居跡の略中央に凹み状に検出され、坑底に淡く赤化した火床を認めた。柱穴・周溝は検出されなかった。覆土は自然堆積で、1層黒色土、2層黒褐色土と捉えた。

遺物 殆ど出土しなかった。

所見 平面形からは判然としなかったが、僅かな出土遺物や覆土等から弥生時代後期の竪穴住居跡と捉えた。

表52 A061遺物観察表

(単位mm)

種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1 弥生 甕	—× —× — 外面 口縁-附加条縄文 内面 ナデ	暗黄褐色 普	砂粒	口縁片	
2 弥生 甕	—× —× — 外面 無節縄文 内面 ケズリ後ナデ	暗褐色 普	砂粒	胴部片	

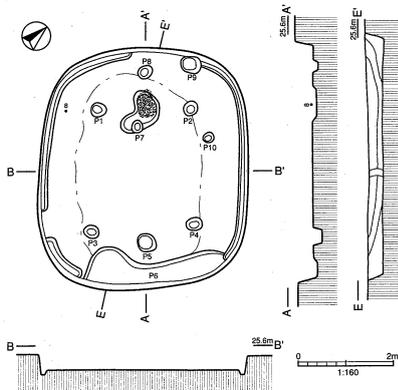


図79 A062

A062

遺構 ハードロームの地床である。主柱穴間を中心として床面は損壊のためか、黒色土とロームが混合する。床面に炭化粒・焼土の微量の散布をみる。炉跡はP1とP4の間に設けられ、赤化した火床を認めた。主柱穴はP1~P4であり、北西側柱穴は0.60~0.70m、南東側柱穴は0.40~0.55mと、深さに差が認められる。また、柱材は立腐れと捉えられた。P5は出入口に伴う。覆土は自然堆積であり、1層黒色土、2層暗褐色土、3層黒褐色土と捉えた。

遺物 弥生土器小片が少量出土し、8は床面の出土である。

所見 住居廃絶後、不用材を焼却しているが、消火のための埋戻しは行っておらず、自然消火に任せたような覆土堆積である。また、この焼却行為によって床面が損壊したものと考えられた。弥生時代後期の竪穴住居跡である。

表53 A062遺物観察表

(単位mm)

種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1 弥生 小型甕	49×(92)×100 外面 単節縄文を 胴下端-ヨコナデ 内面 ナデ 接合部下に指頭オサエ 外部底面-ナデ	明黄褐色 普	砂粒	口縁欠	壺か？

2	石器 敲石	(48)×(49)×(28) 重量(100.5)g 下・上端-裏面欠損 敲打痕あり				
3	弥生 甕	-× -× - 折返し口縁 外面 口縁-単節縄文 頸部-ナデ 内面 ナデ	褐色 良	赤色粒少	口縁片	
4	弥生 甕	-× -× - 外面 結節縄文 無節縄文 内面 ナデ	暗褐色 普	砂粒	胴部片	
5	弥生 甕	-× -× - 外面 無節縄文 内面 ナデ	明褐色 良	砂粒	胴部片	
6	弥生 甕	-× -× - 外面 無節縄文 内面 ナデ	明暗褐色 普	砂粒	胴部片	
7	弥生 甕	-× -× - 外面 頸部-ナデ 胴-原体端刺突後に結節縄文 全体は単節縄文 内面 ケズリ後ナデ	明暗褐色 普	暗褐粒	胴部片	
8	土製品 紡錘車	63×63×17 芯孔径5~7 外面-上面・側面に単節縄文 下面-ナデ	明暗褐色 良	砂粒	完形	

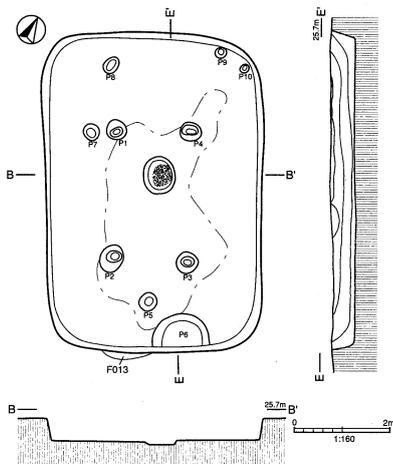


図80 A064

A064

遺 構 短軸に比し主軸が長くなる竪穴住居跡であり、隅丸長方形となっている。ハードロームの地床であり、主柱穴間を中心に硬化面を認める。炉は主柱穴間のやや北壁寄りに設けられ、赤化した火床を認めた。主柱穴はP1~P4で、P2は0.70mとやや深くなるが、他は0.55m前後と平均化している。柱穴上場は大きく開き、掘込んで柱材を引抜いた様子を窺わせる。P5は出入口に伴う。P8~P10は壁柱穴と捉えられた。周溝は検出されなかった。覆土は全体的に黒色味がかり、1・3層黒色土、2層暗褐色土、4・5層黒褐色土と捉えた。4・5層はローム粒を多量に含んでいた。

遺 物 遺物は少ないが、弥生土器小片が主体を占めている。

所 見 長軸と短軸の比率が崩れ、主軸が長大化したような竪穴住居跡である。短軸の幅がないと言うべきかもしれない。また、住居規模に対して主柱穴が住居跡中央に寄って掘込まれた住居跡である。P6は、壁際軟弱部の掘過ぎであったかも知れない。覆土は堆積状態から自然堆積に見えるが、4・5層にロームの包含が多いことから、人為的な埋戻しの可能性も否定できなかった。

表54 A064遺物観察表

(単位mm)

種別 器形	法 量 成形・調整等 の 特 徴	色 調 焼 成	胎 土	遺 存	備 考
1 弥生 甕	-×(88)×35 外面 ケズリ 内面 ナデ 外底面-木葉痕	暗褐色 普	砂粒	底部片 2/3	
2 弥生 甕	-× -× - 折返し口縁 外面 単節縄文、口縁折返し部単節縄文 頸部-3単位の垂下する櫛描文でスリット中3単位の櫛描波状文 内面 ナデ	暗褐色 普	砂粒多 雲母多	口縁片 1/5	
3 弥生 甕	-× -× - 外面 口唇部-縄文の押捺によりキザミ目入り、波状 頸部-輪積痕 内面 ケズリのちナデ	暗黄褐色 普	砂粒	口縁片 1/5	

4	弥生甕	-× -× - 外面 頸部-ナデ 頸部~胴部 結節縄文で区画 胴部-無節縄文 内面 ナデ	明暗褐色 普	砂粒	胴部片	
5	弥生甕	-× -× - 外面 附加条縄文 内面 ヘラナデ	明暗褐色 軟	暗赤粒	胴部 下部 1/4	
6	弥生甕	-× -× - 外面 単節縄文 (撚りは弱い) 内面 ヘラナデ	暗明褐色 硬良	砂粒	胴部片	

A065

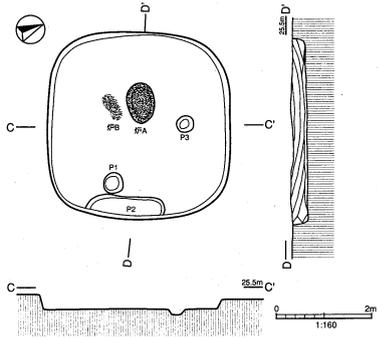


図81 A065

遺構 ソフトロームの地床で、硬化面は認められない。炉跡は2基で、炉Aは浅く床面を掘込み、火床は坑底から立上がりにかけて淡く赤化する。炉Bは床面上に赤化の強い火床のみであった。支柱穴は検出されなかった。P1は出入口に伴うものでP3は床面から0.10mの深さのピットであった。覆土は自然堆積であり、1・2層黒色土、3～5層黒褐色土、6層褐色土、7・8層暗褐色土と捉えた。

遺物 弥生土器の小片が少量出土したのみであった。

所見 略方形の住居跡であり、遺物から弥生時代後期と捉えた。

表55 A065遺物観察表

(単位mm)

種別 器形	法量 成形・調整等の特徴	口径×底径×器高	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1 弥生甕	-×62×(18) 外面 ナデ 撚紋 内面 ナデ 外部底面-木葉痕		明褐色 普	砂粒	底部片	
2 弥生甕	-×(78)×(20) 外面 胴部ほ撚糸文 胴部下端-ナデ 内面 ナデ 外部底面-ケズリ		暗褐色 普	砂粒	底部片 1/2	
3 弥生甕	-× -× - 口縁小波状 外面 ナデ 口縁部と頸部をS字状結節縄文で区画 内面 ナデ を呈す		暗褐色 普	砂粒	口縁片 1/4	
4 弥生甕	-× -× - 外面 単節縄文 内面 ケズリ後ミガキ		暗褐色 良	砂粒	胴部片	
5 弥生甕	-× -× - 外面 附加条縄文 内面 ナデ		明黄褐色 不良	長石類多	胴部片	器面が荒れる
6 弥生甕	-× -× - 外面 無節縄文 内面 ケズリ後ナデ		明暗褐色 良	砂粒	胴部片 1/4	

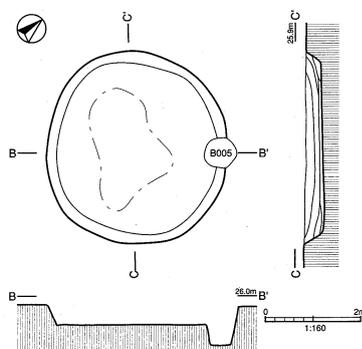


図82 A066

A066

遺構 ハードロームの地床で、住居跡中央は軟弱であり、やや凹んでいる。炉跡、柱穴、周溝は未検出である。覆土は自然堆積であり、色調により1層黒色土、2～4・6層黒褐色土、5層暗褐色土と捉えた。

遺物 弥生土器片が少量出土している。

所見 B005と重複するが、本住居跡が古い遺構であった。炉跡・柱穴が検出されず住居跡というより竪穴状の遺構であるが、覆土や遺物等から住居跡と捉えた。弥生時代後期と捉えた。

表56 A066遺物観察表

(単位mm)

種別器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1 弥生甕	-× -× - 外面 口唇-単節縄文 同一原体縄文を口縁に施す 内面 ナデ	明暗褐色 普	砂粒	口縁片	
2 弥生甕	-× -× - 外面 頸部-ミガキ 胴部-単節縄文 沈線により山形の連続 内面 ミガキ	暗褐色 普	砂粒	頸部~ 胴部	
3 弥生甕	-× -× - 外面 単節縄文 内面 ナデ	暗橙褐色 普	赤褐粒 砂粒	胴部片	

A067

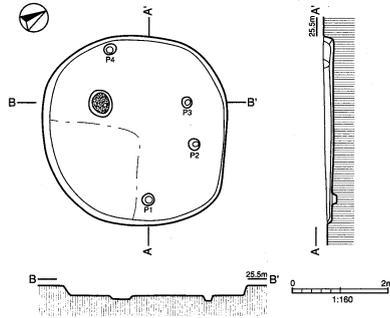


図83 A067

遺構 掘込みは浅くソフトロームの地床で、全体的に踏固められた床であり、部分的に硬化していた。炉は住居跡中央よりやや西コーナーに寄って設けられ、火床は淡く赤化したものである。床に4基のピットを検出したが、支柱穴は捉えられなかった。P1は出入口に伴う。覆土は色調により捉え、1層黒褐色土、2層暗褐色土、3層褐色土の自然堆積である。

遺物 弥生土器の小片を主体とするが、少ない。
所見 出土遺物から弥生時代後期と捉えた。

表57 A067遺物観察表

(単位mm)

種別器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1 弥生甕	-× -× - 外面 頸部-ナデ 頸部から胴部-結節縄文 胴部-無節縄文地文 内面 ナデ	褐色 普	砂粒	頸部片	
2 弥生甕	-× -× - 外面 3単位の櫛描波状文 胴部-単節縄文 内面 ナデ	暗褐色 普	砂粒	胴部片	
3 弥生甕	-× -× - 外面 頸部上端-撚糸文? 頸部中位-ナデ 内面 ナデ	明暗褐色 良	砂粒	胴部片	
4 弥生甕	-× -× - 外面 単節縄文 内面 ナデ	明橙褐色 普	赤色粒多	胴部片	
5 弥生甕	-× -× - 外面 附加条縄文 内面 ナデ	明暗褐色 普	赤色粒子	胴部片	
6 弥生甕	-×(62)×(22) 外面 ナデ 内面 ヘラナデ 外部底面-ナデ	明赤褐色 普	砂粒	底部片 1/2	
7 弥生甕	-×(70)×(26) 外面 ナデ 指頭オサエ 内面 ナデ 外部底面-木葉痕	暗褐色 普	砂粒	底部片 1/2	
8 土製品 紡錘車	長径(54)×-×厚さ(22) 上面・側面に単節縄文 下面 ミガキ	暗褐色 普	長石類	1/2	

第2項 方形周溝墓

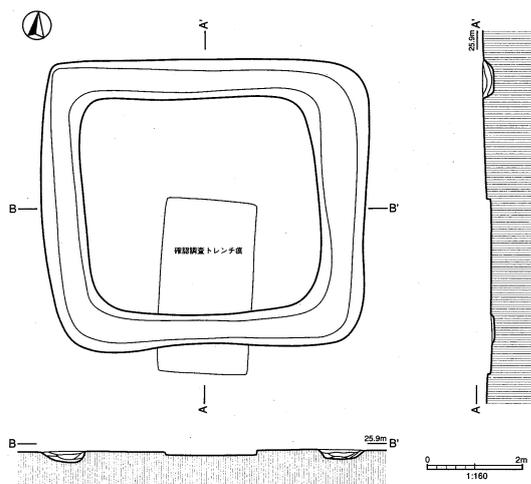


図84 C001

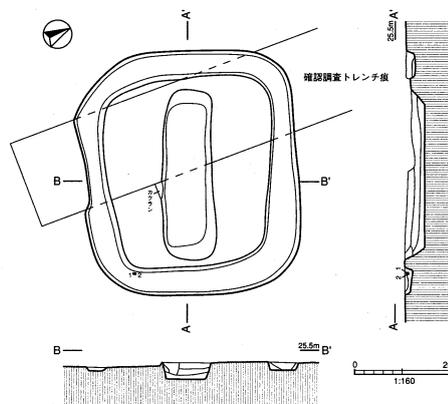


図85 C002

C001

遺 構 周溝は全周する。しかしコーナーの一部が浅くなる傾向がある。壁の立上がりは内側に急であり、外側はややなだらかなものとなっている。覆土は基本的に暗褐色を主体とした自然堆積であるが、一部掘返している。また炭化粒の包含層が認められた。

遺物 掲示できる遺物は出土していない。

所 見 周溝内には主体部となる、土壌は検出されなかった。遺構の形状から弥生時代後期の所産と捉えた。

C002

遺 構 周溝は全周する。溝底は略平坦であり、壁の立上がりは急となっており、垂直に近いものであった。覆土は自然堆積であった。周溝内に長方形の土壌を検出し、覆土は人為的に埋戻され、層にしまりを認めた。

遺 物 弥生土器片が若干出土している。1は溝底より5cm程高い位置から、逆位で出土している。

所 見 北東側の周溝と方位が略一致するため、周溝内に設けられた土壌を主体部と判断した。遺構の形状及び出土遺物から、本遺構を弥生時代後期の所産と捉えた。所謂「南関東系」の土器を主体として出土させる方形周溝墓であった。

表58 C002遺物観察表

(単位mm)

種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1 弥生 甕	—×78×(41) 外面 胴部—無節縄文 胴部下端—ナデ 内面 ナデ 外部底面—ケズリ	明赤褐色 硬	砂粒	底部片	
2 弥生 甕	—× —× — 外面 無節縄文 内面 ナデ	明褐色 良	砂粒	胴部片	

第3項 土坑

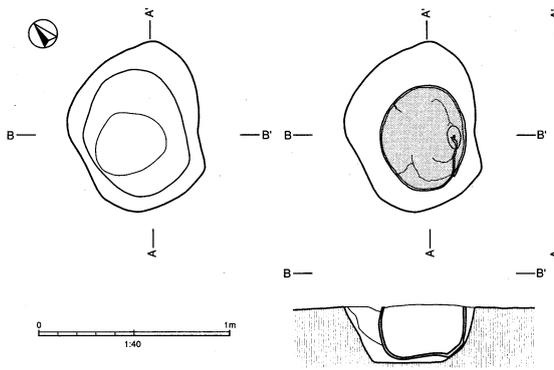


図86 D009

D009

遺構 大型の甕を埋置した土坑である。坑底は略平坦であり、壁はやや内弯して丸みを有するが、その立ち上がりは急であった。覆土は、土器の内外とも黒色味を有していた。

遺物 土器はやや横に倒れた状態で埋置したものと捉えられ、土器の底部は壁に接した状態であった。土器はもろく破片状態で出土していた。土器の割口から、重機による表土除去によって遺構上部を喪失したものと捉えられた。

所見 「土器棺」と捉えた。別の土器を転用した「蓋」が所在した可能性も有るが、出土しなかった。本土器より弥生時代後期の所産と捉えた。

表59 D009遺物観察表

(単位mm)

種別器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1 弥生壺	—×94×(427) 最大径538 胴部中位が大きく膨れる 外面 頸部—沈線区画内に網目状捺糸文 胴上位は沈線による鋸歯文 区画内に網目状捺糸文 胴部—タテヘラミガキ 内面 ヘラケズリ 内外とも器面の剥離が著しく調整の痕跡はわずか	明橙褐色 不良	長石類多 雲母多 砂多	2/3	

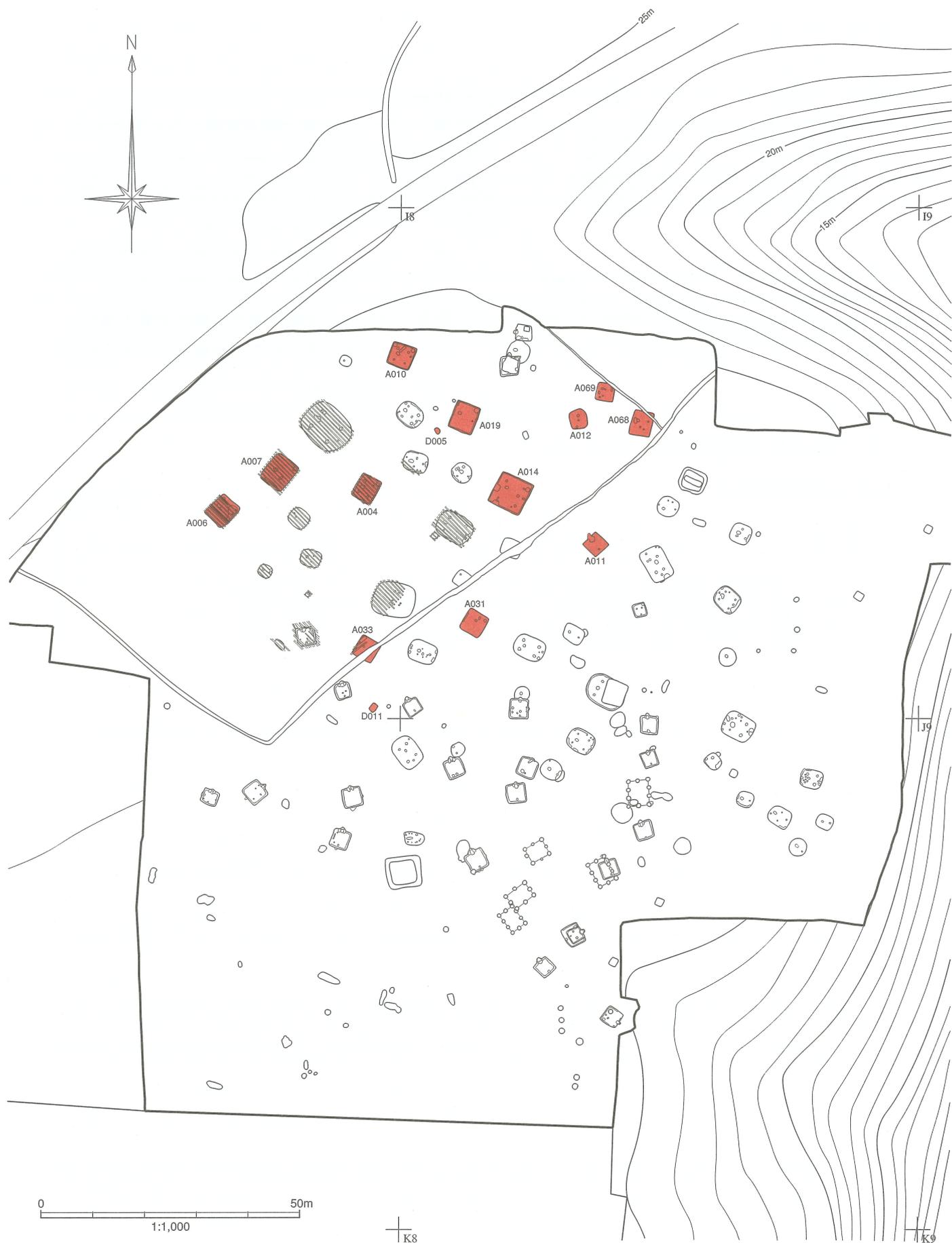


图87 上谷遺跡 I 地区古墳時代遺構配置図

第3節 古墳時代

第1項 竪穴住居跡

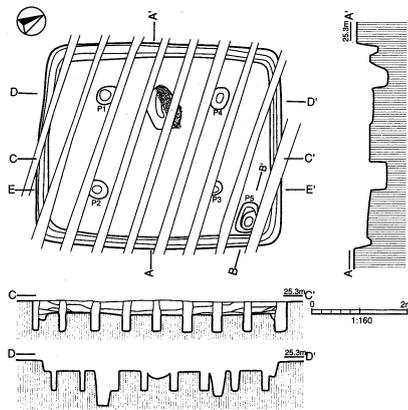


図88 A004

A004

遺構 掘込みは浅くソフトローム主体の床であり、明瞭な硬化面は認められず軟弱であった。主柱穴を4基検出し、東コーナーに貯蔵穴を認めた。周溝は全周する。炉跡の掘込みは極めて浅く、焼土化した火床を認めた。覆土は自然堆積で色調などから6層に分層し、黒褐色土、暗褐色土、褐色土と捉えた。焼土を主体とした層は四壁の下を全周し、三角形の堆積をみた。床面には焼土・炭化粒が疎らに散布する。

遺物 出土は少なく、小片が主体である。

所見 出土遺物より古墳時代前期の住居跡と捉えた。貯蔵穴は、埋戻している可能性があった。

表60 A004遺物観察表

(単位mm)

No.	種別器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 高坏	—×—×(64) 外面 ヘラケズリ後ヘラミガキ 内面 脚端部—ハケ、ナデ	暗赤褐色 普	砂粒・ 赤色粒多	脚部	赤彩
2	土師器 高坏	—×(123)×(125) 脚内面—輪積痕 外面 タテのミガキ 脚端—ハケ後ヘラミガキ 内面 脚端—ハケ後ナデ 上位はナデ上げ、指頭オサエ痕	暗赤褐色 良	砂粒少	脚部 2/3	赤彩
3	土師器 高坏	(168)×—×(34) 外面 稜杉状のヘラミガキ 内面 ヘラミガキ 内面に黒色を呈する部分有り(ス?)	暗赤褐色 良	砂粒	坏部 1/2	赤彩
4	土師器 埴	(96)×—×(42) 外面 ヘラミガキ 内面 口縁—ヘラケズリ後ヘラミガキ 以下ナデ	暗赤褐色 良	砂粒	口縁片	赤彩
5	土師器 埴	(158)×—×(78) 外面 口縁—ナデ ヘラミガキ 内面 ヘラミガキ	暗褐色 良	赤色粒少	口縁片 1/3	
6	土師器 小型甕	(105)×—×(22) 外面 ナデ 内面 口唇—ナデ 胴上部—ヘラケズリ後ナデ	明黄褐色 良	砂粒少	口縁片	
7	土師器 甕	(182)×—×(34) 外面 ハケ後ナデ 内面 ハケ後ナデ	明黄褐色 良	赤色粒少	口縁片	
8	土師器 甕	—×(44)×(81) 外面 ヘラケズリ後ヘラミガキ 内面 ヘラケズリ後ナデ 外底—上げ底状	暗褐色 良	砂粒多	胴部 下半	

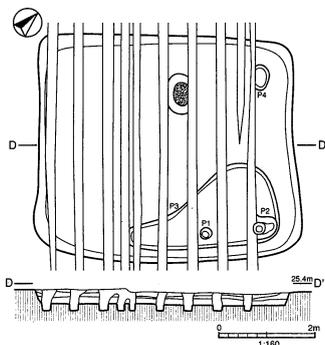


図89 A006

遺構 ソフトローム主体の床で、硬化面は認められない。小ピットを検出したが、柱穴とは判断できなかった。周溝は無く、炉跡は住居跡中央から北西壁寄りに検出した。覆土は暗褐色土・黒褐色土を主体とした自然堆積である。

遺物 出土傾向は捉えられなかった。

所見 出土遺物より古墳時代前期の住居跡と捉えた。南東壁からコーナーの全体的落込みは、掘過ぎであったかもしれない。

表61 A006遺物観察表

(単位mm)

No	種別器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 高坏	152×-×(120) 外面 ヘラケズリ後ヘラミガキ 内面 坏部-ヘラケズリ後ヘラミガキ 脚内-ナデ	暗赤褐色 良	砂粒	略完形	赤彩
2	土師器 罎	-×-×(35) 外面 ヘラミガキ 内面 ヘラミガキ 胴部-ヘラナデ 外底-丸底	暗赤色 良	砂粒少	略完形	赤彩
3	土師器 罎	-×(16)×(10) 外面 ヘラケズリ後ヘラミガキ 内面 ナデ 外底-丸底	明黒色 良	赤色粒少	底部片 1/2	
4	土師器 罎	-×-×(66) 最大径(92) 外面 胴上~中位-ヘラケズリ後ヘラミガキ 下端-指頭オサエ 内面 指頭オサエ	明赤褐色 普	砂粒少	胴部~ 底部	赤彩
5	土師器 小型甕	(116)×(54)×104 輪積 折返し口縁 外面 口縁-ヨコナデ 頸部-ハケ後ナデ 胴部-ヘラケズリ後ナデ 内面 口縁-ヨコナデ 胴上部-粗いハケ以下ヘラナデ	明褐色 良	砂粒	1/2	
6	土師器 甕	(104)×-×(104) 最大径(123) 外面 口縁-ハケ後ナデ 胴部-ヘラケズリ後ナデ 内面 口縁-ハケ後ナデ 胴部-ヘラケズリ後ナデ	明褐黒 良	砂粒少	口縁~ 胴部	
7	土師器 甕	(103)×-×(170) 外面 ナデ 内面 ナデ	明褐 良	砂粒少	口縁片	
8	土師器 甕	(152)×-×(270) 外面 ナデ 内面 ナデ	明黄褐 硬良	赤褐少 密	口縁片	
9	土師器 甕	(192)×-×(230) 外面 粗いハケ 口唇端-ナデ 内面 粗いハケ後ナデ	明黄褐 硬良	密	口縁片	
10	石製品 砥石	長い(470)×幅(340)×厚さ(385)g 左右両側面、表裏ともカジリによる欠損が著しい 下端欠損 5面使用				凝灰

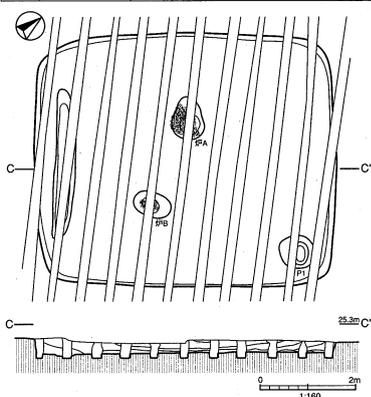


図90 A007

A007

遺構 床面が不明瞭である。覆土は自然堆積であり、色調・包含物により黒褐色土・暗褐色土・褐色土と捉えた。東コーナーにピットを検出したが、柱穴かは判断できなかった。炉は2基の検出をみたが、炉Aが主体となる。南西壁側の周溝も不明瞭であった。

遺物 出土傾向を捉えることはできなかった。出土遺物としては、赤彩土器片の出土がやや目立っている。

所見 耕作痕により損壊を被る以上に、床面は不明瞭であり、硬化面も認められなかった。

表62 A007遺物観察表

(単位mm)

No	種別器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土製品 土玉	直径24~26×幅-×厚さ24 重量14.7g 孔径4 整型-ナデ 焼成前穿孔	明褐色 硬	砂粒	完形	
2	土師器 ミニ チュア	59×33×37 外面 ナデ上げ以下指頭オサエ 内面 ナデ上げ	明黄褐色 良	砂粒多	完形	

3	土師器 甕	—×52×(24) 外面 ナデ 内面 ヘラナデ	明褐色 良	砂粒少	底部	
4	土師器 高坏	(179)×—×(59) 外面 ヘラミガキ 内面 ヘラミガキ	暗赤褐色 良	砂粒密	坏部	赤彩
5	土師器 高坏	(166)×—×(56) 外面 ヘラミガキ 内面 ヘラミガキ	暗赤色 硬良	密	坏部	赤彩
6	土師器 高坏	156×128×130 外面 ヘラミガキ 坏部—丸みを持つ 脚端部—折り返す 内面 坏部—ヘラミガキ 脚部—ナデ上げ、ナデ	暗赤褐色 良	砂粒少	略完形	
7	土師器 高坏	—×(126)×(120) 外面 ヘラミガキ 内面 脚端—ハケ後ナデ 脚—ナデ上げ	暗褐色 硬良	砂粒	脚部	赤彩
8	土師器 甕	(173)×—×(156) 外面 ヘラケズリ後ヘラミガキ 内面 ヘラケズリ後ナデ	暗赤褐色 良	砂粒少	口縁～ 胴上半	
9	土師器 甕	(170)×—×(207) 外面 ヘラケズリ後ヘラミガキ 内面 口縁—ナデ 胴—ケズリ後ナデ	暗褐色 良	砂粒多	口縁～ 胴部	
10	土師器 甕	(189)×—×(211) 外面 口縁—ハケ後ナデ 胴—ハケ、ケズリ後ナデ 内面 口縁—ハケ後ナデ 胴—ケズリ後ナデ	明褐色 良	砂粒・ 赤色粒少	口縁～ 胴部	
11	土師器 甕	—×58×(233) 最大径241 外面 ヘラケズリ後ヘラミガキ 内面 ヘラケズリ後ヘラミガキ、ナデ 外底—ヘラケズリ	暗赤褐色 良	砂粒	頸部以 下	口縁欠損

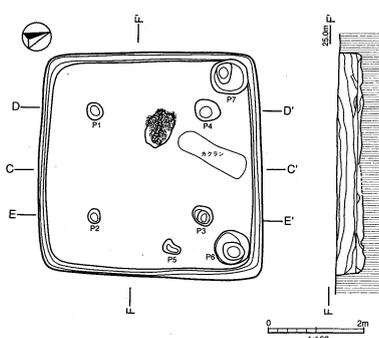


図91 A010

A101

遺構 略方形の住居跡であり、床は凹凸を有しやや軟弱であった。支柱穴を4基、出入口に伴うピットも検出した。P7・P8は貯蔵穴か。周溝は全周する。炉はP1・P4の中間のやや内側に検出し、火床の赤化は強く、一部は炉跡の坑底から床面にわたっていた。覆土は色調・包含物をもとに分層し、自然堆積と捉えた。

遺物 遺物の出土傾向は捉えられなかった。

所見 形状は整然とし、規格化した竪穴住居跡である。P6・P7は柱穴か貯蔵穴か捉えられなかった。

表63 A010遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 高坏	—×(139)×(24) 外面 ハケ後ミガキ 内面 ハケ後ミガキ	明褐色 良	赤色粒	脚部片 1/4	
2	土師器 埴	—×22×(16) 外面 ハケ 内面 ナデ	明褐色 良	赤色粒	底部	
3	土師器 甕	—×40×(33) 外面 ハケ後ナデ 内面 ヘラナデ	明黄褐色 良	砂粒	胴下半 ～底部	
4	土師器 甕	(194)×—×(103) 外面 口縁—ハケ後ナデ 胴—ケズリ後ナデ 内面 口縁—ケズリ後ナデ 胴—ケズリ後ナデ 指頭オサエ	明赤褐色 良	砂粒多	口縁～ 胴上部 1/3	

5	土師器 甕	—×83.5×(144) 外面 ケズリ後ヘラナデ 外底面に木葉痕 内面 ケズリ後ナデ	明黄褐色 良	砂粒	胴～ 底部 1/2	
6	土師器 甕	—×—×1106 最大径133 外面 頸部—タテハケ 胴—ナナメハケ 内面 頸部下部—指頭オサエ以下ナデ	明褐色 良	砂粒多	胴 1/2	
7	土師器 壺	177×—×(77) 外面 口縁部—ナデ 頸部—タテミガキ 胴部—丁寧なミガキ 口縁— 折り返し 内面 口縁—ハケ後ナデ以下ハケ 頸部—短く開く	赤黄褐色 良	砂粒 密	口縁	赤彩
8	石器 不明	長さ131×幅105×厚さ71 非常にもろく、砂状に碎ける				砂岩
9	石器 砥石	長さ(60)×幅(47)×厚さ(38) 重量134.3g 断面形は6面体で、使用面6面 上・下端欠損				凝灰岩
10	土製品 土玉	直径24×幅—×(24) 孔径(60) 重量(10.8)g 整形 ナデ(粗い) 焼成前穿孔	明褐～ 黒褐色 硬	赤色粒	2/3	
11	土製品 土玉	直径(24)×幅—×23 孔径60 重量(8.30)g 整形 ナデ 焼成前穿孔	明褐色 普	砂粒多	2/3	
12	土製品 土玉	直径20～22×幅—×厚さ(22) 孔径60 重量9.20g 整形 ナデ 焼成前穿孔	淡褐色 硬	砂粒	略完形	
13	土製品 土玉	直径23～22×幅—×厚さ(24) 重量13.9g 整形 ナデ 焼成前穿孔	明褐色 硬	砂粒	略完形	

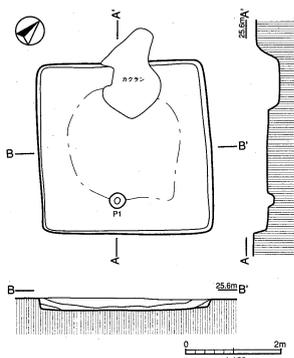


図92 A011

A011

遺 構 ロームと黒色土の混合した貼床であり、住居跡中央に硬化面を認める。柱穴・炉・周溝は検出されなかった。P1は出入口に伴うものと捉えた。覆土は自然堆積であるが、各層ともロームを多含する。1・2層は層のしまりは強く、1層褐色土、2層黒褐色土、3層暗褐色土と捉えた。

遺 物 土師器小片と縄文土器小片が少量出土する。

所 見 北西壁中央から大きく攪乱が入り、炉跡はこれによって失われた可能性もある。また、覆土を整然とした堆積状態から自然堆積と捉えたが、ローム粒の包含が多いことから、人為堆積の可能性もある。遺物から古墳時代前期と捉えた。

表64 A011遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 壺	(150)×—×(166) 最大径119広口 口縁—やや内湾 胴下半で屈曲 外面 ヘラミガキ 内面 口縁—ミガキ 胴—ナデ	明赤褐色 不良	砂粒	1/4	赤彩
2	土師器 甕	(230)×—×(70) 外面 ハケ 内面 ハケ後ナデ	明褐色 普	砂粒少	1/4	
3	土師器 台付甕	—×(142)×(69) 外面 タテのハケ 脚部下端—ヨコナデ 内面 ナデ	明黄褐色 良	砂粒・ 赤色粒少	脚部	二次焼成を被る

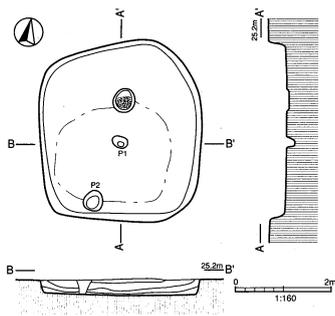


図93 A012

A012

遺 構 ハードロームの地床で、炉跡から出入口にかけて踏固められた床ではあるが、硬化面とは認められなかった。P2は床から0.15mと浅く、柱穴か判然としない。P1は出入口に伴うと捉えた。周溝は検出されず、炉跡は住居跡中央からやや北壁寄りに検出され、赤化した火床を認めた。覆土は自然堆積であり、色調を基本として1・2・6層黒褐色土、4・5層暗褐色土と捉えた。

遺 物 土師器小片が少量出土するのみである。

所 見 平面形が歪んだ台形状となり、上谷遺跡の当該時期の住居跡とは異なる形状を示している。

表65 A012遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 ミニチュア土器	一×34×(28) 最大径42 輪積 外面 指頭オサエ以下ナデ 内面 ナデ	暗褐色 普	砂粒	略完形	
2	土師器 ミニチュア土器	41×41×39 外面 指頭オサエ 内面 ナデ 外底-ナデ	褐色 良	砂粒	完形	

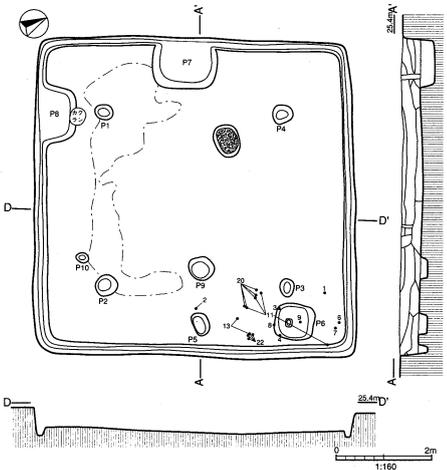


図94 A014

A014

遺 構 住居跡中央はハードロームの地床であり、壁際はロームと暗褐色土が混合した貼床である。四壁の壁際の床下は方形周溝状に掘方を検出した。住居跡中央はやや凹み、床面の損壊によってやや軟弱化している。住居跡南西に帯状に硬化面を認めた。支柱穴はP1~P4で柱材は立腐れの可能性があった。P5は出入口に伴うものと捉えた。P7は貯蔵穴である。P8・9は用途不明である。周溝は全周する。覆土は壁際から住居跡中にかけての床面に焼土の堆積と炭化粒を包含した8・9層は不用材の焼却に伴う人為堆積であるが、他は自然堆積である。1~4・7層黒褐色土、5層褐色土、8・9層褐色土と捉えた。

遺 物 土師器小片を主として、他の住居跡に比してやや多く出土している。東コーナー付近の出土が多い傾向がある。図示はできなかったが鉄器も出土している。

所 見 P8・9は用途不明のピットなるが、貼床の軟弱部分の掘過ぎであったかも知れない。また、P6は出入口かも知れない。住居廃絶後に不用材の焼却を行った遺構である。

表66 A014遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 鉢?	55×32×43 成形-マキアゲ 外面 弱いナデ 内面 ナデ	明黄褐色 良	砂粒少	完形	ミニチュア土器
2	土師器 罎	一×20×(30) 最大径56 外面 ヘラミガキ 内面 ナデ	明褐色 良	砂粒多	胴部	罎としても小型

3	土師器 高坏	—×—×(16) 最大径(100) 外面 ヘラミガキ 内面 ヘラミガキ	明赤褐色 普	砂粒多	1/2	赤彩
4	土師器 高坏	—×—×(63) 外面 ヘラケズリ後ヘラミガキ 内面 坏内面-ヘラミガキ 脚部-ナデ	明褐色 普	砂粒・ 赤褐少	略完形	赤彩
5	土師器 高坏	—×—×(67) 外面 ヘラミガキ 内面 坏部-ヘラミガキ 脚部-ヘラケズリ	明褐色	砂粒少	略完形	
6	土師器 小型甕	—×48×(35) 微かに接合痕を外面に残す 外面 ナデ 指頭オサエ 内面 ヘラナデ	明褐色 良	砂粒	胴下半 ~底部 2/3	
7	土師器 小型甕	—×60×(47) 外面 ナデ 指頭オサエ 内面 ヘラナデ	明褐色 良	赤色粒少	略完形	輪積痕顕著
8	土師器 甕	—×63×(38) 最大径(86) 外面 ナデ 接合痕残す 外底面-外周無調整 内面 ヘラナデ 内底面-ナデ	明褐色 普	砂粒少	略完形	
9	土師器 小型甕	128×—×(50) 外面 口縁-ハケ後ヘラミガキ 胴-ヘラケズリ後ヘラミガキ 内面 ヘラケズリ後ヘラミガキ 胴-ナデ 口縁-小型広口壺か?	明赤褐色 良	砂粒多	2/3	赤彩
10	土師器 壺	102×61×(109) 最大径109 外面 口縁-ナデ 頸部-ハケ後ナデ 胴部-ヘラケズリ 折り返し 縁 内面 ハケ後ナデ 内底面-ヘラオサエ 底部-上げ底	明橙褐色	砂粒少	2/3	
11	土師器 甕	212×42×77 外面 口唇-折り返し、指頭オサエ 胴部-ヘラケズリ (二次焼成により状態悪い) 内面 口唇-指頭オサエ以下ヘラケズリ 底部-焼成前穿孔	暗橙黄色 普	砂粒	完形	二次焼成により 器面が荒れる
12	土師器 甕	(208)×—×(64) 外面 口縁-ヨコナデ 頸部-タテナデ以下ヘラケズリ後ヘラミガキ 内面 口縁-ヘラケズリ後ヘラミガキ 胴部-ヘラケズリ後ヘラミガキ	明褐色 良	砂粒少	口縁~ 胴部	
13	土師器 甕	(234)×—×(264) 外面 口縁部-ヨコナデ 胴部-タテヘラケズリ後下半ナメヘラケズ リ 内面 ナデ	暗褐色 良	雲母微 長石類・ 白色粒少	口縁部 ~胴部 1/2	
14	石器 砥石	長さ(38)×幅26×厚さ(28) 重量24.3g 断面形-5面体 使用面-上端面あわせて6面 下端欠損 擦痕有り			断片	凝灰岩
15	土製品 管状 土製品?	(74)×(16)×厚さ8 内外面 丁寧なヘラミガキ	赤褐色 普	赤色粒少	1/2以下	舟形土製品? (土師器?)

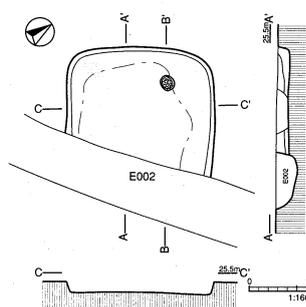


図95 A017

A017

遺 構 ソフトロームの地床で、住居跡中央は踏固められるが、硬化面とは認められなかった。柱穴、周溝は検出されず、北コーナー寄りに床面が火床化したものを検出した。覆土は自然堆積であり、1層黒褐色土、2層暗褐色土と捉えた。

遺 物 1は床面に横倒してつぶれた状態で出土する。土器の上に粘土ブロックが載っていた。

所 見 1の遺物と上に載る粘土ブロックから竈を想定し、E002によって失われたと捉えた。古墳時代後期の所産である。

表67 A017遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 甕	169×550×240 最大径247 外面 口縁-ヘラケズリ後ヨコナデ 胴-ケズリ後ナデ 内面 口唇直 下-ヘラケズリ後ナデ以下ヘラケズリ 胴-ナデ 外底-ナデ	暗褐色 普	砂粒少	完形	
2	土師器 甕	-×(620)×(540) 最大径(202) 外面 ヘラケズリ後弱いヘラミガキ 内面 ヘラミガキ	暗赤褐色 普	砂粒少	胴部~ 底部 1/2	
3	土師器 甕	-×-×(500) 外面 ヘラミガキ 内面 口縁-ヘラミガキ 胴上部-ヘラケズリ後ナデ 指頭オサエ痕	明赤色 硬	砂粒少 密	頸部 1/4	赤彩

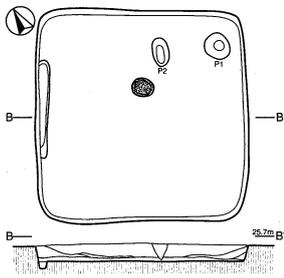


図96 A019

A019

遺構 ソフトロームの地床で、全体として軟弱な床である。柱穴は検出されず、P2は出入口に伴うと捉えた。P1は貯蔵穴であり、P3・P4は用途不明である。P4には厚さ0.05mの粘土が堆積していた。周溝は全周する。炉跡は住居跡中央より西壁寄りに検出され、坑底から壁が淡く赤化した火床を認めた。床面には0.10~0.15m程の厚さの焼土堆積地点が散在していた。炭化粒は若干含むが材は見られなかった。覆土は不用材の焼却後自然堆積であり、1・2層黒色土、3・5・7層黒褐色土、4層暗褐色土、6・8層褐色土である。

遺物 他の住居跡に比べ土師器片の出土はやや多く、また、大型破片が散在して出土する。
所見 平面規模に対して掘込みの浅い堅穴住居跡である。出土遺物から古墳時代中期の所産と捉えた。

表68 A019遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 ミニチュア土器	(68)×52×(44) 手捏 外面 指頭オサエ 内面 ヘラナデ 外部底面-無調整	暗褐色 普	砂粒少	略完形	
2	土師器 鉢ミニチュア	90×26×38 外面 口唇-ヘラケズリ後ナデ 体部-ケズリ 内面 ヘラナデ 外底-ヘラケズリ	明黄褐色 普	砂粒	完形	
3	土師器 ミニチュア	-×41×(40) 外面 ナデ 指頭オサエ 内面 ヘラナデ	暗褐色 良	砂粒少	略完形	
4	土師器 甕	58×30×59 最大径62 輪積 外面 口唇-指頭オサエ以下ナデ後ケズリ、ナデ 内面 ナデ以下ヘラナデ	明褐色 良	砂粒	完形	ミニチュア土器
5	土師器 甕	(60)×20×55 外面 ハケ後ナデ 内面 ハケ以下ナデ 外部底面-無調整	明褐色 普	砂粒	2/3	ミニチュア土器
6	土師器 甕	68×35×65 外面 口縁-指頭オサエ後ナデ 胴部-ハケ後ナデ? 内面 ナデ 外部底面-上げ底状	明褐色 良	砂粒多	完形	ミニチュア土器
7	土師器 甕	81×34×60 外面 口縁-指頭オサエ後ナデ 胴部-ハケ後ナデ 内面 口縁-ハケ後ナデ 胴部-ナデ 外部底面-上げ底状	明黄褐色 良	砂粒多	完形	ミニチュア土器
8	土師器 甕	82×34×82 外面 口縁-ハケ後ナデ 胴部-ナデ 内面 ナデ 外部底面-上げ底状	暗黄褐色 良	砂粒多	完形	ミニチュア土器

9	土師器 埴	ー×34×(8.80) 最大径(82) 外面 口縁-タテヘラミガキ 胴部-ケズリ後ヘラミガキ 内面 ナデ	暗褐色 良	砂粒少	略完形	ミニチュア土器
10	土師器 埴	ー×36×(22) 外面 ケズリ後ナデ 内面 ケズリ後ナデ	明褐色 良	砂粒少	底部片	
11	土師器 高坏	157×120×185 外面 ハケ後ヘラミガキ 内面 坏内面-ハケ後ヘラミガキ 脚内-ハケ後ナデ	暗赤褐色 良	砂粒少	2/3	赤彩
12	土師器 高坏	ー×ー×(86) 外面 ヘラミガキ 内面 脚内-ヘラケズリ 端部-ハケ後ナデ	明赤褐色 良	赤色粒少	脚部	赤彩
13	土師器 壺	ー×ー×(35) 最大径(156) 外面 口縁-二重口縁 ヘラミガキ 内面 ケズリ後ヘラミガキ	暗赤色 良	砂粒少	口縁片	赤彩
14	土師器 壺	ー×ー×(71) 外面 口縁-二重口縁 ケズリ後ヘラミガキ 内面 頸部-ヘラミガキ 頸部接合部 指頭オサエ、ヘラミガキ	暗赤色 良	砂粒少	頸部~ 胴上部 片	赤彩
15	土師器 小型壺 か埴	ー×ー×(77) 外面 頸部接合部-タテのハケ後ヘラミガキ 胴部-ケズリ後ヘラミガキ 内面 ナデ	暗褐色 良	砂粒	胴部 1/2	
16	土師器 小型壺	ー×38×(20) 外面 細かいハケ 内面 外面より粗いハケ、ヘラオサエ	明黄色 良	赤色粒少	底部片	
17	土師器 甕	189×ー×(159) 外面 口縁-ヨコナデ以下ヘラケズリ後タテのミガキ 内面 口縁-ヨコナデ以下ハケ後ナデ 胴-ナデ	明褐色 良	赤色粒少	口縁~ 胴上半 1/2	全体にゆがみが 大きい
18	土師器 甕	(163)×ー×(115) 折返し口縁 外面 口縁-ヨコのハケ 胴部-タテのハケ 内面 口縁-ハケ後ナデ 胴部-ナデ	明褐色 良	砂粒	口縁~ 胴部 1/2	

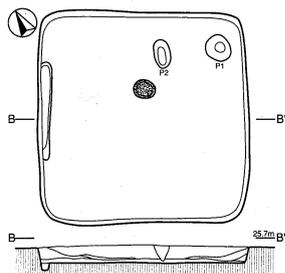


図97 A031

A031

遺 構 住居跡中央はソフトロームの地床であるが、壁際はロームを掘込み褐色土とロームが混合した貼床となる。全体的に軟弱である。柱穴は検出されず、P1は貯蔵穴、P2は用途不明である。周溝は北西壁中央のみ検出した。炉跡は住居跡中央より北東壁寄りに検出し、赤化した火床を認めた。覆土は自然堆積であり、1・2・5層黒褐色土、3・4層暗褐色土、6・7層褐色土と捉えた。

遺 物 土師器小片が少量出土するが、北コーナー付近にやや多い出土傾向が窺えた。5は焼成後丁寧に底部を穿孔したものである。

所 見 1層の層厚から人為堆積とも窺えるが、調査時には自然堆積と捉えている。

表69 A031遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 高坏	(172)×ー×(36) 外面 口縁-ナデ 坏部-ミガキ 内面 ミガキ	明赤褐色 良	砂粒	口縁 1/2	器面荒れる 赤彩
2	土師器 高坏	ー×ー×(43) 外面 ミガキ 内面 ミガキ	暗赤褐色 良	砂粒	坏部 1/4	赤彩
3	土師器 高坏	211×169×140 外面 口唇直下-ナデ以下ナデ 内面 坏部-ミガキ 脚-ハケ 上位は指頭オサエ、ナデ	暗赤褐色 良	砂粒	完形	赤彩

4	土師器 埴	160×35×77 外面 口縁-ハケ後ミガキ以下ミガキ 内面 口縁-ハケ後ミガキ以下ミガキ	暗赤褐色 良	砂粒	2/3	赤彩
5	土師器 埴	138×37×181 外面 口縁-ケズリ後ミガキ 胴-ハケ、ケズリ後ミガキ 内面 口縁-ハケ後ナデ 胴部-ナデ ただし接合痕は指頭オサエ	暗褐色 普	砂粒	完形	底部 焼成後穿孔有り
6	土師器 埴	-×21×(33) 外面 頸-ハケ後ナデ 胴-ケズリ後ナデ 内面 ナデ	明赤色 普	砂粒	略完形	ミニチュア土器
7	土師器 埴	-×38×(32) 外面 ミガキ 内面 ミガキ	暗赤褐色 普	砂粒	1/4	赤彩 器面破落顕著 ミニチュア土器
8	土師器 小型甕	-×-×(48) 外面 ケズリ後ナデ 接合部は指頭オサエ 内面 ケズリ後ナデ	明赤色 普	砂粒	1/4	
9	土師器 甕	(64)×(30)×(90) 外面 口縁-ナデ 胴部-ケズリ後ナデ 内面 口縁-指頭オサエ、ナデ 胴-ケズリ後ナデ	暗褐色 普	砂粒多	口縁~ 胴下半 1/4	ミニチュア土器

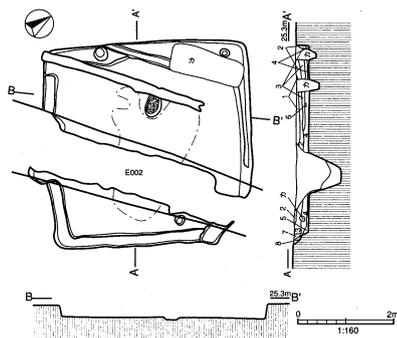


図98 A033

A033

遺 構 2軒以上の重複か、単独の住居跡か判断に迷う住居跡である。住居跡中央に硬化面を認めるが、方形周溝状に軟弱な面がある。炉跡は住居跡中央より北西壁寄りに検出し、赤化した火床を認めた。覆土は色調・包含物により分層した。

遺 物 赤彩された土器の出土が目立つ。

所 見 覆土は2軒の重複を示している。調査では重複した住居跡なのか判然としなかった。住居跡中央の一段低い床面と、壁下を巡る一段高いテラス状の床面が認められたが、中央の一段

低い床面が平坦であることから住居跡の掘り方とは捉えられず、判然としない遺構である。

表70 A033遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 器台?	-×(123)×(31) 外面 ケズリ後ミガキ 内面 ナデ	明赤褐色 良	赤色粒	脚部 1/2	赤彩
2	土師器 高坏	-×121×100 外面 ケズリ後丁寧なミガキ 内面 ケズリ+ナデ ミガキ	赤褐色 普	砂粒	脚部	赤彩
3	土師器 埴	124×30×67 外面 ミガキ 内面 ミガキ 胴部-ケズリ後ミガキ 丸底	暗赤褐色 良	砂粒少	完形	赤彩 赤褐色粒子混入
4	土師器 甕	-×-×(40) 二重口縁 外面 ハケ後ミガキ 内面 頸-ハケ後ミガキ 胴-ナデ、指頭オサエ	暗褐色 普	砂粒	頸部	赤彩
5	土師器 甕	(234)×-×43 二重口縁 外面 口唇-ナデ ハケ後ミガキ 内面 粗いハケ後ミガキ	赤褐色 普	砂粒	口縁片	赤彩
6	土師器 甕	(174)×-×(137) 外面 ハケ(口縁-ハケ後ナデ) 内面 ハケ後ナデ	明黄色 良	砂粒・ 雲母多	口縁~ 胴上部	

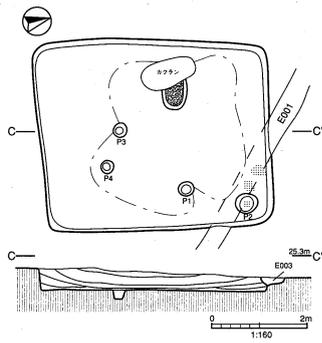


図99 A068

A068

遺構 ハードロームを掘込んだ貼床であり、住居跡中央に硬化面を認める。P1は出入口に伴い、P2は貯蔵穴である。P3・P4は柱穴であるか判然としない。周溝は検出されなかった。覆土は自然堆積であり、1・2層黒色土、3～6層暗褐色土と捉えた。6層上部で火の使用が認められた。P2の覆土下層及び隣接する床から0.05m程高く粘土ブロックが出土した。

遺物 土師器片が少量出土している。

所見 P2は粘土貯蔵穴であろうか。自然堆積による埋没過程において火の使用が行われているが、炭化粒・材が特に認められなかったことから、焼土の人為的な廃棄と混合が行われたと捉えた。

表71 A068遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 高坏	(160)×-×(56) 外体部-ハケ後ミガキ 内体部-ハケ後ミガキ	赤褐色 良	砂粒	脚欠損 1/4	内外赤彩
2	土師器 高坏	-×-×(61) 外脚部-ナデ 内脚部-ナデ 巻上げ痕が内面に残る	暗褐色 良	砂粒多	脚部片 1/4	
3	土師器 甕	105×41×83 外面 ハケ、ケズリ後ナデ 胴部-ケズリ後ナデ 内面 ケズリ後ナデ 底部-ケズリ(上げ底状)	暗褐色 良	赤色粒	略完形	
4	土師器 小型壺	-×61×(29) 外面 ナデ 指頭オサエ 内面 ナデ 内底面-ヘラオサエ	明褐色 良	砂粒 雲母	底部片	
5	土師器 甕	(175)×-×(213) 最大径218 外面 ケズリ後ミガキ 内面 ケズリ後ミガキ 口唇端の面取り明でない 胴部・口唇部のユガミ大きい	暗褐色 良	赤色粒	1/2	
6	石器 軽石	長さ92×幅47×厚さ46 重量39.1g 完形で中央部に線状のキザミ痕				砥石として 使用か?
7	石器 軽石	長さ64×幅45×厚さ32 重量(32.3g) 左側面カジリ欠損が見られる				砥石として 使用か?

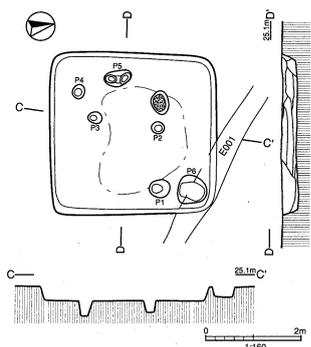


図100 A069

A069

遺構 ハードロームの地床で、住居跡中央に硬化面を認める。ピットを6基検出したが、P2～P5は床から深さが0.25～0.30mであり、柱穴配置状からも柱穴かは判然としない。また、P6は0.15mと浅いが貯蔵穴と捉えた。炉跡は住居跡中央からやや北西コーナーに寄って検出され、淡く赤化した火床を認めた。図示できなかったが、西壁際に床から0.15m高く炭化粒を包含した焼土(6層)を検出した。覆土は住居廃絶時に焼却を行った層(5～7層)と、その後の自然堆積(1～4層)に大きく分けられ、1・3層黒色土、2・5・6層黒褐色土、4・7層褐色土と捉えた。

遺物 土師器片が少量出土している。

所見 E001により遺構の一部を失うが、床面には達していなかった。P1は出入口に伴うものか判然としなかった。古墳時代前期の所産と捉える。

表72 A069遺物観察表

(単位mm)

No	種別器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 高坏	157×-×(44) 外面 体部口縁-ナデ以下ケズリ後ミガキ 内面 内体部-ハケ後ナデ以下ケズリ後ミガキ	暗赤褐色 良	砂粒	坏部 完形	赤彩
2	土師器 器台	114×-×(75) 輪積(脚内面に輪積痕) 外面 ミガキ 内面 ケズリ後ミガキ 脚-ナデ 指頭オサエ	明褐色 良	砂粒多	脚大半 欠損 2/3	赤彩
3	土師器 壺	130×-×(136) 外面 口唇-ナデ以下頸部ハケ 胴部-ケズリ後ミガキ 内面 口縁~頸部-ハケ後ナデ 胴-ヘラナデ 折り返し口縁	明褐色 良	砂粒 赤色粒	口縁~ 胴上半	
4	土師器 甕	163×-×(169) 外面 口縁-ハケ後ナデ 胴-ナデ 内面 口縁~頸部-細かいハケ以下粗いハケ	明赤褐色 良	砂粒	口縁~ 胴中位	
5	土師器 甕	156×(223)×(69) 頸部に輪積痕有 外面 口唇-ヨコナデ 口縁~頸部及び胴部下半-タテハケメ 胴上半~最下半-ナメハケメ 底部付近-ヨコハケメ 内面 口縁~頸部-ヨコナデ 頸部~底部付近-ヘラ調整	明赤褐色 良	砂粒	1/2	
6	土師器 甕	-×-×(17) 最大径(284) 外面 ハケ 下半部-ナデ 内面 ナデ 接合部に指頭オサエ	明褐色 良	赤色粒	胴中位 ~下位	

第2項 土坑

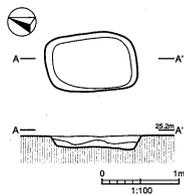


図101 D006

D006

遺構 ソフトローンを掘込み、若干凹凸のある坑底である。壁は斜めに立上がっている。覆土は黒褐色土の自然堆積であり、包含するローンの多寡により2層に分層した。

遺物 土師器片が少量出土している。

所見 出土遺物から古墳時代前期と捉えた。覆土の堆積状況から人為堆積の可能性も検討したが、自然堆積であると調査時の判断を優先した。

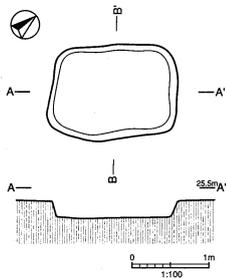


図102 D011

D011

遺構 ソフトローン掘込んだ、平坦な坑底の土坑である。壁は坑底から急に立上がっている。覆土は自然堆積であり、1層暗暗褐色土、2層褐色土と捉えた。いずれも焼土は認められなかった。

遺物 土師器甕の底部が出土した。

所見 遺構確認面ではプランは明瞭であり、その平面形から調査当初は近世以降の炭(焼)窯とも思える遺構であった。土師器甕の出土により、古墳時代の所産と捉えた。

表73 D011遺物観察表

(単位mm)

No	種別器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 甕	-×(65)×(26) 外面 ケズリ後ナデ 外部底面-ケズリ後ナデ 内面 ナデ	暗赤色 普	砂粒	底部 1/2	



图103 上谷遺跡Ⅰ地区奈良・平安時代時代遺構配置図

第4節 奈良・平安時代

第1項 竪穴住居跡

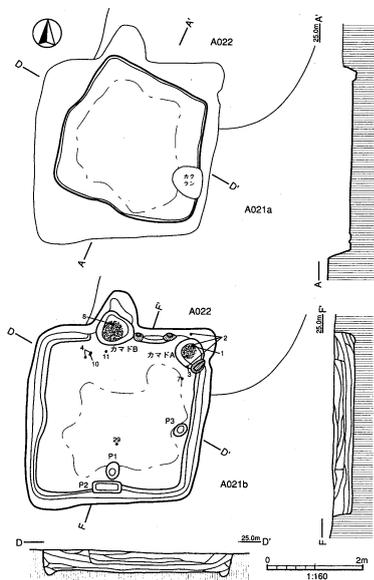


図104 A021a.b

A021a

遺構 A021bの覆土上層に営まれた竪穴住居跡である。規模もA021b内のため、壁の立上がりの把握は難しく、平面図は不整形となるが、本来は隅丸方形であろう。床はロームが混じる黒褐色土主体の貼床であり、住居跡中央の硬化は極めて良好であった。竈・柱穴等は検出できなかった。しかし北西壁中央から大型の土師器片が集中的に出土しており、粘土粒や焼土も少量認められた。覆土は自然堆積であり、1・2層は暗褐色土、3～7層は黒褐色土である。8層はロームを多含する褐色土で、床として充填した層である。

遺物 北西壁中央から、土師器片が集中的に出土する。
所見 北壁中央付近の遺物の集中と粘土粒・焼土の検出から、竈位置を想定できるものである。

A021b

遺構 ハードロームに暗褐色土が混合した貼床である。住居跡中央に極めて良好な硬化面を認める。ピットは3基検出されたが、柱穴とは捉えられなかった。P1は出入口に伴うもの。周溝は、それぞれの竈袖下まで巡っている。竈は2基検出した。KAはコーナーに設けられ、粘土と黒褐色土が混合した袖である。KBは右袖のみの遺存である。覆土は自然堆積であり、10・14・16・19層は褐色土、11・17・18層は黒褐色土、12・13・15層は暗褐色土であった。

所見 P3も出入口に伴うかも知れない。竈の新旧については捉えられなかった。調査では同時存在も想定されたが、竈袖の遺存状態からKB→KAと捉えた。何れにしても竈袖下までの周溝であり、当初から2基の竈を想定した住居跡かも知れない。A021a.bの新旧関係は覆土から明らかのように、A021b→A021aである。また、弥生時代後期のA022とも重複する。

表74 A021a遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 坏	132×74×442 ロクロ成形 外面 体部下端一回転ヘラケズリ 内面 密なヘラミガキ	橙褐色 良	雲母少 長石類微	1/2	線刻「有」 外体正位
2	土師器 坏	(134)×74×33 ロクロ成形 外面 体部下端一静止ヘラケズリ 底部一回転糸切り→底縁・回転ヘラケズリ	橙色 良	雲母少	1/2	
3	土師器 坏	—×66×(13) ロクロ成形 外面 体部下端一回転ヘラケズリ 内面 密なヘラミガキ	褐色 良	雲母微	底部	ヘラ書「×」 外底
4	土師器 甕	—×106×(47) 外面 斜～横位ヘラケズリ 内面 ヘラナデ、ナデ	橙色 良	雲母 白色粒微	底部	

表75 A021b遺物観察表

(単位mm)

No	種別器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	須恵器 坏	120×64×42 ロクロ成形 外面 体部下端-回転ヘラケズリ 底部-回転ヘラ切り→底縁・回転ヘラケズリ	灰褐色 良	長石類少	略完形	
2	須恵器 坏	(137)×70×42 ロクロ成形 外面 体部下端-手持ちヘラケズリ 底部-切離し不明→底縁・静止ヘラケズリ	灰色 良	雲母 長石類	1/5	
3	土師器 坏	124×70×39 ロクロ成形 外面 体部下端-回転ヘラケズリ 底部-切離し不明→底縁・静止ヘラケズリ	橙色 良	雲母少	完形	
4	土師器 坏	(126)×(66)×36 ロクロ成形 外面 体部下端-回転ヘラケズリ 底部-回転糸切り→底縁・回転ヘラケズリ	黒～ 暗褐色 良	雲母中 長石類微	1/3	
5	土師器 坏	122×66×41 ロクロ成形 外面 体部下端-回転ヘラケズリ 底部-離し不明→底縁・回転ヘラケズリ	橙褐色 良	雲母少 長石類微	1/2	
6	土師器 坏	(129)×65×35 ロクロ成形 外面 体部下端-回転ヘラケズリ 底部-回転糸切り痕のみ	褐色 良	雲母少	1/2	墨書2ヶ所 「西」外体正位 「西」内底
7	土師器 蓋	(132)×-×(12) ロクロ成形	暗橙褐色 良	雲母少 砂赤色 黒色微	天蓋部 口縁片 1/4	
8	土師器 坏	-×-×- ロクロ成形 外面 体部下端-ヘラケズリ 内面 密なヘラミガキ	暗褐色 良	雲母微	体部片	墨書「□」 外体 内黒
9	土師器 坏	-×-×- ロクロ成形 外面 体部下端-ヘラケズリ 内面 密なヘラミガキ	暗褐色 良	雲母少	体部片	墨書「□」 外体 内黒
10	土師器 小型甕	(168)×-×(128) 外面 口縁部-ヨコナデ 胴部-ナデ 内面 ヘラナデ	橙褐色 良	雲母少	口縁～ 胴部片 1/2	
11	土師器 甕	(228)×-×149 外面 口縁部-ヨコナデ 胴部-ナデ 内面 ヘラナデ	橙色 良	雲母・ 石英・ 長石中	口縁～ 胴部片 1/6	
12	土師器 甕	(220)×-×(265) 外面 口縁部-ヨコナデ 胴下位-ヨコヘラケズリ後タテヘラミガキ 内面 ヘラナデ、ナデ	暗赤褐色 良	雲母・ 長石類中	口縁～ 胴部片 1/3	

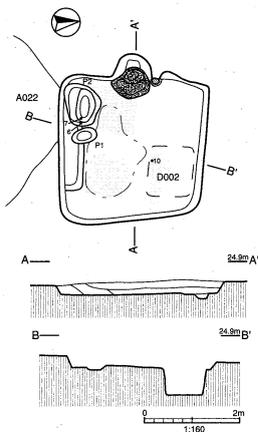


図105 A023

A023

遺構 斜面部に営まれた住居跡であり、ソフトロームを掘込み貼床とする。住居跡中央から南側に硬化面を認める。柱穴は検出せず、P3は出入口に、P2は坑底は若干の凹凸があるが、略平坦で貯蔵穴と捉えた。周溝は南壁の一部のみに検出した。竈は右袖の一部が遺存するのみである。袖は粘土と暗褐色土が混合していた。火床は竈ピット坑底に火熱痕を認めたのみである。覆土は色調を基に1・3層は暗褐色土、2・4層は黒褐色土、5～7層は褐色土とした。2層には焼土・炭化材が包含され、人為堆積と捉えた。

遺物 土師器片がやや多く出土するが、出土傾向は捉えられなかった。
所見 住居廃絶後に不用材の焼却が行われ、消火層として人為投入土によって埋没した遺構と捉えた。

表76 A023遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 坏	(121)×640×400 外面 ロクロ成形 体部下端一回転ヘラケズリ 内面 ロクロ成形 底部一回転糸切り、回転ヘラケズリ	暗褐 良	雲母・ 長石少	1/2	
2	土師器 坏	123×650×350 外面 ロクロ成形 体部下端一回転ヘラケズリ 内面 ロクロ成形 底部一回転糸切り、回転ヘラケズリ	褐 良	雲母中	1/2	
3	須恵器 短頸壺	(940)×-×<350> 外面 かぶせ焼きの跡 以下に全面自然釉 内面 ナデ	青灰 硬良	長石少		
4	土師器 甕	(306)×-×<111> 外面 口縁部・頸部-ヨコナデ 胴部-タテ平行タタキ 内面 ナデ	暗茶褐 暗黄褐 良	雲母・ 英石・ 長石少	口縁部 1/4	
5	土師器 小型甕	-×(440)×<680> 外面 胴部上半-タテヘラケズリ 内面 ヘラナデ・底部-静止ヘラケズリ 底部-静止ケラケズリ	黒褐 良	雲母・ 長石中	胴部~ 底部 1/5	
6	土師器 甕	-×(104)×<540> 外面 胴部-ヨコヘラケズリ 内面 ナデ・ヘラケズリ 底部-静止ケラケズリ	橙 暗橙褐 良	雲母・ 長石少	底部	
7	石製品	長さ(860)×横680×厚さ320 2811g 用途不明 一部焼成を受けている		頁岩		
8	鉄製品 鎌	長さ910×横150×厚さ30 184g				
9	鉄製品 紡錘車	直径410×軸径40 17.3g				

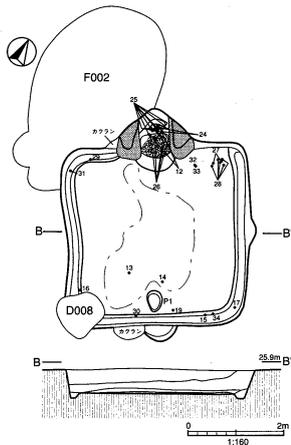


図106 A024

A024

遺構 ハードロームを掘込み、床は貼床とし、住居跡中央に硬化面を認める。しかし北東コーナーは軟弱である。柱穴は検出されず、P1は出入口に伴うと捉えた。周溝は北東コーナーで途絶えるが、その他は壁下を巡っている。竈は煙道部はテラス状に平坦面をつくり、粘土を積み袖としている。内壁は赤化が認められた。住居跡覆土は色調・包含物を基本として、1・3・4・15層は黒褐色土、2・5層は暗褐色土、16・17層は褐色土と捉え、人為的堆積を示していた。竈は9層に分層した。

遺物 本遺跡に特徴的な文字となる「得」「西」の墨書土器が出土する。
所見 D008より本住居跡は古い。P2は坑底に硬化を認め、P1と共に出入口に伴う遺構かと考えられたが、覆土状況が捉えやすく別遺構とした。

表77 A025遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 坏	126×65×34 ロクロ成形 外体下端-手持ちヘラケズリ 底部-回転ヘラ切り→底縁・手持ちヘラケズリ	黒灰~ 橙褐 黒灰良	雲母 長石	略完形	
2	土師器 坏	127×71×38 ロクロ成形 外体下端-回転ヘラケズリ 底部-回転糸切り→底縁・回転ヘラケズリ	明褐色 良	雲母 白色粒	略完形	墨書「日」 外体正位

3	土師器 坏	130×73×33 ロクロ成形 外体下端-回転ヘラケズリ 底部-回転糸切り→底縁・回転ヘラケズリ	橙褐色 良	雲母	完形	墨書「後」 外体正位
4	土師器 坏	150×72×44 ロクロ成形 外体下端-回転ヘラケズリ 内体-密なヘラミガキ 底部-回転糸切り→底縁・回転ヘラケズリ	暗褐色 良	雲母 長石類	略完形	墨書2ヶ所 外体正位「後」 外底「家・家」
5	土師器 坏	—×56×(130) ロクロ成形 外体下端-回転ヘラケズリ 底部-回転ヘラケズリ、回転糸切り	暗橙褐色 普	雲母 長石類 白色	底部片	墨書 内底 「西」
6	土師器 高台付皿	—×—×(19) 高台部径72 ロクロ成形 内体-密なヘラミガキ 底部・高台部-ナデ(切り離し及び底部調整は不明)	褐色 良	雲母 白色粒	底部片	
7	土師器 高台付皿	—×—×(26) 高台部径7.80 ロクロ成形 外体下端-回転ヘラケズリ 内体-密なヘラミガキ 底部-回転糸切り 高台部-ナデ	暗橙褐色 良	雲母 長石類 白色粒	底部片	
8	土師器 坏	—×—×— ロクロ成形 外体下端-回転ヘラケズリ	黒～ 橙褐色 良	雲母	口縁 部片	墨書「万」 外体正位
9	土師器 坏	—×—×— ロクロ成形 外体下端-回転ヘラケズリ 内体-密なヘラミガキ	暗褐色 普	雲母	体部片	墨書「口」 外体
10	須恵器 壺	—×—×(94) 台部径96 ロクロ成形 外面 胴部下端-回転ヘラケズリ 高台部-ナデ 内面 ヨコナデ 底部-回転ヘラケズリ、回転糸切り	灰色 良	雲母 長石 白色	胴部～ 底部 1/2	常総型
11	土師器 甕	(210)×—×(111) 外面 口縁部-ヨコナデ 胴部-ナデ 内面 ヘラナデ	橙褐色 良	雲母 石英 長石	口縁部 ～胴部 1/3	常総型
12	土師器 甕	(214)×—×(53) 外面 口縁-ヨコナデ 胴部-タテヘラケズリ 内面 ヘラナデ	黒褐～ 橙褐色 良	雲母 長石類 赤色粒	口縁～ 胴部	常総型
13	土師器 甕	190×—×(110) 外面 口縁部-ヨコナデ 胴部-ナデ 内面 ヘラナデ	橙褐色 良	雲母石英 多長石 白色赤色	口縁部 ～胴部	多孔
14	土師器 甕	—×92×(226) 外面 ヘラナデ 内面 ナデ、ヘラナデ	黒褐～ 橙褐色 良	雲母 長石類 白色粒	胴部～ 底部	
15	土師器 甌	—×(120)×(51) 外面 ヨコヘラケズリ 内面 ヘラナデ	橙褐色 良	雲母 長石類 白色粒	底部 1/2	
16	石器 砥石	長さ68×幅38×厚み19 重量57.48g 使用面-上下端あわせ6面 上下端の使用痕は顕著でない			略完形	凝灰岩
17	鉄器 刀子	長さ135×幅6×厚み2 重量9.20g 長さ—×幅7×厚み5 長さ—×幅5×厚み3			略完形	
18	鉄器 刀子	長さ(100)×幅9×厚み2 重量15.8g			刃部片	
19	鉄器 刀子	長さ<92>×幅(15)×厚み3 15.2g			刃部片	
20	石器 紡錘車	長さ43×幅(37)×厚み16 (39.0g) 孔径7 本来は砥石か?この場合は、左右両側面は使用されていない 砥石欠損 後に穿孔して転用か?			略完形	凝灰岩
21	石器 紡錘車	長さ31×幅41×厚み19 54.9g 芯孔径8 丁寧なミガキ 擦痕残る			完形	滑石製

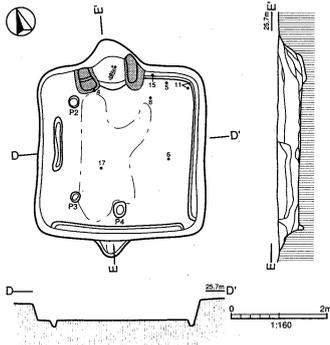


図107 A025

A025

遺 構 床は西壁側はソフトロームとなるが、貼床が主体であり、住居跡中央に硬化面を認めた。P1・P2は柱穴であり、東側の柱穴は検出できなかった。P5は出入口に伴うものである。周溝は東側を主として半周する。西側の床面に周溝状の落込みを認めた。竈の袖はロームを主体とした混合土で基礎を築き、白色粘土を積んでいる。内壁は一部赤化する。火床は赤化するが、煙道に対してやや斜となっている。各コーナー付近に掘方を検出したが、柱穴などは認められなかった。覆土は人為堆積であり、色調等を基本として覆土を7層に、竈を5層に捉えた。覆土中に炭窯の坑底を検出した。また、竈対面の壁を切る土坑の坑底に硬化が認められる。

遺 物 「得」を出土する。

所 見 西壁側の床面に検出された周溝状の掘込みから拡張住居跡の可能性も考慮したが、調査では拡張した跡は捉えられなかった。また、竈に対面するピットは坑底に硬化面が認められ覆土堆積も判断に迷うものであり、P5に対応する出入口の壁上の施設かとも考慮したが、明確にはならず別遺構と捉えた。

表78 A025遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 坏	123×740×420 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 底部一回転ヘラケズリ、回転糸切り	橙褐色 良	雲母	略完形	
2	土師器 坏	136×710×400 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 外体及び外底内体面にクサビ状の刻み有り	橙褐色 良	雲母 白色粒	略完形	墨書「得」 外体正位
3	土師器 坏	123×680×400 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 底部一回転ヘラケズリ、回転糸切り	褐色 良	雲母 長石類	完形	墨書「後」 外体正位
4	土師器 坏	124×700×410 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 内体部一密なヘラミガキ 底部一回転ヘラケズリ	橙褐色 良	雲母	1/2	
5	土師器 坏	(116)×650×360 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 底部一回転ヘラケズリ、回転糸切り	橙褐色 良	雲母多 長石類	1/2	
6	土師器 坏	(166)×800×510 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 内 体部一密なヘラミガキ 底部一回転ヘラケズリ 粗いヘラミガキ 全面 回転ヘラケズリのため切り離し不明	橙褐色 良	雲母	1/2	
7	土師器 坏	(136)×(700)×420 ロクロ成形 外体部下端一静止ヘラケズリ 底部一静止ヘラケズリ、回転ヘラ切り 底部内面中央部に磨耗痕有り 赤外線被射の結果墨の反応はなかった	黒褐～ 橙色 良	雲母 長石類	1/2	くすべ
8	土師器 坏	—×—×— ロクロ成形 9と同一個体か？	暗褐色 良	雲母	口縁片	墨書「□」 外体
9	土師器 坏	—×—×— ロクロ成形 8と同一個体か？	暗褐色 普	雲母	口縁片	墨書 外体 「□」
10	須恵器 坏	138×730×390 ロクロ成形 外体部下端一静止ヘラケズリ 底部一静止ヘラケズリ 切り離し不明	黒色 良	雲母 長石類 白色粒	2/3	朱書 「得」外体横位 「得」外底

11	土師器 甕	225×-×(206) 口唇爪上げて直立し、やや外に広がる 外面 口縁-ヨコナデ 胴部下半-タテのヘラミガキ 内面 ヘラナデ	暗褐色 良	雲母 長石類	口縁~ 胴下半	常総型
12	土師器 甕	192×-×(110) 口唇直立するが緩く内湾気味 外面 口縁-ヨコナデ 胴部-ナデ 内面 ヘラナデ	橙褐色~ 暗褐色 良	雲母 長石類 白色	口縁~ 胴上半	常総型
13	土師器 甕	-×76×(150) ロクロ成形 外面 胴部-タテのヘラミガキ 内面 ヘラナデ 胴部及び底部外面-表面が部分的に剥離	暗褐色 普	長石類多 雲母 白色粒	胴中位 ~底部	常総型
14	須恵器 甕	(304)×(152)×- 外面 口縁-ヨコナデ 胴部-斜~横位のタタキ 下位タテヘラケズリ 内面 ヘラナデ、ナデ 多孔	黒褐色~ 橙褐色 良	長石類	胴部~ 底部 1/5	
15	須恵器 甕	(186)×-×(123) 外面 口縁・頸部-ヨコナデ 胴部-タテ平行タタキ 内面 ナデ	灰 普	長石類 白色粒	口縁部 ~胴部 1/5	
16	須恵器 甕	(210)×-×(115) 外面 口縁-ヨコナデ 胴部-ヨコのタタキ	暗灰色 不良	雲母 長石類	口縁部 1/4	

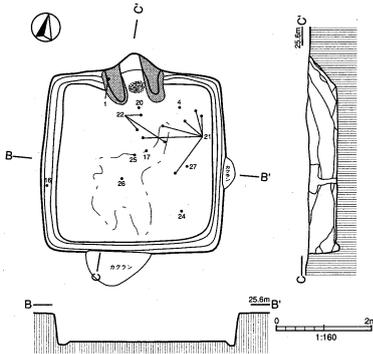


図108 A026

A026

遺 構 ハードロームを掘込んだ貼床である。住居跡中央に硬化面を認める。柱穴は検出されなかった。周溝は竈袖下まで巡る。竈は床と同じ高さに赤化の強い火床を検出した。また、床下調査では火床下に焼土を検出した。粘土が床面直上に広がっていた。覆土は人為堆積であり、色調を基本に住居跡覆土を7層に、また、竈も7層に捉えた。

遺 物 竈前から住居跡中央に広がる粘土散布と同様な、遺物が出土する傾向が捉えられた。

所 見 粘土の堆積と類似する遺物分布は、人為堆積と併せ、廃棄と捉えられることが想定される。

表79 A026遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	須恵器 坏	(122)×(70)×37 ロクロ成形 外体下端-ヘラケズリ 底部-全面・静止ヘラケズリ	灰黄色 良(軟)	雲母 長石位 白色粒	1/2	
2	土師器 坏	(120)×62×35 ロクロ成形 外体下端-静止ヘラケズリ 底部-回転糸切り→底縁・静止ヘラケズリ	橙色 良	雲母 白色粒	1/3	
3	土師器 坏	(128)×(73)×38 ロクロ成形 外体下端-回転ヘラケズリ 底部-(切離し不明)→底縁・回転ヘラケズリ	暗褐色 良	雲母 白色粒	1/3	
4	土師器 坏	128×64×44 ロクロ成形 外体下端-回転ヘラケズリ	橙色 良	雲母 長石類	略完形	
5	土師器 坏	120×72×37 ロクロ成形 外体部下端-回転ヘラケズリ 底部-回転ヘラケズリ、回転糸切り 口縁外・内面にスス附着	橙色 褐良	雲母	完形	線刻「井」 内底 灯明皿
6	土師器 坏	-×-×- ロクロ成形 外体下端-回転ヘラケズリ	橙色 良	雲母	口縁片	墨書「得」 外体横位
7	土師器 坏	-×-×- ロクロ成形 外体-粗いヘラミガキ 内体-密なヘラミガキ	橙褐色 黒 良	雲母	口縁片	墨書「□」 外体

8	土師器 坏	—×—×— ロクロ成形 外体—粗いヘラミガキ 内体—密なヘラミガキ	暗褐色 良	雲母 白色	口縁片	墨書「□」 外体 内黒
9	土師器 甕	(204)×—×(97) 外面 口縁—ヨコナデ 胴部—ナデ 内面 ヘラナデ	橙色 普	雲母 石英 白色	口縁 ~胴部 1/2	
10	土師器 大型甕	205×—×(256) ロクロ成形 外面 口縁部—ヨコナデ 胴部下半—ヨコ→タテのヘラミガキ 内面 ヘラナデ	暗褐~ 暗黄褐色 普	長石類 白色粒 雲母	口縁 ~胴部	
11	土師器 大型甕	213×—×(243) 外面 口縁部—ヨコナデ 胴部下半—タテヘラミガキ 内面 ヘラナデ	暗橙褐色 良	長石類多 雲母 白色粒	口縁 ~胴部	
12	須恵器 甌	—×—×— 外面 口縁部—ヨコナデ 胴部—タテ平行タタキ 把手は5面ヘラケズリ 内面 ナデ	黒褐色 良	雲母 長石類 白色粒	口縁~ 胴部片	くすべ焼成
13	須恵器 甕	—×150×(65) 外面 胴部—タテのタタキ後、胴下位ヨコのヘラケズリ 内面 ナデ 当具痕有り	黒褐色 良	雲母 長石類 白色粒	胴下半 ~底部	
14	土製品 支脚	径92×幅(66)×高さ(110) 重量390g 外面 ヘラケズリ	暗褐色 普	砂多	断片	
15	鉄器 刀子	長さ(135)×幅14×厚み3 重量20.5g 長さ—×幅6×厚み2			刃~茎	
16	鉄器 刀子	長さ211×幅11×厚み3 重量36.0g 長さ—×幅6×厚み3			略完形	
17	鉄器 鋏	長さ146×鋏身幅(31)×鋏身長(22) 重量16.2g 長さ—×鋏身幅(6)×鋏身長(3) 長さ—×鋏身幅(3)×鋏身長(2)			4/5	

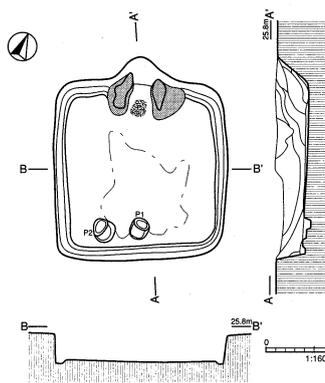


図109 A027

A027

遺 構 ハードロームを掘込み、西コーナーを除いて貼床である。P1は出入口に伴い、P2は0.11mの深さだが、柱穴とは捉えられない。周溝は竈袖下まで巡る。竈の火床は、床面と略同じ高さである。竈左側壁面から北コーナーにかけて粘土の流込みが認められた。覆土は人為堆積であり、色調を基本として住居覆土を7層に、竈を4層に捉えた。

遺 物 竈左に多く出土している。

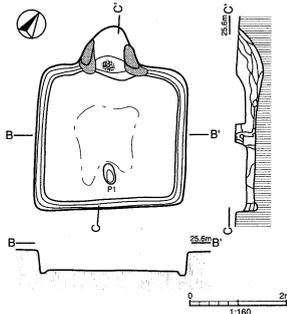
所 見 覆土は乱雑な状態であり、遺構廃絶に伴い多方向から埋戻された状態であった。

表80 A027遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 坏	142×65×46 ロクロ成形 外体下端—ヘラケズリ後粗いヘラミガキ 内体—密なヘラミガキ 底部—回転糸切り痕のみ 粗いヘラミガキ	黒~ 暗褐色 黒良	雲母 長石類 白色粒	1/2	墨書「□」 外体 内黒
2	土師器 坏	162×80×48 ロクロ成形 外体下端—回転ヘラケズリ 底部—回転糸切り→底縁・回転ヘラケズリ	黒褐~ 橙褐色 良	雲母 白色粒	略完形	
3	土師器 坏	167×92×48 ロクロ成形 外体下端—回転ヘラケズリ 粗いヘラミガキ 内体—密なヘラミガキ 底部—回転糸切り→底縁・回転ヘラケズリ 粗いヘラミガキ	暗褐色 普	雲母 長石類	略完形	

4	土師器 坏	162×80×49 ロクロ成形 外体下端－ヘラケズリ 粗いヘラミガキ 内体－密なヘラミガキ 底部－回転糸切り→底縁・回転ヘラケズリ 粗いヘラミガキ	暗橙褐色 黒良	赤色・白 色粒・雲 母・長石	1/2	内黒
5	土師器 坏	115×70×40 ロクロ成形 外体下端－回転ヘラケズリ 底部－回転糸切り→底縁・回転ヘラケズリ	暗橙褐色 良	雲母 長石類	完形	墨書「具」 外体正位
6	土師器 坏	122×(71)×40 ロクロ成形 外体下端－回転ヘラケズリ 底部－回転糸切り→底縁・回転ヘラケズリ 口縁内・外面に1カ所ずつスス付着	黒褐～ 橙褐色 良	雲母 長石類	1/2	灯明皿?
7	土師器 坏	125×76×38 ロクロ成形 外体下端－回転ヘラケズリ 底部－回転糸切り→底縁・回転ヘラケズリ	明褐色 良	雲母	略完形	
8	土師器 坏	128×73×36 ロクロ成形 外体下端－回転ヘラケズリ 底部－回転糸切り→底縁・回転ヘラケズリ	褐色 良	雲母 白色粒	口縁片	
9	土師器 坏	－×－×－ 外体下端－回転ヘラケズリ 墨書は2文字以上になるか?	暗褐色 良	雲母 長石	口縁片	墨書「口速」 外体横位
10	土師器 坏	－×－×－ ロクロ成形 外体－粗いヘラミガキ 内体－密なヘラミガキ	暗褐色 良	雲母	体部片	墨書「口」 外体
11	土師器 甕	(200)×－×(120) 外面 口縁－ヨコナデ 胴部－ナデ 内面 ナデ	橙褐色 良	雲母 長石 砂	口縁部 ～胴部 1/2	常総型
12	土師器 甕	－×80×(130) 外面 胴部－タテヘラミガキ 内面 ヘラナデ	黒褐 暗褐色 良	雲母 石英 長石	胴部 ～底部 1/2	常総型
13	土師器 甕	－×80×(145) 外面 胴部－ヨコヘラケズリ後タテのヘラミガキ 内面 ヘラナデ	黒褐 暗褐色 良	雲母 石英 長石	胴部 ～底部 1/5	常総型
14	土師器 甕	－×80×(258) 外面 胴部下半－ヨコのヘラケズリ後ヘラナデ 内面 ヘラナデ	黒褐色 良	雲母 長石類 白色粒	胴部 ～底部 1/3	
15	須恵器 甕	－×－×－ 外面 口縁－ナデ 胴部－タテのタタキ 内面 ナデ	黒灰褐 暗灰褐 良	雲母 長石類 白色粒	口縁部 ～ 胴部片	
16	須恵器 甕	－×－×－ 外面 胴部－タテのタタキ後全面ナデ 胴下位－ナナメのヘラケズリ 内面 ナデ	黒褐色～ 黄褐色 普	雲母 長石類 白色粒	胴中位 ～ 底部	くすべ
17	須恵器 甕	－×(189)×(135) 外面 胴部－ナナメのタタキ後胴下位ヨコヘラケズリ 内面 ナデ	暗褐色 良	白色粒	胴部 ～底部 1/2	
18	土製品 支脚	上部経40×高さ(149) 重さ486g	暗褐色 普	砂多	断片 1/4?	
19	鉄器 刀子	長さ(46)×幅8×厚み3 重量5.30g			刃～ 茎部	
20	鉄器 刀子	長さ(68)×幅10×厚み－ 重量12.4g 長さ(76)×幅9×厚み2			刃～ 茎部	
21	鉄器 刀子	長さ(63)×幅7×厚み3 重量18.8g 長さ(103)×幅16×厚み4 長さ－×幅7×厚み3			刃～ 茎部	



A030

遺構 ハードロームを地床とし、住居跡中央に硬化面を認めた。柱穴は検出せず、P1は出入口に伴う。周溝は壁下を竈袖下まで巡っている。竈袖は粘土を主体として築き、内壁は赤化していた。また、竈ピット坑底に火床を検出した。覆土は、ロームを多含した人為堆積であった。

遺物 出土傾向を捉えることはできなかった。

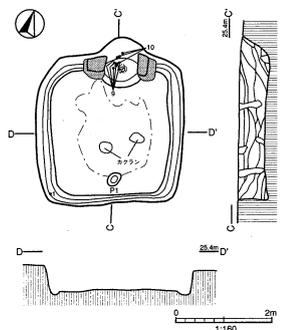
所見 遺構廃絶後に人為的に埋戻された住居跡である。

図110 A030

表81 A030遺物観察表

(単位mm)

No	種別器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 坏	112×56×35 ロクロ成形 外体下端一回転ヘラケズリ 底部一回転糸切り→底縁・回転ヘラケズリ	橙褐色 良	雲母	略完形	墨書「得」 外体正位
2	土師器 坏	129×75×39 ロクロ成形 外体下端一回転ヘラケズリ 底部一回転糸切り→底縁・回転ヘラケズリ	褐色 普	雲母 長石類	完形	墨書「後」 外体正位
3	土師器 坏	—×70×(39) ロクロ成形 外体下端一回転ヘラケズリ 内体部一密なヘラミガキ 底部一(切離し不明)→底縁・回転ヘラケズリ	褐色 良	雲母 長石類	底部 1/2	内黒
4	土師器 大型坏	(222)×(88)×74 ロクロ成形 外体下端一回転ヘラケズリ 内体部一密なヘラミガキ 底部一全面・回転ヘラケズリ	黒～ 橙褐色 良	雲母 白色粒 長石類		内黒
5	土師器 坏	—×—×— ロクロ成形 外体下端一回転ヘラケズリ	褐色 良	雲母 白色	口縁片	墨書「□」 外体部
6	土師器 小型甕	(120)×—×(42) 外面 口縁一ヨコナデ 胴部一タテのヘラケズリ 内面 ヘラナデ	黒褐～ 暗褐色 良	雲母 長石類 白色粒	口縁部 1/3	
7	須恵器 大甕	—×—×(254) 胴部径 (360) 外面 胴部一斜～横位のタタキ 内面 ナデ 当具痕残る	灰色 良(硬質)	長石類 白色	頸部 ～ 胴部片	
8	須恵器 甕	(300)×—×(149) 外面 口縁一ヨコナデ 胴部一タテのタタキ 内面 ナデ	灰褐～ 明黄褐色 良	雲母 長石類 白色粒	口縁 ～ 胴部片	
9	須恵器 甌	—×(142)×(139) 外面 胴部一タテのタタキ後胴下位はヨコのヘラケズリ 内面 胴部一指頭痕あり ナデ	茶褐色 良	長石類 白色粒多 雲母	胴中位 ～ 底部片	
10	須恵器 甕	—×—×—	黒褐～ 暗褐色 良	雲母 長石類 白色粒	底部片	ヘラ書「 」 外底 くすべ焼成



A034

遺構 ハードロームの地床であり住居跡中央に良好な硬化面を認めた。柱穴は検出されず出入口に伴うP1を検出した。周溝は竈袖下まで巡っている。竈袖は掘残したロームを基礎として白色粘土を積んでおり、袖の内壁に赤化を認めた。火床は竈ピット中央に認めた。覆土は色調を基本として住居覆土を9層に、竈を6層と捉え粘土・ロームが混じる人為堆積であった。なお、北西コーナーから住居跡中央にかけて帯状に焼土と小さな炭化材の分布を検出した。

遺物 1は壁側が低い状態で斜位に出土した。

所見 遺構廃絶後に人為的に埋戻された住居跡である。

図111 A034

表82 A034遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	須恵器 坏	(134)×68×43 ロクロ成形 外体下端-静止ヘラケズリ 底部-静止ヘラケズリ 底部中央に粘土塊付着	黒色 良	雲母 長石類 白色粒	略完形	
2	土師器 坏	118×68×35 ロクロ成形 外体下端-回転ヘラケズリ 内体-ヘラミガキ 底部-回転糸切り→底縁・回転ヘラケズリ	橙色 良	雲母	略完形	
3	土師器 坏	(128)×(80)×40 ロクロ成形 外体下端-回転ヘラケズリ 底部-回転糸切り→底縁・回転ヘラケズリ	暗褐色 良	雲母 白色粒	1/4	
4	土師器 坏	(126)×64×42 ロクロ成形 外体下端-回転ヘラケズリ 底部-回転糸切り	橙褐色 良	雲母 長石類	1/2	体部外面~外底 ス状付着 灯明具か?
5	土師器 坏	-×67×(13) ロクロ成形 底部-回転糸切り→底縁・回転ヘラケズリ	褐色 良	雲母	底部 1/2	墨書 外体 「□」
6	土師器 甕	(212)×-(65) 外面 口縁部-ヨコナデ 内面 ヘラナデ	橙色 良	雲母 長石類	口縁部 1/2	
7	土師器 甕	-×(80)×(315) 外面 胴部下端-ヨコのヘラケズリ後タテのヘラミガキ 内面 ヘラナデ 底部-木葉痕	橙褐色 良	雲母 長石類	胴部~ 底部	

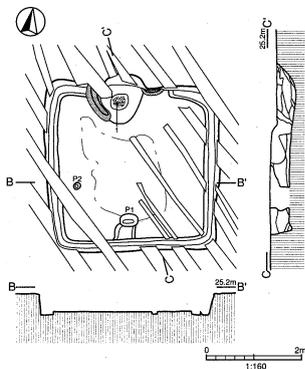


図112 A035

A035

遺 構 ハードロームを掘込み貼床とし、住居跡中央に硬化面を認めた。柱穴は検出されず、P1は出入口に伴う。周溝は竈ピット内まで巡る。竈右袖は壁に粘土が密着するだけであり、左袖のみ遺存し、攪乱の影響もあるが廃棄時に壊されていたと捉えられる。火床は赤化していた。覆土は色調を基本として住居覆土はロームブロックを含み8層に、竈は6層と捉えた。人為堆積である。

遺 物 3は墨書が残ることから、住居廃絶後の流込みと判断した。

所 見 攪乱が大きく、覆土把握にとまどったが、ロームブロックを多含することから、人為堆積と捉えた。

表83 A035遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 坏	(128)×68×40 ロクロ成形 外体下端-回転ヘラケズリ 底部-回転糸切り→底縁・回転ヘラケズリ	暗褐~ 橙色 良	雲母	1/3	
2	土師器 坏	(116)×66×41 ロクロ成形 外体下端-回転ヘラケズリ 底部-回転糸切り→底縁・回転ヘラケズリ	橙褐色 良	雲母	1/2	
3	土師器 坏	(110)×(62)×36 ロクロ成形 口縁が厚い 外体下端-回転ヘラケズリ 底部-(切離し不明)→回転ヘラケズリ	暗褐色 良	雲母多 白色粒	1/3	墨書「□」 外体
4	石器 砥石	長さ(41)×幅(24)×厚さ(16) 重量21.9g 上下端欠損 使用面4面			断片	凝灰岩

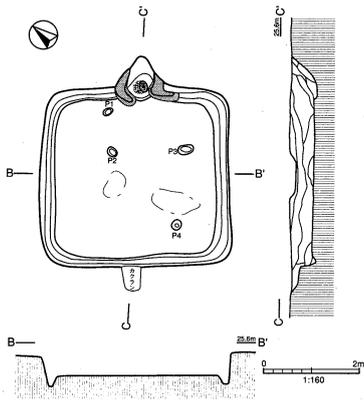


図113 A036

A036

遺構 ハードロームを掘込み床としている。竈前及び東コーナーは貼床となる。住居跡中央に点在して僅かに床の硬化面を認める。柱穴は配置状はP1・P3・P4であろうが、床から0.06~0.07mの深さであり、柱穴となるかは捉えきれなかった。出入口に伴うピットは検出されなかった。周溝は竈袖下まで全周する。竈のピットは坑底若干凹凸あるもので、火床は赤化が弱く判然としない。粘土を積み袖としているが、内壁の赤化は両袖とも認められた。覆土は色調・包含物を基本として、1・6層黒褐色土、2・3・5・8層暗褐色土、4・7層褐色土と8層に捉えた。また、竈は5層に捉えた。なお、3・4層は人為的投入土である。

遺物 竈内及び北コーナーにおいて遺物が集中していた。

所見 本来P2の位置に検出されるであろうピットは、床面下を精査したにも関わらず検出できなかった。

表84 A036遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 坏	86×60×24 ロクロ成形 外体下端-手持ちヘラケズリ 底部-回転ヘラ切り→手持ちヘラケズリ	橙褐色 良	雲母 長石類	完形	灯明具 口縁-外・内面 にスス有り
2	土師器 坏	(122)×66×37 ロクロ成形 外体下端-回転ヘラケズリ 底部-回転糸切り→底縁・回転ヘラケズリ 底部内面-剥離著しい	暗橙褐色 良	雲母	1/2	
3	土師器 坏	120×68×41 ロクロ成形 外体下端-回転ヘラケズリ 底部-全面・回転ヘラケズリ	褐色 良	雲母 長石類 白色粒	完形	墨書 外体・外底逆位 「得」
4	土師器 坏	(156)×(70)×47 ロクロ成形 外体下端-手持ちヘラケズリ 内体-密なヘラミガキ 底部-静止糸切り→底縁・手持ちヘラケズリ	暗褐色 良	雲母	1/3	内黒
5	土師器 坏	(150)×(37)×48 ロクロ成形 外体下端-回転ヘラケズリ 内体-密なヘラミガキ 底部-(切離し不明)→底縁・回転ヘラケズリ	黒~ 橙褐色 良	雲母 長石類	1/3	内黒
6	土師器 坏	131×60×42 ロクロ成形 成形において歪んだ器形となる 外体下端-回転ヘラケズリ 墨書 外体「承和二年十八日進」 内体~内底「野家立馬子召代進」	褐色 普	雲母 長石類	略完形	墨書・長文
7	土師器 高台付皿	140×-×22 高台部径72 ロクロ成形 内体-ヘラミガキ	橙褐色 良	雲母 長石類 白色粒	完形	墨書 外体横位 「太」
8	土師器 坏	-×-×- ロクロ成形	橙褐色 良	雲母	口縁片	墨書 外体 「□」
9	須恵器 甕	240×-×(185) ロクロ成形 外面 頸部-ヨコナデ 胴部-格子状タタキ後全面ナデ 内面 ナデ 剥離著しい	黄灰色 良	雲母石英 長石白色	口縁~ 胴部片	
10	土師器 甕	202×85×295 外面 口縁-ヨコナデ 胴下半-ヨコのヘラケズリ後タテのヘラミガキ 内面 ヘラナデ	黒褐~ 暗褐色 良	雲母 長石類	2/3	常総型
11	土師器 甕	-×74×(120) 外面 胴部-タテのヘラケズリ後斜~横位のヘラケズリ 内面 ヘラナデ	黒褐~ 暗褐色 良	雲母 白色粒	胴下半 ~ 底部	

12	石器 砥石	長さ73×幅42×厚さ31 重量95.1g 左右両側面に敲打痕有り 表裏面に線状痕著しい 使用面4面			1/2 程度?	砂岩
13	鉄器 鎌	長さ144×幅27×厚み3 重量44.5g			刃部 1/2 程度	
14	鉄器 刀子	長さ(76)×幅10×厚み2 重量12.3g			刃部	
15	青銅器 帯金具	長さ19×幅21×厚み1 重量0.8g 隅に小孔を有すことから巡方か?(小破片のため不明)			1/2	

A037

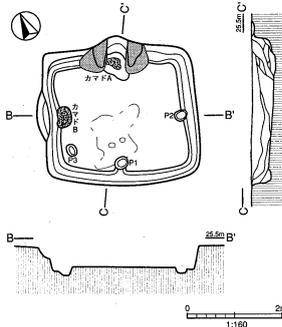


図114 A037

遺 構 ハードロームを掘込み貼床とするが、南コーナーとP1付近はロームである。住居跡中央～P2にかけて硬化面を認めた。柱穴は判然とせずP2はKAに、P3はKBに対する出入口に伴うものと捉えた。周溝はKA袖下まで全周する。竈は2基検出し、ともに煙道部の壁への掘込みが浅い。KAはローム等を基礎として粘土を積上げ袖とし、内壁は赤化していた。火床は不明瞭である。KBはKA構築時に壊され、本体は不明である。煙道部に粘土・焼土が若干混入し、竈ピットも周溝によって壊されるが、火床となる焼土を検出した。住居跡覆土は色調等によって、1・3・4層暗褐色土、2層黒褐色土、5・13層褐色土とした。

遺 物 KA右前から竈壁際にかけての出土が多い。
所 見 竈の改替を行った住居跡であり、KBからKAへの改替である。

表85 A037遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 坏	(118)×(70)×33 ロクロ成形 外体下端-回転ヘラケズリ 底部- (切離し不明) →底縁・回転ヘラケズリ	暗褐色 良	雲母 長石類 白色粒	1/5	墨書「才」 外体正位
2	土師器 坏	(123)×67×44 ロクロ成形 外体下端-静止ヘラケズリ 底部-全面・静止ヘラケズリ	暗黒褐色 良	雲母長石 類赤色黒 色粒礫微	1/2	
3	土師器 坏	(154)×(72)×56 ロクロ成形 外体下端-ヘラケズリ 内体-密なヘラミガキ 底部-回転糸切り→底縁・回転ヘラケズリ	黒～ 明褐色 良	雲母 長石類 赤・白色	1/5	内黒
4	土師器 坏	-×-×- ロクロ成形	橙褐色 良	雲母 白色粒	口縁片	墨書「□」 外体
5	須恵器 坏	(116)×(61)×38 ロクロ成形 外体下端-手持ちヘラケズリ 底部-回転ヘラ切り→底縁・手持ちヘラケズリ	黒～ 暗茶褐色 普	雲母 白色粒	1/3	くすべ焼成
6	須恵器 坏	(128)×67×43 ロクロ成形 外体下端-手持ちヘラケズリ 底部-全面・静止ヘラケズリ	暗青灰 良	長石類	1/2	朱書「□」 外体
7	須恵器 坏	(140)×58×44 ロクロ成形 外体下端-手持ちヘラケズリ 底部-回転ヘラ切り→底縁・手持ちヘラケズリ、	黒褐～ 暗灰白色 良	雲母 長石類	1/2	
8	須恵器 高台付坏	-×-×(44) 高台部径 104 ロクロ成形 外体下端-回転ヘラケズリ 高台部-ナデ 内底-ナデ 底部-全面・回転ヘラケズリ	灰 良(軟)	雲母石英 長石黒色 白色礫少	台部	

9	土師器 小型甕	140×(60)×160 外面 口縁部-ヨコナデ 胴部-タテのヘラケズリ後下半は斜~横位のヘラケズリ 内面 ヘラナデ 底部-木葉痕	暗褐色 普	雲母 長石類 白色粒	1/2	
10	土師器 甕	174×-×(118) 外面 口縁部-ヨコナデ 胴部中位-斜横位ヘラケズリ 内面 ヘラナデ	黒褐~ 暗褐色 良	長石類 雲母	口縁~ 胴部片 1/2	
11	土師器 甕	(214)×-×(155) 外面 口縁-ヨコナデ 胴部-タテのヘラケズリ後中位斜のヘラケズリ 内面 ヘラナデ	暗褐色 普	雲母石英 長石白色	口縁~ 胴部片 1/2	
12	土師器 甕	208×-×(268) 外面 口縁-ヨコナデ 胴部下半-タテのヘラミガキ 内面 ヘラナデ	暗褐~ 橙褐色 良	雲母 長石類 白色粒	口縁~ 胴部片	
13	土製品 支脚	上部径(34)×(14) 下部径(25)×(25) 器高15.1 重量485g	橙褐色 普	砂多	1/2	
14	石器 不明	長さ129×幅62×厚さ31 重量332.0g 全体に火熱を被る			完形?	花崗岩
15	鉄器 刀子	長さ(160)×幅8×厚み2 重量22.3g 長さ-×幅10×厚み3 長さ-×幅7×厚み4			刃~茎	

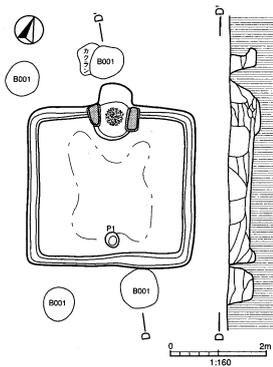


図115 A039

A039

遺 構 ハードロームを掘込み地床とする。住居跡中央は硬化面を認める。柱穴は検出されず、P1は出入口に伴うものと捉えた。周溝は竈ピットまで巡る。竈袖は粘土を積上げて築き、内壁は赤化していた。竈ピットの坑底に赤化した火床を認めた。覆土は自然堆積。色調・包含物を基本として1~5・13層を暗褐色土、14層を橙褐色土と捉え、竈は7層に分層した。覆土中層から炭化材が検出された。

遺 物 「得」の墨書土器が出土している。

所 見 B001と重複し、B001が新しい。覆土中層炭化材は自然堆積の埋没過程においての不用材の焼却と捉えられた。

表86 A039遺物観察表

(単位mm)

No	種 別 器 形	法 量 口径×底径×器高 成 形・調 整 等 の 特 徴	色 調 焼 成	胎 土	遺 存	備 考
1	須恵器 坏	(126)×61×41 ロクロ成形 外体下端-ヘラケズリ 底部 全面・静止ヘラケズリ	暗灰黄色 良	長石類 黒色	1/2	
2	須恵器 坏	142×74×41 ロクロ成形 外体下端-静止ヘラケズリ 底部 回転ヘラ切り→二方向から静止ヘラケズリ	暗黒灰色 普	赤色粒 白色粒	1/2	くすべ焼成
3	須恵器 坏	130×71×33 ロクロ成形 外体下端-回転ヘラケズリ 底部 全面・静止ヘラケズリ	暗灰黄色 良	長石類 黒色粒	略完形	
4	土師器 坏	(115)×58×36 ロクロ成形 外体下端-回転ヘラケズリ 底部 全面・回転ヘラケズリ	暗褐色 良	雲母 白色粒	1/3	墨書 外体 「口」 朱書
5	土師器 坏	130×71×37 ロクロ成形 外体部下端-回転ヘラケズリ 底部 回転ヘラ切り→底縁・回転ヘラケズリ	橙褐色 良	雲母 長石類	略完形	
6	土師器 坏	129×70×38 ロクロ成形 外体下端-回転ヘラケズリ 底部 回転糸切り→底縁・回転ヘラケズリ	橙色 良	雲母 長石類 白色粒	略完形	

7	土師器 坏	(130)×(59)×39 ロクロ成形 外体部下端へラケズリ 底部 (切離し不明)→底縁・回転へラケズリ	橙色 普	雲母 長石類	1/2	
8	土師器 坏	128×70×44 ロクロ成形 外体下端へラケズリ 底部 回転糸切り→底縁・回転へラケズリ	橙色 良	雲母 長石類	略完形	
9	土師器 坏	149×72×40 ロクロ成形 外体下端へラケズリ 内体一密なへラミガキ 底部一全面・回転へラケズリ	黒～ 暗褐色 良	雲母多 白色粒	略完形	へラ書「 \times 」 底部外面
10	土師器 坏	(117)×70×37 ロクロ成形 外体下端へラケズリ 底部 回転へラ切り→底縁・回転へラケズリ	褐色 良	雲母 長石類	1/2	墨書「 卍 」 底部外面
11	土師器 坏	(156)×(78)×49 ロクロ成形 外体下端へラケズリ後粗いミガキ 内体一密なへラミガキ 底部 回転糸切り→底縁・回転へラケズリ	黒～ 褐色 良	雲母 白色粒	1/4	墨書「 万 」 体部外面
12	土師器 坏	(154)×82×46 ロクロ成形 外体下端へラケズリ 底部 回転糸切り→回転へラケズリ	黒～ 橙褐色 良	雲母 白色粒	1/2	墨書「 得 」 体部外面
13	土師器 高台付皿	—×—×(27) ロクロ成形 外体下端へラケズリ 高台部一ナデ 内体一密なへラミガキ 底部 ナデ	褐色 良	雲母 長石類 白色	高台部	内面にモミガラ 圧痕
14	土師器 皿	(172)×(58)×19 ロクロ成形 外体下半へラケズリ 底部 (切離し不明)→底縁・回転へラケズリ	橙褐色 良	雲母多	1/5	蓋か?
15	土師器 小型甕	(136)×—×(62) 口縁一ヨコナデ 外面 胴部一ナナメのへラケズリ 内面 ナデ	暗橙褐 良	雲母 長石類 白色類	口縁片 1/2	
16	土師器 小型甕	170×(70)×(196) 口縁一ヨコナデ 外面 胴部一斜～横位へラケズリ 内面 へラナデ 底部一木葉痕	暗褐～ 橙褐色 良	雲母 長石類 白色粒	略完形	
17	土師器 甕	215×—×(232) 口縁一ヨコナデ 外面 胴部一タテのへラケズリ後下半部ヨコのへラケ ズリ 内面 へラナデ	黒～ 暗褐色 良	雲母 長石類	口縁～ 胴部片	
18	須恵器 甕	—×162×(113) 外面 胴部一タテのタタキ後下位は斜～横位のへラケズリ 内面 剥離著しく不明	暗黒灰色 良	雲母 長石類 白色粒	胴部～ 底部	
19	土製品 支脚	径118×75 下径140×95 高さ130	暗赤褐色 良	砂多	断片	

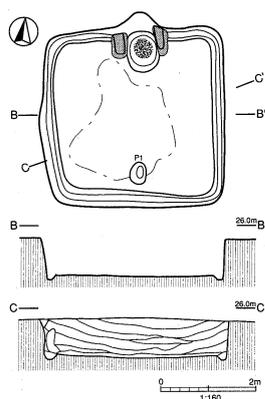


図116 A040

A040

遺 構 ハードロームを深く掘込み貼床とし、住居跡中央に硬化面を認めた。柱穴は検出されず、P1は出入口に伴うものと捉えた。周溝は竈ピットまで巡っていた。竈袖は粘土を積上げて築き、内壁は赤化している。竈ピットの坑底の略中央に、赤化した火床を認めた。煙道部の壁への掘込みは浅く、火床からの立上がりは急であった。覆土は色調・包含物によって1・3・5・8・9層を黒褐色土、2・6・7層暗褐色土、4層灰褐色土、10層明褐色土と捉え、4層は竈方向からの粘土の流込みと判断した。

遺 物 「 万 」の墨書土器が出土した。
所 見 掘込みの深い竈穴住居跡である。

表87 A040遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	須恵器 坏	一×(86)×(16) ロクロ成形 外体下端一静止ヘラケズリ 底部 全面・静止ヘラケズリ	暗黒灰色 良	雲母 長石類 白色粒	底部片 1/4	線刻「卍」 底部内面 くすべ焼成
2	土師器 坏	一×(57)×11 ロクロ成形 外体下端一回転ヘラケズリ 底部 底縁・回転ヘラケズリ 切離しは底部中心に径12mmの穿孔あるため不明	褐色 良	雲母 長石類 白色粒	底部片	底部穿孔 (焼成後)
3	土師器 坏	一×(70)×(29) ロクロ成形 底部 回転糸切り→底縁・回転ヘラケズリ	褐色 良	雲母 長石類	底部片 1/5	墨書 体部外面 「□」
4	土師器 坏	118×55×34 ロクロ成形 外体下端一回転ヘラケズリ 底部 回転糸切り→底縁・回転ヘラケズリ	橙褐色 良	雲母	完形	
5	土師器 坏	115×70×39 ロクロ成形 外体下端一回転ヘラケズリ 底部 回転糸切り→底縁・回転ヘラケズリ	橙色 良	雲母 長石類 赤色粒	完形	
6	土師器 坏	123×76×39 ロクロ成形 外体下端一ヘラケズリ 底部 回転糸切り→底縁・回転ヘラケズリ	橙褐色 良	雲母 赤黒・ 白色粒	略完形	墨書「万」 体部外面
7	土師器 坏	135×80×38 ロクロ成形 体部一ロクロ成形痕のみ 底部 回転糸切り→底縁・回転ヘラケズリ	褐色 良	雲母 白色粒	略完形	
8	土師器 坏	(128)×65×37 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 底部 回転糸切り→底縁・回転ヘラケズリ	橙～ 暗褐色 良	雲母 長石類	1/2	墨書「万」 体部外面
9	土師器 坏	(128)×70×44 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 底部 回転糸切り→底縁・回転ヘラケズリ	褐色 良	雲母 長石類 白色粒	1/2	
10	土師器 坏	(124)×(70)×46 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 底部一回転ヘラケズリ→底縁・手持ちヘラケズリ	暗橙褐～ 暗黒灰色 良	雲母 長石類 白色粒	1/2	
11	土師器 坏	(126)×(64)×33 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 底部 回転糸切り→底縁・回転ヘラケズリ	橙褐色 良	雲母 長石類 白色粒	1/4	線刻「×」 底部内面
12	土師器 坏	(150)×(68)×46 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 粗いヘラミガキ 底部 回転糸切り→底縁・回転ヘラケズリ	褐色 良	雲母 長石類	1/2	ヘラ書「×」 底部外面
13	土師器 坏	一×(77)×(44) ロクロ成形 外体下端一回転ヘラケズリ 粗いヘラミガキ 底部 回転糸切り→底縁・回転ヘラケズリ 粗いヘラミガキ	黒～ 茶褐色 良	雲母 長石類 白色	底部	墨書「□」 体部外面
14	土師器 坏	(150)×76×44 ロクロ成形 外体下端一回転ヘラケズリ 内部部一密なヘラミガキ 底部 回転糸切り→底縁・回転ヘラケズリ	暗褐色 良	雲母 長石類 白色粒他	1/2	
15	土師器 坏	150×85×53 ロクロ成形 外体下端一回転ヘラケズリ 粗いヘラミガキ 内体一密なヘラミガキ 底部一全面・回転ヘラケズリ	黒色 良	雲母 長石類	略完形	
16	土師器 坏	162×(76)×45 ロクロ成形 外体下端一回転ヘラケズリ 粗いヘラミガキ 内体一密なヘラミガキ 底部 回転糸切り→底縁・回転ヘラケズリ 粗いヘラミガキ	黒～ 暗褐色 良	雲母 長石類 白色粒	1/2	墨書「□」 体部外面
17	土師器 甕	2244×一×127 口縁一ヨコナデ 外面 胴部一ナデ 内面 ヘラナデ	暗褐色 良	雲母 長石類	口縁部 ～胴部 1/5	
18	土師器 甕	(224)×一×(68) 口縁一ヨコナデ 外面 胴部一ナデ 内面 ヘラナデ	黒褐色 良	雲母 長石類	口縁部 1/6	

19	土師器 甕	(340)×-×(125) 口縁-ヨコナデ 外面 胴部-タテ平行タタキ 内面 ナデ ヘラナデ	暗灰黄色 良	雲母 長石類	口縁部 1/8	
20	須恵器 甕	-×(128)×78 外面 胴部-タテのタタキ 下位はヨコのヘラケズリ 内面 ヘラナデ 多孔の甕	灰色 良	雲母 長石類	底部片 1/4	
21	須恵器 甕	-×(140)×(180) 外面 胴部-タテのタタキ 下位はヨコのヘラケズリ 内面 ナデ ヘラナデ	暗黒灰色 良	雲母 長石類 白色粒	胴部~ 底部片 1/2	ヘラ書底部外面 「□」
22	土製品 支脚	上部径(75)×(35) 胴部径120×110 下部径140×125 高さ210 重量 2,279g	橙色 普	砂多	1/2 強	
23	土製品 支脚	上部径50×(220) 重量 650g 胴部径580×80 下部左 高さ(115)	暗褐色 普	砂多	1/3 以下	
24	鉄器 刀子	長さ(154)×幅7×厚み1 重量15.7g 幅1×厚み3			略完形	比較的小型

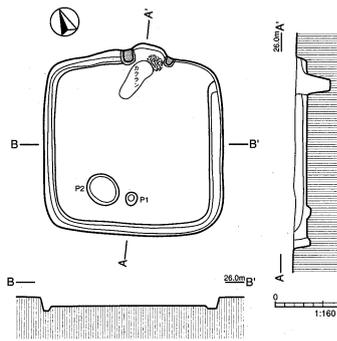


図117 A041

A041

遺 構 ソフトローンを掘込んで床とするが、硬化とは言えない固さである。柱穴は検出されず、P1は出入口に伴う。P2は用途不明である。周溝は左袖下から巡り、東コーナーで途切れる。竈の袖は粘土は殆ど含まず、黒褐色土を積上げていた。火床は床面と同じ高さで、赤化していた。覆土は自然堆積であり、1層黒褐色土、2層暗褐色土、3層褐色土と捉えた。床面には焼土・炭材小片を検出した。

遺 物 全体的に少なかった。

所 見 住居廃絶時に不用材の焼却を行った住居跡と捉えられた。

表88 A041遺物観察表

(単位mm)

No	種 別 器 形	法 量 口径×底径×器高 成 形・調 整 等 の 特 徴	色 調 焼 成	胎 土	遺 存	備 考
1	土師器 坏	132×60×34 ロクロ成形 外体下端-回転ヘラケズリ 底部-回転糸切り→回転ヘラケズリ	暗褐~ 黒褐色 良	雲母	略完形	
2	土師器 坏	(132)×-×(33) ロクロ成形 外体下端-回転ヘラケズリ	黒褐色 良	雲母 白色粒	口縁片 1/4	
3	土師器 坏	(148)×-×(37) ロクロ成形	暗黄橙色 普	雲母 長石類 黑色粒	口縁片 1/4	
4	土師器 甕	(208)×-×(77) 口縁-ヨコナデ 外面 斜・縦位のヘラケズリ 内面 ヘラナデ	淡橙褐色 普	雲母 長石類	口縁 ~ 胴上半	
5	石器 砥石	長さ57×幅88×厚さ22 重量58.9g 裏面一部欠損 使用面6面 著しい黒変			1/3	凝灰石
6	石器 軽石	長さ63×幅58×厚さ48 線刻状にキザミ			略完形	砥石に使用か?
7	鉄器 鋏	最大高111×最大幅(98) 重量78.3g			1/3	

8	鉄器 紡錘車	長径132×幅4×厚さー 重量13.3g			軸のみ	
9	鉄器 紡錘車	直径53×軸径5 重量22.9g			円盤部	
10	鉄器 鎌	長径(60)×幅26×厚さ1 重量16.5g			刃先片	
11	石器 敲石	長径101×幅71×厚み64 重量11.6g 上下・表裏・左右側面を使用した6面体の敲石で、敲打痕やそれに伴う剥離痕が著しい			略完形	凝灰岩

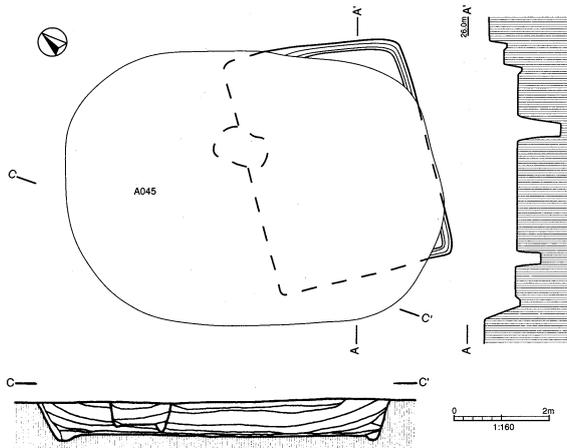


図118 A044

A044

遺構 大半をA045の覆土上層を掘込んだ住居跡であり、掘過ぎのためA045の外側の一部しか検出できなかった。柱穴は把握できず、また、竈も粘土混入の火床と支脚の出土から確認されたに過ぎない。周溝はA045外に認められているが、全周するかは不明である。覆土は1～4層とも黒褐色土であり、床直上層に相当する3層は焼土を多含したものである。

遺物 A045との平面及び垂直分布から、本住居跡に属する遺物を判断した。6～13は軽石であるが、研磨痕等は認められなかった。

所見 弥生時代のA045と重複するため大半を掘過ぎ、満足な調査はできなかった。調査の中でも床面は捉えにくく、A045の覆土上層中のため軟弱であったと想定している。覆土3層に焼土を多含することは、住居廃絶時に不用材の焼却を行っていたと思われ、その消火行為のため覆土は人為堆積と捉えた。その後は1・2層の自然堆積であろう。

表89 A044遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 坏	130×56×34 ロクロ成形 外体下端ーヘラケズリ 底部ー回転糸切り→回転ヘラケズリ	黒～褐色 良	雲母 長石類 白色粒	略完形	
2	土師器 坏	(140)×ー×(39) ロクロ成形 外体下端ー回転ヘラケズリ	橙褐色 良	雲母 長石類 白色粒	口縁片 1/5	
3	土師器 甕	(210)×ー×(110) 口縁ーヨコナデ 口縁外面に輪積痕が残る 外面 胴部ータテヘラケズリ 内面 ヘラナデ	黒灰～ 橙褐色 良	雲母 長石類 白色粒	口縁～ 胴部	
4	土師器 甕	ー×(100)×(43) 外面 ヨコヘラケズリ 内面 ヘラナデ 底部ー静止ヘラケズリ、回転糸切り	明褐～ 橙褐色 良	雲母 長石類 白色粒	底部 1/2	
5	石器 支脚?	長さ163×幅145×厚さ31 著しい被熱 非常にもろい			1/2 以下?	花崗岩
6	石器 軽石	長さ60×幅72×厚さ51 重量54.6g 著しい被熱				砥石か?

7	石器 軽石	長さ42×幅32×厚み(21) 重量15.0g 表面-カジリ欠損 裏面-欠損				砥石か?
8	石器 軽石	長さ38×幅32×厚み17重量5.20g 重量				砥石か?
9	石器 軽石	長さ41×幅(27)×厚み19 6.3g 著しい被熱 欠損有り				砥石か?
10	石器 軽石	長さ31×幅32×厚み26 重量(7.10)g 著しい被熱 欠損が激しい				砥石か?
11	石器 軽石	長さ32×幅(31)×厚み32 重量(6.00)g				砥石か?
12	石器 軽石	長さ31×幅(25)×厚み18 重量(3.80)g カジリ欠損が見られる				砥石か?
13	石器 軽石	長さ21×幅18×厚み09 重量1.00g				砥石か?
14	鉄器 刀子	長さ(69)×幅12×厚み- 重量32.2g			1/2	別个体か?
15	鉄器 刀子	長さ(55)×幅(8)×厚み- 重量18.4g			1/3	
16	鉄器 鎌	長さ(174)×幅37×厚み1 重量54.6g				刃部
17	石器 紡錘車	長さ32×幅45×厚み17重量49.6g 上面のミガキが著しい 側面はケズリ				完形 滑石製

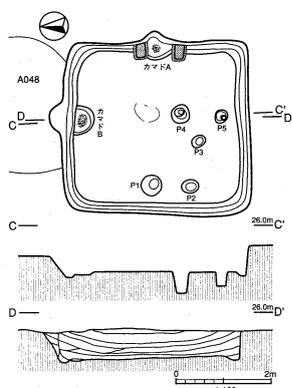


図119 A049

A049

遺 構 ハードロームを掘込み貼床とし、住居跡中央に狭い範囲の硬化面を認めた。P2・P4が柱穴かは判断としない。P1はKAに、P5はKBに伴う出入口に伴う。周溝は2基の竈ピット内を掘込み、壁下を全周する。KAは袖を粘土と黒褐色土を混合させて築き、火床は淡く赤化していた。煙道部の壁への掘込みは浅い。KBはKA構築時に壊され、竈ピットの一部分が遺存する。赤化した火床を坑底中央に認めた。住居跡覆土は自然堆積であり、色調等から1～3層黒色土、4～8層褐色土と捉えた。

遺 物 「万」の墨書土器が出土する。

所 見 竈はKBからKAへとの改替と捉えられた。

表90 A049遺物観察表

(単位mm)

No.	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 坏	(124)×64×41 ロクロ成形 外体下端-回転ヘラケズリ 底部 全面・静止ヘラケズリ	灰黄色 良	雲母 長石類	1/3	
2	土師器 坏	(118)×(74)×33 ロクロ成形 外体下端-回転ヘラケズリ 底部 回転糸切り→底縁・回転ヘラケズリ	褐色 普	雲母 長石類	1/3	

3	土師器 坏	(132)×(68)×38 ロクロ成形 外体下端-回転ヘラケズリ 底部 回転糸切り→底縁・回転ヘラケズリ	褐色 良	雲母 長石類	1/2	
4	土師器 坏	124×(70)×43 ロクロ成形 外体下端-回転ヘラケズリ 内面 下端付近大きく剥離 底部 回転ヘラケズリ	暗褐～ 橙褐色 普	雲母 長石類 白色	底部欠	
5	土師器 坏	153×54×43 ロクロ成形 外体下端-回転ヘラケズリ 底部 回転糸切り→底縁・回転ヘラケズリ	褐色 良	雲母 長石類 粒白色	略完形	
6	土師器 坏	一×108×(37) ロクロ成形 外体下端-回転ヘラケズリ 内面 密なヘラミガキ 底部 回転糸切り→底縁・回転ヘラケズリ	暗褐色 普	雲母 長石類	底部	
7	土師器 坏	一×(74)×(15) ロクロ成形 外体下端-回転ヘラケズリ 内面 密なヘラミガキ 底部-全面・回転ヘラケズリ	褐色 普	雲母 長石類	底部 1/4	
8	土師器 坏	一×一×一 ロクロ成形 外体部下端-回転ヘラケズリ 内面 密なヘラミガキ 底部 回転糸切り→底縁・回転ヘラケズリ	暗褐色 良	雲母	口縁片	墨書 体部外面 「万」
9	土師器 甕	190×84×329 外面 口縁-ヨコナデ 胴下半-ヨコのヘラケズリ後タテのヘラケズリ 内面 ヘラナデ	暗褐色 普	雲母 長石類 白色粒	略完形	長石類の包含多 量のため調整痕 不明瞭となる
10	土師器 小型甕	(136)×一×(59) 外面 口縁-ヨコナデ 胴部-タテヘラケズリ 内面 ヘラナデ	黒褐～ 橙褐色 良	雲母 長石類 白色類	口縁片 1/2	
11	鉄器 刀子	長さ(95)×幅10×厚み4 重量16.6g 長さ一×幅(39)×厚み7			刃～茎	

A050

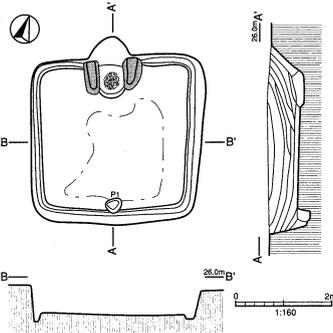


図120 A050

遺 構 ハードロームを掘込み地床とし、住居跡中央に硬化面を認める。柱穴は検出されず、P1は出入口に伴う。周溝は竈袖下まで全周する。竈袖は粘土を主体として築き、竈ピット内に赤化した火床を認めた。住居跡覆土は自然堆積であり、1・2・13層黒褐色土、3・5・11・15層暗褐色土、4層褐色土、14層黄褐色土と捉えた。

遺 物 出土傾向を捉えることはできなかった。

所 見 掘込みが深い住居跡である。

表91 A050遺物観察表

(単位:mm)

No	種 別 器 形	法 量 口径×底径×器高 成 形・調 整 等 の 特 徴	色 調 焼 成	胎 土	遺 存	備 考
1	土師器 坏	132×75×39 ロクロ成形 外体下端-静止ヘラケズリ 底部 全面・静止ヘラケズリ	黒色 良	雲母 長石類	2/3	
2	土師器 坏	121×62×37 ロクロ成形 口縁-ヨコナデ 外体-ヨコヘラケズリ 内体-ナデ後粗いヘラミガキ 底部 ヘラケズリ 切り離し不明	橙褐色 良	雲母 白色粒	1/2	
3	土師器 坏	122×62×39 ロクロ成形 外体下端-静止ヘラケズリ 底部 全面・静止ヘラケズリ	黒褐～ 暗褐色 良	雲母	略完形	底部内面に墨痕 らしきもの有り
4	土師器 坏	118×68×40 ロクロ成形 外体下端-回転ヘラケズリ 底部 回転糸切り→底縁・回転ヘラケズリ、	褐色 良	雲母 長石類	略完形	墨書「□」 外体正位

5	土師器 坏	128×70×45 ロクロ成形 外体下端一回転ヘラケズリ 底部 全面ヘラケズリのため切り離し不明	黒灰～ 黒色 良	雲母 長石類	略完形	
6	土師器 坏	—×—×— ロクロ成形 外体下端一回転ヘラケズリ 粗いヘラミガキ 内体—密なヘラミガキ	褐色 良	雲母	口縁片	墨書「才」 外体正位 内黒
7	須恵器 甕	—×170×(298) 胴部外面—斜～横位のタタキ後全面ナデ 下位—ヨコのヘラケズリ 胴部内面—ナデ(剥離部分多く詳細不明)	暗灰黄色 良	雲母・ 長石類・ 白色粒多	頸部～ 底部	
8	土師器 甕	(202)×—×(84) ロクロ成形 口縁—ヨコナデ 胴部外面—ナデ 内面—ヘラナデ	橙褐色 良	雲母 長石類	口縁片 1/2	
9	鉄器 刀子	長さ(98)×幅2×厚さ11 重量 10.5g				刃略遺 存～茎
10	鉄器 釘	長さ(58)×幅7×厚さ— 重量7.30g				1/3

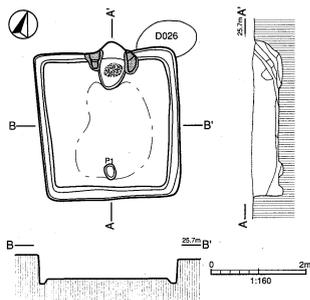


図121 A058

A058

遺 構 ハードロームの地床で、住居跡中央に硬化面を認めた。P1は出入口に伴うものである。周溝は竈袖下まで全周する。粘土を積上げた竈袖の内壁は赤化し、火床も赤化している。住居跡覆土は床直上の自然堆積後、投入土による人為堆積であり、色調に等から、1・2層黒褐色土、3層褐色土、4層粘土ブロック、5層灰褐色土と捉えた。

遺 物 出土遺物は極めて少ない。

所 見 遺構廃絶後の若干の時間経過の後に、一気に埋戻した住居跡と覆土の状態から捉えられた。

表92 A058遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 坏	(120)×(690)×370 ロクロ成形 外体下端一回転ヘラケズリ 底部 (切離し不明) →底縁・手持ちヘラケズリ	暗黒灰色 良	雲母・長 石類・赤 色・黒色 白色粒	1/5	
2	土師器 坏	—×(76)×(32) ロクロ成形 外体下端一回転ヘラケズリ	黒～ 赤褐色 良	雲母 長石類	底部 1/2	

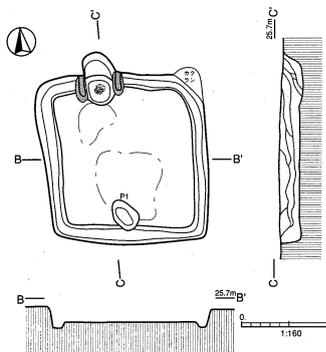


図122 A059

A059

遺 構 住居跡中央及び竈前に硬化面を認めた。柱穴は検出されず、P1は出入口に伴う。周溝は竈袖下まで全周する。竈は西コーナー寄りの北壁に設けられ、袖は粘土を積み上げて築き、内壁及び火床は赤化していた。覆土は人為堆積であり、色調等から暗褐色土、黒褐色土と捉えた。包含の多寡はあるがロームを含む。

遺 物 住居跡全体から散在して出土している。

所 見 遺構廃絶後、自然堆積を待たずに、投入土によって埋没している住居跡である。

表93 A059遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	須恵器 坏	132×76×39 ロクロ成形 外体下端-手持ちヘラケズリ 底部-全面・静止ヘラケズリ	灰褐色 良	雲母 白色粒	略完形	
2	土師器 坏	123×66×42 ロクロ成形 外体下端-回転ヘラケズリ 底部 回転糸切り→底縁・回転ヘラケズリ	暗褐～ 橙褐色 良	雲母	1/2	
3	土師器 坏	(116)×63×38 ロクロ成形 外体下端-回転ヘラケズリ 底部 回転糸切り→底縁・回転ヘラケズリ	橙色 良	雲母	1/3	
4	土師器 小型甕	—×78×(193) 外面 胴部-タテのヘラケズリ後下位斜～横位ヘラケズリ 内面 ヘラナデ 底部 全面・静止ヘラケズリ	橙褐色 良	雲母 長石類	胴部～ 底部	
5	土師器 甕	200×—×(175) ロクロ成形 外面 口縁-ヨコナデ 胴部下半-タテのヘラミガキ 内面 ヘラナデ	黒褐～ 橙色 良	雲母 長石類	口縁部 ～胴部 1/5	
6	土師器 甕	(206)×—×(209) ロクロ成形 外面 口縁-ヨコナデ 胴部下半-タテのヘラミガキ 内面 ヘラナデ	黒褐～ 赤褐色 良	雲母 長石類	口縁部 ～胴部 1/5	
7	須恵器 甕	—×158×(390) 外面 胴部-ナナメ平行タタキ後下位ヨコヘラケズリ 内面 ヘラナデ、ナデ 底部 不明	暗茶褐色 良	雲母 長石類	底部	
8	石器 軽石	長さ38×幅28×厚さ18 重量3.80g			略完形	
9	鉄器 刀子	長さ126×幅12×厚さ2 重量13.6g			略完形	

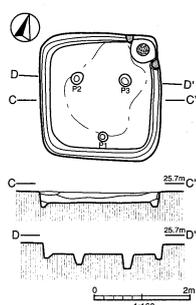


図123 A063

A063

遺構 ソフトロームの地床で、住居跡中央に広く硬化面を認める。柱穴はP2・P3と捉え、P1は出入口に伴うものである。周溝は竈袖下まで全周する。竈は北東コーナーに設けられており、袖は小規模である。赤化した火床を検出した。覆土は自然堆積であり、黒褐色土、褐色土、暗褐色土と捉えた。

遺物 「竹」「得」の墨書土器が出土している。

所見 本地区の特徴的な「文字」である「得」の墨書土器が出土するが、一方でⅢ・Ⅳ地区に多い「竹」も出土する。これらは集団を越えた共有化された「文字」があることを検討すべきかもしれない。

(単位mm)

表94 A063遺物観察表

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 坏	(120)×67×40 ロクロ成形 外体下端-回転ヘラケズリ 底部 全面・静止ヘラケズリ	灰褐色 良	長石	1/2	
2	土師器 坏	118×65×39 ロクロ成形 外体下端-回転ヘラケズリ 底部 回転糸切り→回転ヘラケズリ	褐色 良	雲母 長石類 黒色粒	2/3	
3	土師器 坏	156×80×50 ロクロ成形 外体下端-回転ヘラケズリ 粗いミガキ 内体部-密なヘラミガキ 底部 回転糸切り→回転ヘラケズリ 粗いヘラミガキ	黒～ 黒褐色 良	雲母 長石類	略完形	内黒

4	土師器 坏	124×75×32 ロクロ成形 外体下端-回転ヘラケズリ 体部外面~底部にクサビ状の刻み有り 底部-全面・回転ヘラケズリ	橙色 良	雲母 長石類	略完形	
5	土師器 坏	119×72×37 ロクロ成形 外体下端-回転ヘラケズリ 内体-密なヘラミガキ 底部 回転糸切り→回転ヘラケズリ	橙~ 暗褐色 良	雲母 長石類	完形	墨書 外体正位 「竹」
6	土師器 坏	159×76×51 ロクロ成形 外体下端-回転ヘラケズリ 内体-密なヘラミガキ 底部 回転糸切り→回転ヘラケズリ	黒~ 橙褐色 良	雲母 長石類	略完形	内黒
7	土師器 甕	206×-×(280) ロクロ成形 外面 口縁-ヨコナデ 胴部上半-ヨコのヘラナデ 胴部下半-ヨコの ヘラケズリ後下半タテのヘラミガキ 内面 ヘラナデ	暗赤褐色 良	雲母 長石類 白色粒	略完形	
8	土師器 小型甕	-×60×(63) 外面 ヨコヘラケズリ 内面 ヘラナデ	暗橙褐色 良	雲母 長石類 白色粒	底部	底部 木葉痕

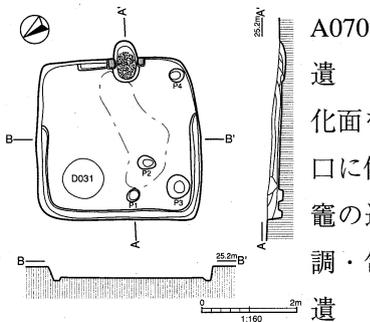


図124 A070

A070

遺構 ソフトロームを地床として、竈前から出入口にかけて帯状に硬化面を認める。P4・P5は床から0.15mの深さであるが柱穴と捉えた。P2は出入口に伴うものである。周溝は住居跡北半分に巡り、南側は竈左脇に検出した。竈の遺存は悪く、袖の一部と赤化した火床を検出したのみである。覆土は色調・包含物より捉え、緩斜面のため北側から流込んだ自然堆積である。

遺物 出土遺物は少なかった。

所見 竈が谷津側に向いた、掘込みが浅い住居跡である。

表95 A070遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 高台付坏	-×-×(35) 高台部径73 ロクロ成形 外体下端-回転ヘラケズリ 高台部-ナデ 底部 回転ヘラケズリ	暗褐色 良	白色粒 雲母 長石類	高台部 4/5	
2	土師器 坏	(148)×-×(43) ロクロ成形 内体-密なヘラミガキ	暗褐色 良	雲母	口縁片 1/4	
3	土師器 甕	(230)×-×(66) 外面 口縁-ヨコナデ 胴部-タテヘラケズリ 内面 ヘラナデ	暗褐色 良	雲母 長石類 白色粒	口縁片 1/3	

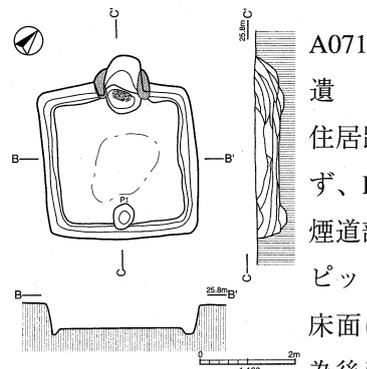


図125 A071

A071

遺構 床はロームブロックと暗褐色土の貼床。全体的に軟弱であるが、住居跡中央は硬化面を認め、硬化面はやや高くなっている。柱穴は検出されず、P1は出入口に伴うものと捉えた。周溝は竈袖下まで巡っている。竈袖は煙道部及び周溝上のみ残り、粘土を主体としていた。竈天井は崩落する。竈ピット坑底に赤化した火床を認めた。住居廃絶時に不用材を焼却したためか、床面には焼土と炭化粒が散布し、炭化材も検出した。覆土は廃絶後の焼却行為後は自然堆積であり、1~4・6~10層黒褐色土、5層灰褐色土、11層黒色土と捉えた。

遺物 出土遺物は住居跡に直接伴うというより、投入土とともに投げこまれたものと捉えた。
所見 不用材の焼却後、投入土によって焼却を行った様な住居跡であった。

表96 A071遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 坏	127×80×42 ロクロ成形 外体下端-手持ちヘラケズリ 底部-全面・静止ヘラケズリ	暗褐色 良	雲母 長石類	略完形	
2	土師器 坏	118×64×35 ロクロ成形 外体下端-回転ヘラケズリ	暗褐色 良	雲母 長石類	略完形	
3	土師器 坏	(149)×(77)×45 ロクロ成形 外体下端-回転ヘラケズリ 底部-回転ヘラケズリ	褐色 普	雲母 長石類	1/3	
4	土師器 甕	(202)×-×(47) ロクロ成形 外面 口縁-ヨコナデ 胴部-ナデ 内面 ナデ	暗褐~ 褐色 良	雲母 長石類	口縁片 1/3	
5	土師器 甕	(460)×-×- 外面 口縁~頸部-ヨコナデ 内面 ナデ	橙色 良	雲母 長石類	口縁片 1/5	
6	須恵器 大甕	(228)×-×(325) 外面 口縁~頸部-ヨコナデ 胴部-タテのタタキ後全面ナデ 下位ヨ コのヘラケズリ 内面 ナデ	暗黒灰色 普	雲母 長石類 白色粒	口縁~ 胴部 1/4	くすべ焼成 タタキ目不鮮明
7	須恵器 甌	(400)×-×(145) 外面 口縁-ヨコナデ 胴部-ヨコのタタキ後全面ナデ 下半-斜~横位ヘラケズリ 内面 ヘラケズリ	暗灰色 普	雲母 長石類 白色粒	口縁片 1/4	片口鉢の可能性 も有り
8	鉄製品 鎌	長さ(32)×幅23×厚み3 重量(3.60)g			先端部	

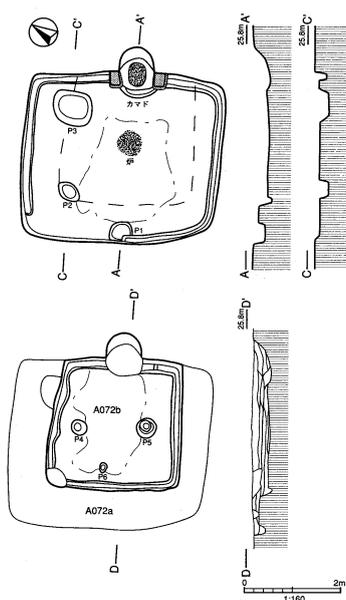


図126 A072a.b

A072a

遺構 A072bの上に営まれた竪穴住居跡である。横軸が長くなり、横幅のある住居跡となる。床はA072bの上である住居跡中央は方形に貼床となっており、その外側から壁にかけてソフトロームの地床である。貼床部は凹凸が著しいが、極めて良好な硬化面を残していた。柱穴はP2・P3が配置上で相当するが、判然としない。P1は出入口に伴う。周溝は、南西壁中央から西コーナーで途切れていた。覆土は1・5・10層暗褐色土、3層灰褐色土、11層黒色土と捉えたが、10・11層は人為的堆積であった。竈は4層に捉えた。住居跡中央に、火床状の赤色硬化を認めた。やや凹み状となっているが、ピット等は検出しなかった。

遺物 出土遺物は少なく、傾向を捉えることはできなかった。
所見 竈を構築した壁の共用と、周溝も北東壁は一部共用しており、A072bと竈の位置の変更を伴わない、床面積の拡大を目的とした拡張による建替えの住居跡と捉えた。

A072b

遺構 A072bの下に検出され、竈壁である北東壁を共有する竪穴住居跡である。床は貼床で、竈前から出入口にかけて良好な硬化面を認めたが、住居跡中央はやや凹んでいる。柱穴はP4・P5と捉え、P6は出入口に伴う。周溝は竈壁である北東壁下は共有しており判然としないが、全周していると判断した。竈は本住居跡の竈位置にA072aが再構築したのか、検出されなかった。覆土はA072aへの拡張・替えに伴い人為的に埋戻されており、ロームを含む1・2層褐色土、3層黒褐色土であり、A072aの貼床と

して充填したものと捉えられた。

遺物 住居跡上部をA072aに壊されているため、遺物の出土は極めて少ない。かろうじてA072aが貼床とした覆土に残っていた状態である。

所見 A072aの竈袖の構築材に焼土が混入することから、本住居跡の竈材を一部転用したと判断した。

表97 A072a遺物観察表

(単位mm)

No	種別器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	須恵器 坏	124×54×38 ロクロ成形 底部 回転糸切り→未調整	灰色	白色粒	1/2	
2	土師器 坏	(122)×64×35 ロクロ成形 外体下端-回転ヘラケズリ 底部 全面・回転ヘラケズリ	暗黒灰 ~橙褐色 良	雲母 長石類	1/2	
3	土師器 坏	(125)×660×370 ロクロ成形 外体部下端-回転ヘラケズリ 底部 回転糸切り→底縁・回転ヘラケズリ	橙褐色 良	雲母 長石類	1/4	
4	土師器 坏	(130)×73×38 ロクロ成形 外体下端-回転ヘラケズリ 底部-切離し不明→回転ヘラケズリ	橙色 良	雲母 長石類	1/2	
5	土師器 坏	(140)×(74)×41 外体下半-回転ヘラケズリ	褐色 良	雲母 白色粒	1/5	墨書 外体正位 「万」
6	土師器 小型甕	(136)×-×(50) 外面 口縁-ヨコナデ 胴部-タテのヘラケズリ 内面 ヘラナデ	橙色 良	雲母 長石類 白色粒	口縁部 ~胴部 1/2	
7	須恵器 甕	(232)×-×(90) 外面 口縁-ヨコナデ 胴部-タテのタタキ 内面 ナデ	灰褐色 良	雲母 長石類 白色粒	口縁部 1/5	
8	石器 不明	長さ103×幅98×厚さ46 重量476.3g			完形?	頁岩
9	鉄器 刀子	長さ184×幅13×厚さ3 重量22.0g			完形	

表98 A072b遺物観察表

(単位mm)

No	種別器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 坏	(116)×60×36 ロクロ成形 外体下端-回転ヘラケズリ 底部-回転糸切り→底縁・回転ヘラケズリ	褐色 良	雲母多 長石類	1/2	
2	石器 不明	長さ222×幅123×厚さ45			完形?	砂岩

第2項 掘立柱建物跡

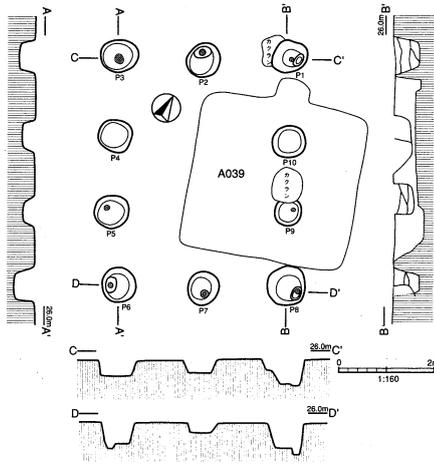


図127 B001

B001

遺構 2×3間の側柱のみの掘立柱建物跡である。四隅の柱穴は掘込みがやや深く、中間の柱穴はやや浅くなっていた。P4にて柱痕を検出した。他の柱穴は覆土の乱雑さから柱材は引抜かれたと捉えた。覆土はローム包含に多寡はあるが、暗褐色土を主体とし、層にしまりを認めた。

遺物 土師器小片や縄文時代早期・条痕文小片が稀に出土する。

所見 A039と重複するが、P9・P10がA039の覆土を掘込んでおり、本建物跡がA039より新しい遺構である。また、P2・P10の覆土中に入る攪乱は、柱材の引抜きの際の折損残部の腐植した土層の可能性もあろう。

表99 B001遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 坏	一×(740)×(250) ロクロ成形 外体部下端一静止ヘラケズリ 底部一静止ヘラケズリ 破片のため切り離し不明	黒褐 良	雲母 石英 長石	底部 1/3	

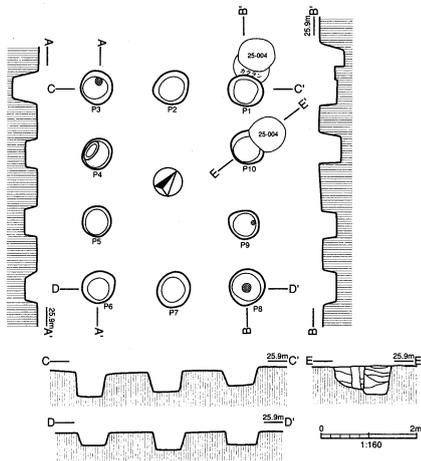


図128 B002

B002

遺構 2×3間の側柱のみの掘立柱建物跡である。北西列のP0・P9・P10が深く、他の柱穴は掘込みが浅くなっている。P1・P5・P9にて柱痕を検出した。他の柱穴は覆土堆積の乱雑さから柱材は引抜かれたと捉えた。覆土は、ロームの包含に多寡はあるものの、暗褐色土を主体としていた。

遺物 土師器小片が出土している。

所見 B003と重複するが、覆土から本建物跡が新しい所産である。

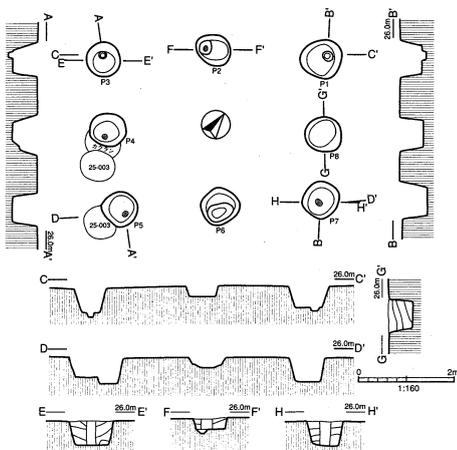


図129 B003

B003

遺構 2×2間の掘立柱建物跡である。長軸方向の中間の柱穴は浅く、他は掘込みの深いものとなっている。柱痕はP2・P3・P5・P7にて検出した。覆土はローム包含の多寡で捉え、暗褐色土を主体とする。

遺物 土師器小片が出土している。

所見 B002と重複するが、重複する柱穴覆土から本建物跡が古い所産と捉えられた。全体の柱穴配置は台形状となり、本遺跡では比較的例の多い2間四方となる建物跡である。

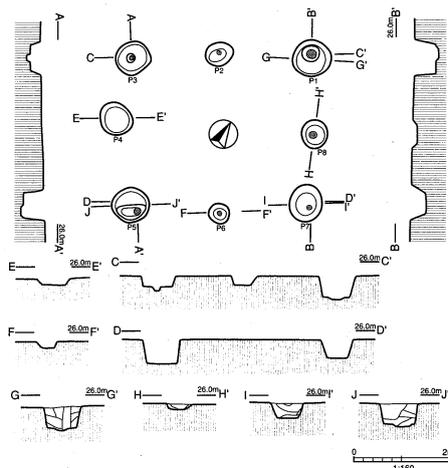


図130 B004

B004

遺構 2×2間の側柱のみの掘立柱建物跡である。四隅の柱穴は深く、中間の柱穴は掘込みの浅い建物跡である。柱痕はP1・P2・P6に検出した。他の柱穴は、覆土の乱雑さから柱材を引抜かれたものと捉えた。覆土は、ローム包含の多寡等で捉え、暗褐色土が主体であった。

遺物 土師器片が出土するが埋置ではなく、充填土とともに流込んだものと捉えた。

所見 四隅の柱穴に比し、中間の柱穴は平面規模も小さく、掘込みも浅く、貧弱なものであった。建物の荷重を考慮された掘込みと捉えた。

表100 B004遺物観察表

(単位mm)

No	種別器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 坏	—×(74)×(15) ロクロ成形 外体下端—静止ヘラケズリ 底部 静止ヘラケズリ	黒褐色 良	雲母 長石類	底部 1/3	くすべ焼成
2	土師器 坏	(136)×—×(37) ロクロ成形	褐色 良	雲母多 長石類 白色粒	口縁片 1/5	

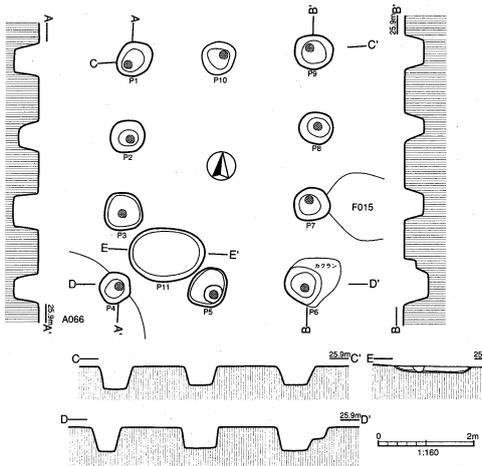


図131 B005

B005

遺構 2×3間の側柱のみの掘立柱建物跡である。P11は建物跡に伴うものと捉えた。柱痕はP2・P4にて検出し、各柱穴の覆土はよく突固められていた。覆土は、ローム包含の多寡等で捉え、暗褐色土が主体であった。

遺物 P11からは土師器坏が出土している。

所見 全体的に四隅の柱穴より、中間の柱穴が浅い傾向が窺えた。掘立柱建物跡を建てるにあたり、建物の荷重が考慮されたものとも考えられる遺構であった。

表101 B005遺物観察表

(単位mm)

No	種別器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 坏	(149)×(72)×42 ロクロ成形 外体下端—回転ヘラケズリ ヨコナデ 内体—密なヘラミガキ 底部 回転糸切り→回転ヘラケズリ後静止ヘラケズリ	褐色 良	雲母 長石類	1/2	墨書「生」 外体正位

第3項 土坑

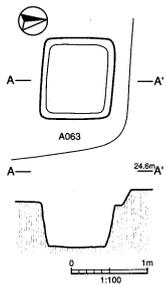


図132 D002

D002

遺構 A023の床面に検出された土坑。平面形は方形で、壁は略垂直であり、若干凹凸ある坑底であった。A023の調査において検出したため、覆土は捉えなかった。

遺物 土師器小片が出土するが、A023を掘込んだ時の流込みと判断した。

所見 調査当初はA023に伴うピットと考えられたが、床面に散布する炭化材が本土坑上にはないことから別遺構と捉えた。奈良・平安時代の所産としたが、壁の遺存状況等から時代は新しくなる可能性もある。

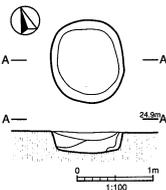


図133 D003

D003

遺構 小規模なタライ状の土坑である。ソフトロームを略垂直に掘込み、坑底は平坦であった。坑底に硬化面は認められない。覆土は、自然堆積で4層に捉えた。

遺物 土師器・須恵器の小片が出土する。

所見 形状などからすると縄文時代・中期初頭の感じをうけたが、出土遺物や

覆土から奈良・平安時代の土坑と捉えた。

表102 D003遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 坏	(140)×(67)×44 ロクロ成形 外面 体部下端一回転ヘラケズリ 内面 粗いミガキ 底部 回転糸切り→底縁・回転ヘラケズリ	橙褐色 良	雲母少	1/2	
2	土師器 坏	—×—×— ロクロ成形 内面 粗いミガキ	橙褐色 良	雲母	口縁片	墨書 外体 「□」

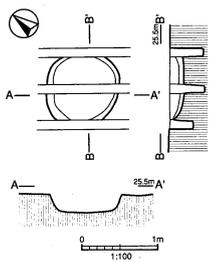


図134 D007

D007

遺構 平面形は略円形で、若干凹凸のある坑底であった。壁は斜めに立上がり、坑底との境が不明瞭ではなかったかと捉えている。覆土は炭化粒を含み、黒褐色土を主体とした自然堆積であった。

遺物 出土は無かった。

所見 攪乱が大きく、遺構の観察が難しい遺構であった。畝痕に入込む土と覆土が、色調差があることから奈良・平安時代と捉えた。

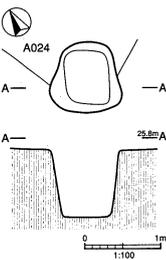


図135 D008

D008

遺構 A024の南コーナーに重複して検出した。平面形は方形で、均整のとれた形状を有している。

遺物 出土は無かった。

所見 当初は攪乱とみえた状態から、A024より本土坑が新しいと判断した。奈良・平安時代の土坑だが、形状等から新しい時期かも知れない。

D012

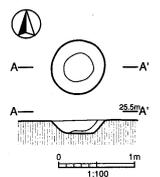


図136 D012

遺構 ソフトロームを掘込んだボウル状の円形の土坑であり、坑底は丸底気味である。覆土は黒褐色土を主体とした自然堆積である。

遺物 土師器小片が若干出土している。

所見 出土遺物から奈良・平安時代の所産と捉えた。用途は不明である。

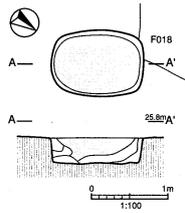


図137 D025

D025

遺構 坑底は平坦、壁は略垂直に立上がり、断面は盥状である。坑底から壁にかけて火熱痕が認められた。覆土は当初の土坑廃絶後に自然堆積により埋没し、再度、掘返された後の人為堆積であり、上層には焼土が厚く堆積している。

遺物 土師器小片や、器形は不明であるが鉄器が出土している。

所見 遺物から奈良・平安時代の所産と捉えた。坑底の被熱痕、覆土上層の焼土層と火の使用に係る土坑と捉えられるが、用途は不明であった。

表103 D025遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 高台付坏	—×—×(18) 台部径(72) ロクロ成形 外面 高台部—ナデ 底部—不明	褐色 良	雲母長石 類赤色黒 色白色粒	高台部	
2	土師器 坏	—×—×— ロクロ成形 外体下端—回転ヘラケズリ 底部 底縁・回転ヘラケズリ	褐色 良	雲母 長石類	底部片	ヘラ書「□」 外底
3	鉄器 刀子	長さ(152)×幅6×厚さ2.1 重量4.6g			刃中位 ~茎	

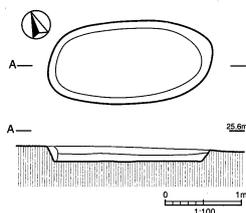


図138 D027

D027

遺構 平面形は楕円形で、ソフトロームを浅く掘込んだ坑底は平坦である。壁は長軸が略垂直であり、短軸方向も坑底から急に立上がっている。覆土は自然堆積であり、暗褐色土・黒褐色土を主体として、色調・包含物から3層に捉えた。

遺物 揭示すべき出土遺物は無かった。

所見 覆土などから奈良・平安時代の所産と捉えた。

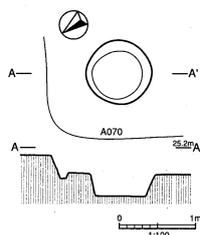


図139 D031

D031

遺構 A070の南コーナーに掘込まれた土坑であり、坑底は平坦である。壁は略垂直となっている。ローム粒を包含する黒褐色土が主体の覆土である。

遺物 土師器片が若干出土している。

所見 形状からA070の西側に点在する奈良・平安時代の土坑群と近似し、同様の土坑と判断した。床面精査時に検出のため、新旧関係は捉えられなかった。

表104 D031遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 小型甕	(184)×—×(87) 外面 口縁—ヨコナデ 胴部—タテのヘラケズリ 内面 ヘラナデ	黒褐~ 暗褐色 良	雲母 白色粒 黒色粒	口縁 ~胴部 1/4	

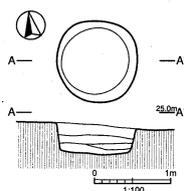


図140 D033

D033

遺構 緩斜面に所在する。平面形は円形で、坑底は平坦、断面形は盥状である。人為的堆積の覆土で、掘立柱建物跡の柱穴覆土に類似する。柱痕状の覆土も認められるが、柱痕とは捉えられなかった。

遺物 土師器小片が若干出土している。

所見 出土遺物から奈良・平安時代の土坑と判断した。

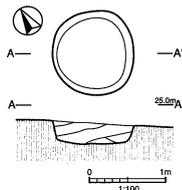


図141 D034

D034

遺構 緩斜面に所在する。平面形は楕円形で、坑底は平坦、断面形は盥状である。覆土は人為堆積であり、掘立柱建物跡の柱穴覆土に近似する。

遺物 土師器小片が若干出土している。

所見 出土遺物から奈良・平安時代の土坑と判断した。掘立柱建物跡の柱穴に類似するが判然としない。

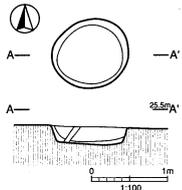


図142 D035

D035

遺構 緩斜面に所在する。平面形は楕円形で、坑底は平坦、断面形は盥状となっている。覆土は人為堆積であり、掘立柱建物跡の柱穴覆土に近似している。

遺物 土師器小片が若干出土している。

所見 出土遺物から奈良・平安時代の土坑と判断した。北からD034・D036と3基並んで検出された土坑であり、形状・覆土とも近似している。

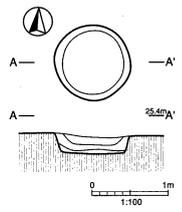


図143 D036

D036

遺構 平面形は円形で、坑底は平坦、断面形は盥状となっている。覆土は人為堆積であり、掘立柱建物跡の柱穴覆土に近似する。

遺物 土師器小片が若干出土している。

所見 出土遺物から奈良・平安時代の土坑と判断した。掘立柱建物跡の柱穴に類似するが判然としない。D034・D035と並んで検出されたが、他に対応するピットが認められず、単独の土坑として報告する。

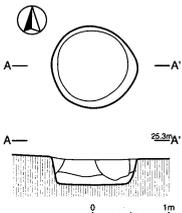


図144 D037

D037

遺構 平面形は円形で、坑底は平坦、壁は垂直である。覆土は人為堆積であり、掘立柱建物跡の柱穴覆土に近似する。

遺物 土師器小片が若干出土している。

所見 出土遺物から奈良・平安時代の土坑と判断した。掘立柱建物跡の柱穴に類似するが判然としない。D034等と近似している土坑である。掘立柱建物跡の柱穴とするには対応するピットが検出されず、単独の土坑として取扱った。

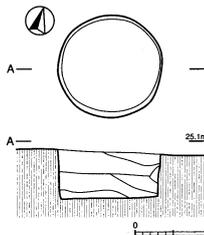


図145 D039

D039

遺構 平面形は円形で、坑底は平坦、壁は垂直である。深さは0.55mと類似する土坑に比べ、やや深くなっている。覆土は人為堆積であり、掘立柱建物跡の柱穴覆土に近似する。

遺物 土師器小片が若干出土している。

所見 出土遺物から奈良・平安時代の土坑と判断した。なお、A070の西側にはD033～D037・D039と、掘立柱建物跡の柱穴に類似するが判然としない土坑が、検出されている。

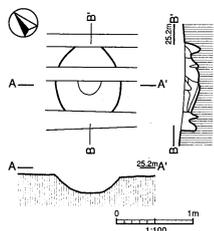


图146 上谷遗址I地区中世以降遺構配置図

第5節 中世以降

第1項 土 坑

D001



遺 構 畝による攪乱を被り、不明瞭な土坑である。覆土は堆積状況や包含物から人為堆積を示した。ともに暗褐色土であった。2・3層は炭化材を、3層はロームを包含していた。

遺 物 土師器小片が稀に出土した。1は土師器・坏片の墨書土器である。

所 見 覆土の状態から中世以降の所産と捉えた。土師器片の出土は流込みと判断した。

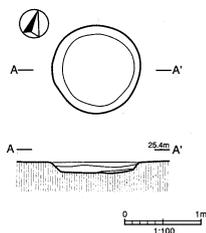
図147 D001

表105 D001遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 坏	-×-×- 口ク口成形	褐色 良	雲母	口縁片	墨書「口」 外体

D014



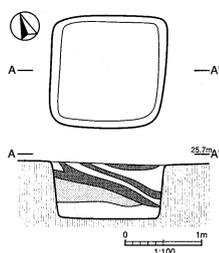
遺 構 円形の土坑であり、坑底は凹凸を有しながらも略平坦である。覆土は1層暗褐色土、2層黒褐色土、3層褐色土と捉えた。2層は炭化材が層を形成する状態である。

遺 物 遺物は出土しなかった。

所 見 覆土は自然堆積のように見えるが、包含物から人為的堆積を窺わせる。ロームへの掘込みが浅い、遺構上部を失った簡便な炭窯の様でもある。

図148 D014

D018



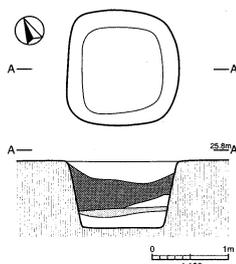
遺 構 方形の炭窯であり、炭化材の投入を多く認めた。坑底は平坦であり、壁は略垂直に立上がっている。覆土は黒褐色土(1・5・8層)、暗褐色土(2・4・6・10層)、黒色土(3・7・9層)と色調で分層でき、互層状態であった。各層に包含の多寡はあるが炭化材とロームの混入があり、また、西側からの投入が認められる人為堆積である。

遺 物 遺物は出土しなかった。

所 見 近世あるいは近代の炭窯と捉えられ、規模・形状から本格的な炭の生産用というより、自家消費分を焼くような遺構である。

図149 D018

D019



遺 構 方形の炭窯であり、炭化材の投入を多く認めた。坑底は平坦であり、壁は略垂直に立上がる土坑である。覆土は黒褐色土(1・3・5・7層)、黒色土(2・5層)、黒褐色土(6層)と捉え、各層に包含の多寡はあるが炭化材とロームの混入があり、互層状態であった。東側からの投入を窺わせている。

遺 物 遺物は出土しなかった。

所 見 D018と同様の炭窯である。近世あるいは近代の炭窯と捉えられ、規模・形状から本格的な炭の生産用というより自家消費分を焼くような遺構である。

図150 D019

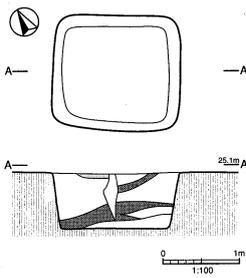


図151 D020

D020

遺構 方形の炭窯であり、炭化材の投入を多く認めた。坑底は平坦であり、壁は略垂直に立上がる土坑である。覆土は黒褐色土（1・2・4・6層）と黒色土（2・5層）であり、いずれも包含の多寡はあるが、炭化材とロームの包含を認める。特に2・4層は炭化材層と言うべきものであった。

遺物 時代・時期を窺う遺物は出土しなかった。

所見 D018・D019と同様の炭窯である。近世あるいは近代の所産と捉えられる。やはり前の2遺構と同じく、生産用と言うより自家消費分の炭窯である。

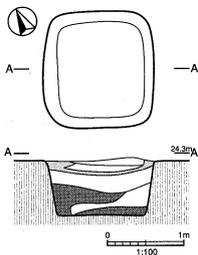


図152 D021

D021

遺構 方形の炭窯であり、炭化材の投入を多く認めた。坑底は平坦であり、壁は略垂直に立上がる土坑である。坑底から壁にかけて一部炭化材が密着し、火熱痕を認め、部分的に赤化していた。覆土は暗褐色土（1・3層）と褐色土（2・4・6層）、炭化材層（5・7層）に捉えた。いずれも包含の多寡はあるが、炭化材とロームの包含を認める。

遺物 土器片や時代・時期を窺う遺物は出土しなかった。

所見 D018～D020と同様、近世から近代にかけての炭窯である。やはりその規模からみて、生産用と言うより自家消費分の炭窯である。炭窯と言うより「炭焼穴」と呼んだ方がよい遺構である。

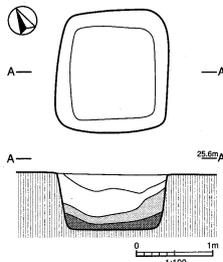


図153 D032

D032

遺構 方形の炭窯であり、炭化材の投入を多く認めた。坑底は略平坦、壁は略垂直に立上がる土坑である。坑底から壁中位まで火熱痕が認められ、炭化材や焼土が密着している。覆土は1～4層とも褐色土であるが、ローム及び炭化材の多寡によって分層した。特に3・4層には細かな炭化粒が多量に含まれていた。

遺物 土器片や時代・時期を窺う遺物は出土しなかった。

所見 一見、覆土は自然堆積を窺わせるが、覆土下層の微少な炭化粒等の包含物から、遺構廃絶後に一気に埋戻したものと捉えられた。

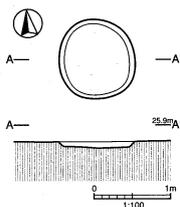


図154 D038

D038

遺構 掘込みは浅く、ソフトロームを坑底とする凹み状の土坑である。覆土は、遺構が浅いため黒色土の1層しか捉えられなかった。炭化粒を多含し、焼土を少含する覆土である。

遺物 出土しなかった。

所見 調査時に覆土の埋没は、その状態から人為堆積と捉えた。形状・覆土はD014に近似している。覆土に炭化粒を多含することから遺構上部が失われた炭窯とも考えられるが、D018～D021・D032は方形であり、これら方形である炭窯に対してD014と同様に本土坑は浅く、円形のD014と本土坑がそれに該当するかは判然としなかった。

D365

遺構 A025の覆土上層に構築された土坑である。平面図が作成できなかったが、覆土堆積状況から長軸は1.52～1.64m程度の規模の土坑と捉えられる。坑底は硬化しており、焼土の散布も認めた。覆

土は1層暗褐色土と2層黒褐色の人為堆積と捉えられ、1層は上部に炭化材片を含むが、2層には殆ど含まない。包含量の差はあるが、それぞれロームブロックを含んでいた。

遺物 時代・時期を判別できる遺物の出土はなかった。

所見 炭化材の包含や覆土からD018～D021と同様、近世から近代にかけての炭窯と捉えた。やはりその規模からみて、生産用と言うより自家消費分の炭窯である。A025を掘込んで築いていたため、全体の形状は捉えきれなかった。

第2項 溝状遺構

E001

遺構 調査区外の西側まで延びる、長大な直線的な溝である。調査区外を調査しておらず、全体は不明である。坑底は略平坦である。壁の立上がりは地区によって若干に異なりはあるが、急傾斜乃至やや傾斜の緩いものとなっている。立上がりは緩い所は壁の崩壊とも考えられる。E002とT字状となり消えている。覆土は暗褐色土1層のみで、分層はできなかった。

遺物 縄文土器片や土師器等の小片が若干出土するが、いずれも流込みであった。

所見 E002の一部として使用されたものという。近世・近代の所産であろう。

E002

遺構 調査区外の西側まで延びる、長大なL字状の溝である。調査区外を調査しておらず、E001同様に全体は不明である。坑底は凹凸はあるが比較的平坦であり、壁の立上がりは急である。覆土は暗褐色土1層のみで、分層はできなかった。

遺物 縄文土器片や土師器等の小片が若干出土するが、いずれも流込みであった。

所見 覆土等から、近世・近代の所産と捉えた。次の記録もあり、追記しておくべきだろう。E001・E002について土地の方にお聞きすると、E002の大半は「明治時代初め頃に林地を畑として開墾した際に、『境界』『根切溝(篠切)』として掘込まれた」ものであり、「戦後、北側へ畑を広げることに伴い、溝を延ばした」という。そして発掘調査が行われる直前まで、この溝は機能していたと言う。

これからするとE001とE002の屈曲部から南側を初めに掘り、溝に区画された中を畑地としたこととなる。そして第二次世界大戦後にE001を廃止し、E001とE002のT字状の屈曲部から北側へE002を延伸し、E001はその機能を失ったこととなる。

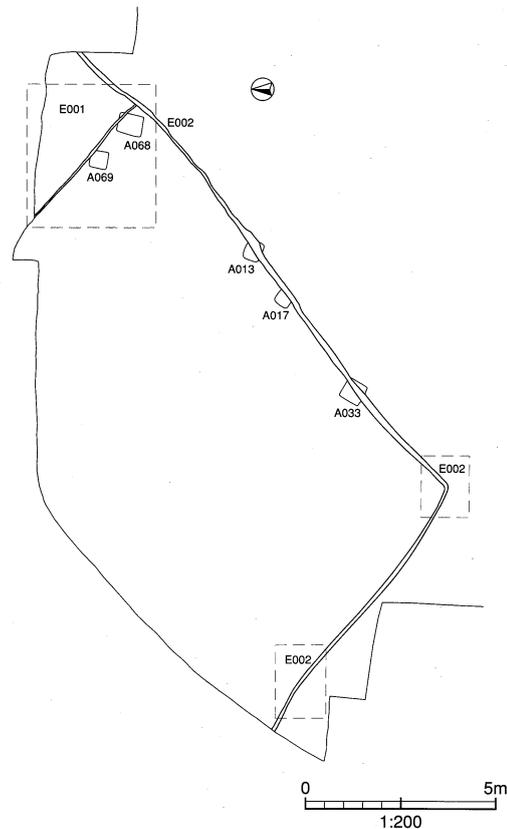


図155 E001・E002

第2章 小 結

以上、上谷遺跡 I 地区の概要について記してきたが、再度、検出された遺構を確認すると、

縄文時代	竪穴住居跡 1 軒・炉穴 31 基・土坑 16 基、
弥生時代	竪穴住居跡 35 軒・方形周溝墓 2 基・土坑 1 基、
古墳時代	竪穴住居跡 13 軒・土坑 2 基、
奈良・平安時代	竪穴住居跡 25 軒・掘立柱建物跡 5 棟・土坑 14 基、
中世以降	土坑 9 基・溝 2 条、

を数える。全体的には台地平坦面に展開し、斜面部での検出は少ない傾向が窺えた。ここでは調査成果のうち一部について概要をまとめておきたい。

第1節 縄文時代

本地区の縄文時代の遺構は早期・条痕文期の炉穴を主体としており、住居跡の検出は 2 軒となっている。検出された遺構の所属時期は、早期・条痕文期が竪穴住居跡 1 軒・炉穴 31 基・土坑 7 基、中期・加曽利 E 期に属する遺構は土坑 4 基（うち、2 基は同一住居跡と捉える）、時期不明は土坑 5 基と出土遺物などから捉えた。

炉穴は 31 基を検出したが、出土遺物から野島期を中心とした炉穴群であろう。その検出位置は I 地区のうち II 地区に隣接する南東側に主に営まれていた。整理・報告上で便宜的に分離した地区であるが、I 地区南東から II 地区北西に広がるように炉穴は検出され、更に中央に空間を有して東西にそれぞれ連なるように営まれた傾向が窺われている。

中期・加曽利 E 期においては当該時期に属する 4 基の土坑を報告したが、D023・D024 については個別報告中にも記したとおり、遺構状況及び遺構距離から本来は 1 軒の竪穴住居跡と捉えられるものであった。柱穴や床の硬化面は捉えられていないが、D023 が炉跡であり、D024 は埋甕と判断されるものである。埋甕とした土器から加曽利 E Ⅲ 期と捉えた。また、2 基の当該時期と捉えられる土坑が検出されている。

第2節 弥生時代

上谷遺跡 I 地区では、弥生時代の遺構が主体を占めている。検出された 35 軒の竪穴住居跡は何れも後期の所産と捉えたが、図 48 にみるように調査区中央から北側のやや北東寄りに形成されていた。7 m を超える大型の竪穴住居跡は点在し、それを取り囲む様に中規模・小規模の住居跡が残されていた。また、D009 は土器棺としたが集落跡内に営まれ、方形周溝墓 2 基はそれぞれ竪穴住居跡域からはずれる様に北東と南側にそれぞれ 1 基営まれていた。

各竪穴住居跡の遺構規模は下記及び図 156・図 157 のとおりとなるが、主軸方位は北北西から西の範囲内であり、略同一方位以内と捉えられる。また、主軸（長軸）の規模から竪穴住居跡を捉えると、

9 m を超える長軸を有する竪穴住居跡・・・	1 軒	A008(9.7m)
8 m 台の長軸を有する竪穴住居跡・・・	1 軒	A001(8.1m)
7 m 台の長軸を有する竪穴住居跡・・・	2 軒	A016(7.1m)・A045(7.45m)
6 m 台の長軸を有する竪穴住居跡・・・	4 軒	A029(6.3m)・A047(6.1m)・A060(6.1m)・ A064(6.8m)
5 m 台の長軸を有する竪穴住居跡・・・	3 軒	A020(5.3m)・A032(5.55m)・A043(5.3m)

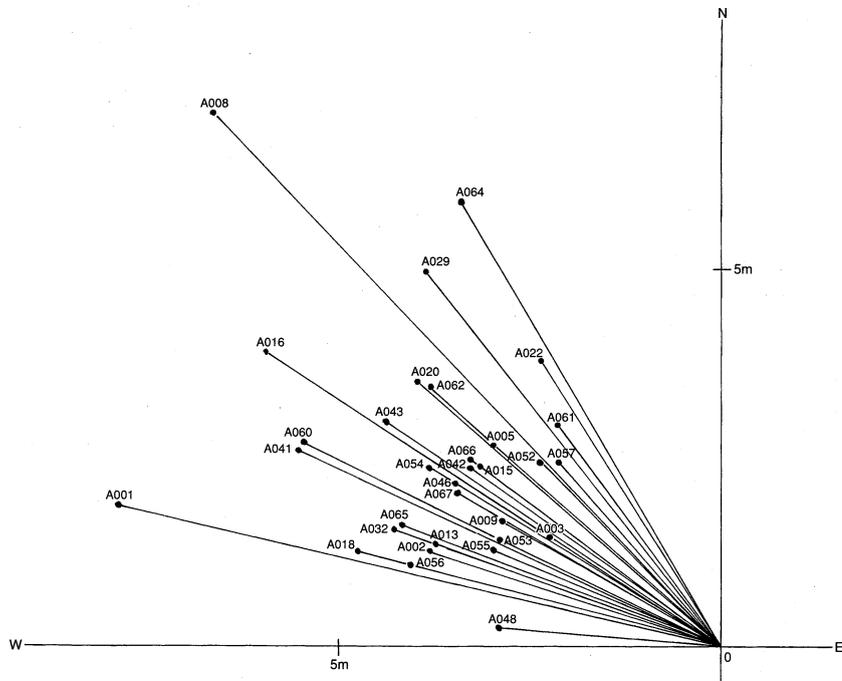


図156 弥生時代竪穴住居跡の方位と規模

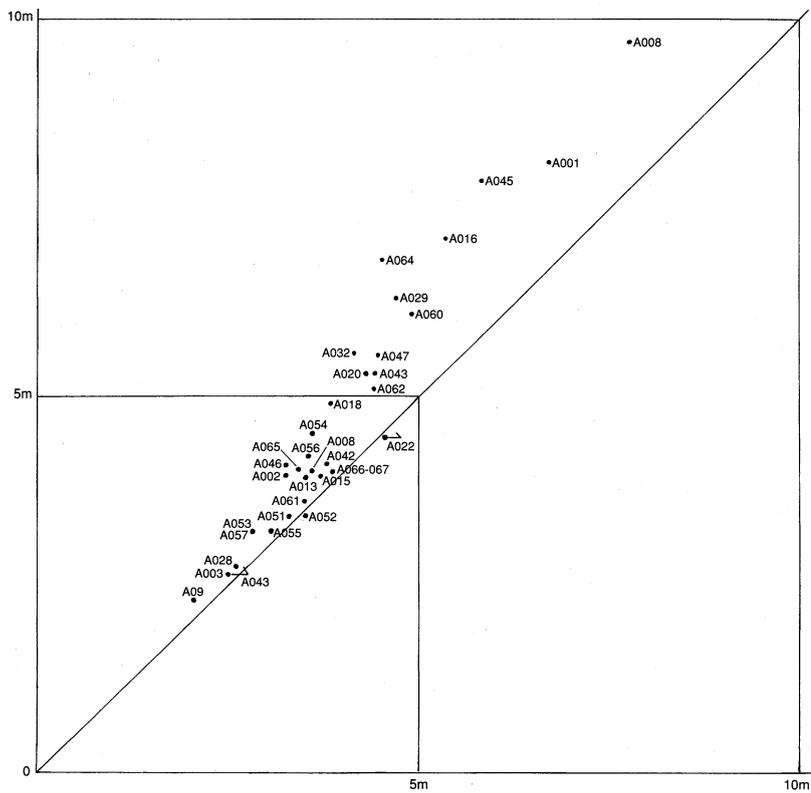


図157 弥生時代竪穴住居跡の平面規模

4 m台の長軸を有する竪穴住居跡・・・12軒	A005(4.0m)・A018(4.9m)・A022(4.45m) A042(4.1m)・A046(4.1m)・A054(4.5m) A056(4.2m)・A065(4.0m)・A066(4.1m) A067(4.0m)・A066(4.1m)・A067(4.0m)
3 m台の長軸を有する竪穴住居跡・・・9軒	A002(3.95m)・A013(3.95m)・A015(3.95m) A051(3.35m)・A052(3.4m)・A055(3.2m) A057(3.2m)・A061(3.6m)・A062(3.1m)
3 m未満の長軸を有する竪穴住居跡・・・4軒	A003(2.65m)・A009(2.3m)・A028(2.75m) A048(2.9m)

となっている。4 m台が12軒であり、3 m台が9軒となるが、3.8～4.2mの長軸規模の住居跡は12軒を数え、本地区では長軸規模の主体は4 m前後であると言える。

また、長軸×短軸からみる住居規模の比較では、図157から捉えられるように長軸4.5×短軸3.5m程度の規模が主体となっている。単純に床面の広さとは捉えられないが、15～16㎡程度が中心となっており、25㎡程度を超えるものは長軸が短軸に比して長くなっている。

第3項 古墳時代

古墳時代の遺構は竪穴住居跡13軒と土坑2基であるが、これらの遺構は上谷遺跡I地区の北西側に形成されており、その遺構配置に纏まりをもって検出された。上谷遺跡では当該年代の遺構は少なくV地区にて遺物等が出土しているが、集落跡としては本地区のみの検出であり、本来は西側に隣接する「栗谷遺跡」からの広がりとして捉えるべきかもしれない。やや不明瞭なA012を除くと、出土土器から4世紀後半から5世紀前半期の所産と捉えた。

竪穴住居跡の平面形は主として方形に近いものであり、主柱穴が判然としない遺構が多い。主軸の長さから住居跡規模をみると、

6 m台の主軸を有する竪穴住居跡・・・2軒	A014
5 m台の主軸を有する竪穴住居跡・・・3軒	A004・A007・A006・A019
4 m台の主軸を有する竪穴住居跡・・・4軒	A010・A031・A033・A068
3 m台の主軸を有する竪穴住居跡・・・4軒	A011・A012・A017・A069

のとおりとなっていた。そして主軸方位は図158のとおり、北西から西北西に主体を置き、A012が北北西を示し、例外的にA031が北東方向を示していた。

また、図159に図示したとおり、長軸×短軸からみる住居規模の比較からは、A007・A014の規模は本地区の当該時代の竪穴住居跡としても例外的な大きさとなり、20㎡程度がA004・A006・A010・A019・A031・A033・A068の7軒とその53.84%を占め主体をなしていた。また、12㎡前後の住居跡はA011・A012・A017・A069の4軒とその30.76%であり、これらから竪穴住居跡の規模としては大きく3群に捉えられよう。全体的に、主軸より横幅のある竪穴住居跡が多い傾向が窺えた。

略方形の形状を有する竪穴住居跡はA010・A011・A014・(A017)・A031・A033・A069の7軒であり、主軸と大きく異なる幅を有する住居跡はA004・A006・A007・(A012)・A019・A068の6軒となっている。平面形状が不明瞭な住居跡はA012の1軒であり、形状は整然とした竪穴住居跡群であった。

主柱穴が明瞭に検出された住居跡は、A004・A010・A014の3軒であり、遺存状況からくる平面規模や形状差を捉えることはできなかった。

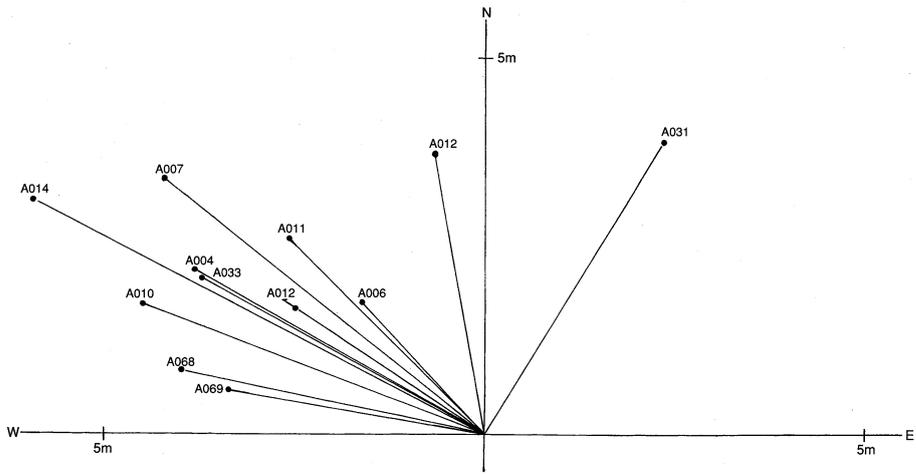


図158 古墳時代竪穴住居跡の方位と規模

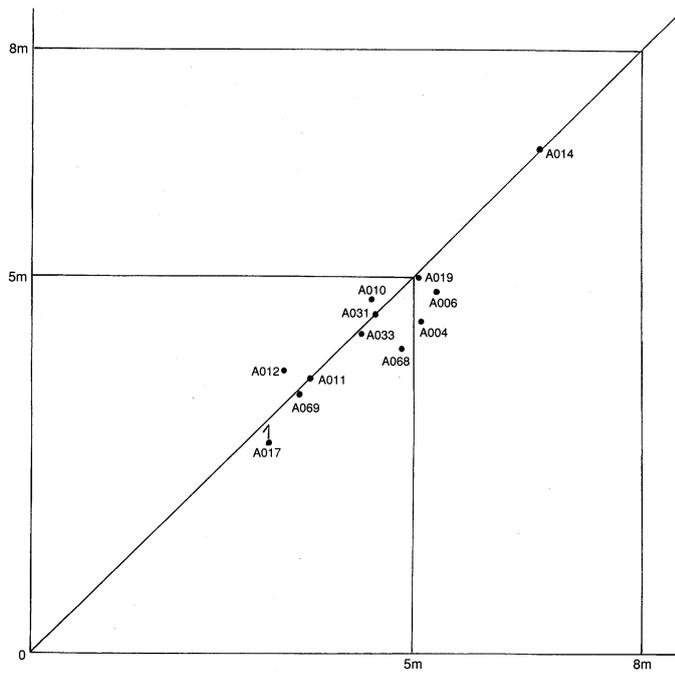


図159 古墳時代竪穴住居跡の平面規模

第4節 奈良・平安時代

第1項 概要

上谷遺跡全体では当該年代の遺構が主体を占めるが、上谷遺跡Ⅰ地区では弥生時代に次ぐ遺構検出であった。その遺構配置はⅠ地区中央にその集中を認めるが、北側中央に2軒の竪穴住居跡と1基の土坑を検出しており、大きく2地区に分かれる。北側に点在する当該年代の遺構は、栗谷遺跡として捉えるべきかもしれない。

第2項 墨書土器

上谷遺跡Ⅰ地区からは65点の墨書土器等が出土しており、墨書52点、朱書3点、線刻4点、窺書6点である。「文字」としては墨書・朱書されたものが主体を占め、線刻・窺書は「×」等の記号化されたものが多い傾向を示している。文字の大半は判読不能であるが、判読できるものは、「得」8点9文字、「万」5点、「後」4点、「西」1点2文字、「家」1点2文字、「廿万」「有」「日」「具」「速」「竹」「生」各1点となっている。「廿万」を「万」の範疇として捉えれば、「万」は6点となる。また、「承和二年十八日進／野家立馬子召代進」墨書された、所謂「長文墨書土器」1点も出土している。

墨書土器等を出土した遺構は図160のとおりであり、遺構数は、竪穴住居跡17軒・掘立柱建物跡1棟・土坑3基となっている。検出した竪穴住居跡25軒のうち17軒からの出土を見ており、竪穴住居跡からの出土割合は高いと言えよう。

また、特に、「得」「万」の文字が多く、図161のように「得」は8軒の、「万」は4軒の竪穴住居跡から出土している。A029・A040の2軒のみ、それぞれの文字が重複して出土していた。出土遺構の配置は点在しており、Ⅰ地区の竪穴住居跡のうち集中する傾向は窺えないが、集落跡の南西側の住居跡に多いと言えよう。

判読可能な文字数29文字のうち「得」は31.03%、「万」は17.24%を占めている。上谷遺跡Ⅱ地区の奈良・平安時代の遺構からは「得」が97点（墨書93点・線刻3点・朱書1点）、「万」が46点（墨書45点・線刻1点）の出土を見ており、Ⅰ地区からⅡ地区にかけての居住した集団の「共有化」した「文字」と捉えられよう。特にこの2文字に注目すると、「得」「万」のⅠ地区の文字数14文字においては、出土比率は9文字：5文字となっており、この2文字の構成比は64.28%：35.71%である。Ⅱ地区では97点：46点（67.83%：32.16%）となっており、それぞれ2/3：1/3前後の占有率が窺われるものとなっている。

第3項 長文墨書土器について

上谷遺跡をはじめとする東部遺跡群にあっては、所謂「長文」の墨書土器がやや多く出土している。その中心は「部姓+名」「名」を主とするものであるが、紀年銘や目的を併せて記すものも出土している。

上谷遺跡Ⅰ地区において出土した判読できる長文の墨書土器は、A036にて出土した土師器坏に墨書された「承和二年十八日進／野家立馬子／召代進」の1点である。体部外面に「承和二年十八日進」の紀年銘を、体部内面から内底面にかけて「野家立馬子／召代進」の部姓+名と目的が2行書きに墨書されたものである。「立」の文字が、部姓か名なのか判然としないが、「召代進」は「召代進上」と捉えた。また、性別は名からは捉えられなかったものである。承和二年は西暦835年であり、年号と日のみの墨書であり、月は記されていなかった。「召代進」は「召される代わり進上」と釈文され、何らかの祭儀に係わる用途に用いられたものと判断されるが、「延命祈願」の土器として捉えた。

なお、「野家」を部姓にあたるものとしてよいか、資料を持ち合わせず、判断に迷うものであった。



图160 上谷 I 地区墨书土器等出土遺構

報告書抄録

ふりがな	ちばけんやちよしかみやいせき(かしょう) やちよカルチャータウンかいはつじぎょうかんれんまいぞうぶんかざ いちょうさほうこくしょⅡ
書名	千葉県八千代市上谷遺跡(仮称)八千代カルチャータウン開発事業関連埋蔵文化財調査報告書Ⅱ
巻次	第1分冊 本文編
編集者名	朝比奈竹男
編集機関	八千代市遺跡調査会
所在地	〒276-0045 千葉県八千代市大和田138-2 (八千代市教育委員会生涯学習部生涯学習課内) TEL 047-483-1151
発行年月日	西暦2005年(平成17年)3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
かみや 上谷遺跡	やちよほしなあざかみや 八千代市保品字上谷1786他	12221	77	35度 45分 24秒	140度 7分 50秒	1992047～ 19921014 19950710～ 19960219 19960401～ 19970331 19970401～ 19980331 19980401～ 19990331	総面積 114,300㎡	住宅地造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
上谷遺跡	包蔵地	縄文時代	竪穴住居跡 1基 土坑 16基 炉穴 31基	縄文土器、石器	
	集落跡	弥生時代	竪穴住居跡 35軒 方形周溝基 2基 土坑 1基	弥生土器、石器	
	集落跡	古墳時代	竪穴住居跡 13軒 土坑 2基	土師器、土玉、勾玉	
	集落跡	奈良・平安時代	竪穴住居跡 25軒 掘立柱建物跡 5棟 土坑 14基	土師器、須恵器、鉄製品	墨書・線刻等の文字資料を 多く出土
	包蔵地	中近世以降	土坑 9基 溝 2条		

千葉県八千代市

上 谷 遺 跡

(仮称) 八千代カルチャータウン開発事業関連埋蔵文化財調査報告書Ⅱ

— 第1分冊 本文編 —

2005年 3月31日発行

編 集 八千代市遺跡調査会

千葉県八千代市大和田138-2

(八千代市教育委員会生涯学習部生涯学習課内)

発 行 大成建設株式会社

東京都新宿区西新宿1-25-1
